

563
29



0057666-001

563-29

海軍要覽

海軍有終会・編

海軍有終会

昭和16-19年版

昭和16-19

AJG

563
29



0057666-001

563-29

海軍要覧

海軍有終会・編

海軍有終会

昭和16-19年版

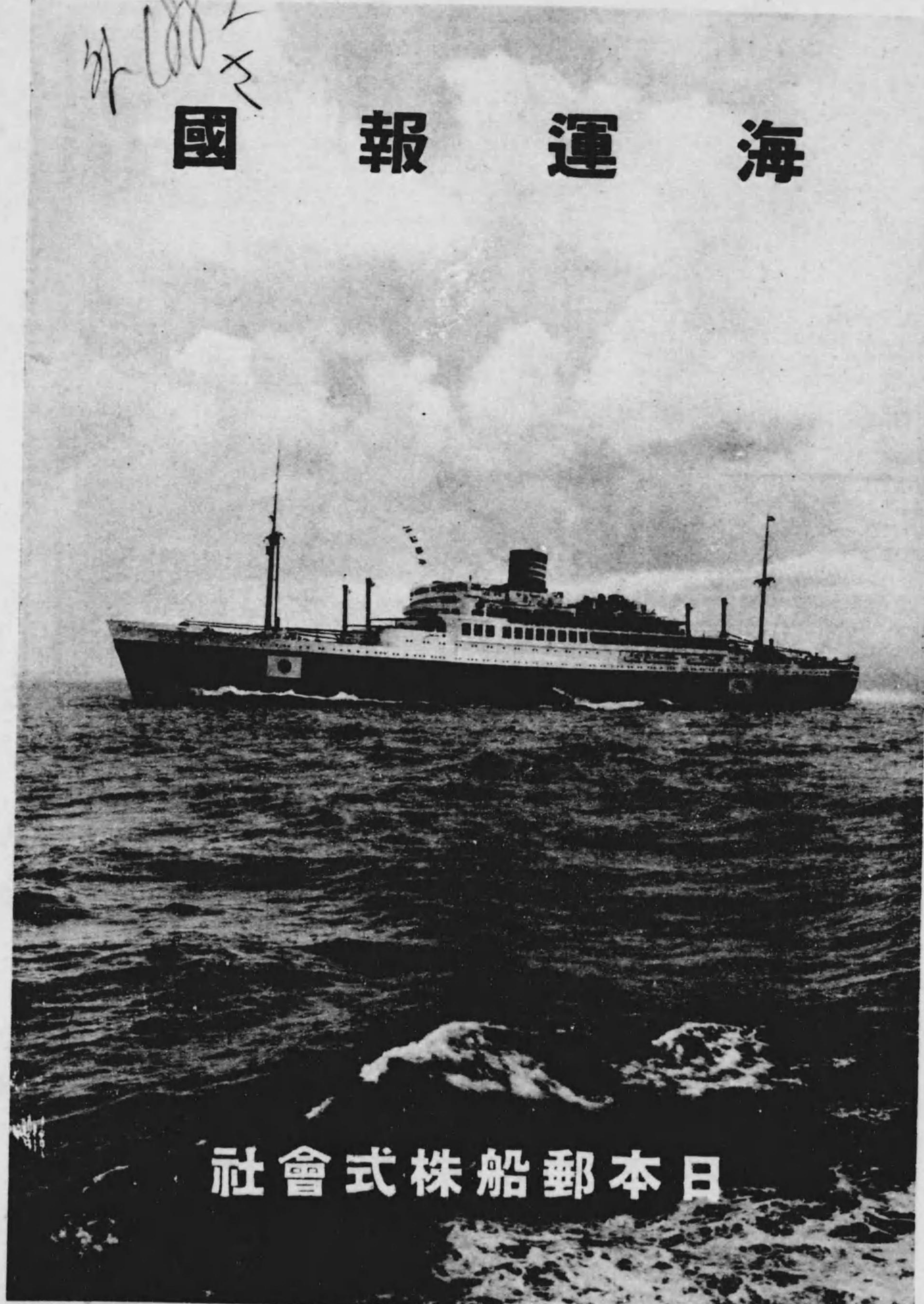
昭和16-19

AJG

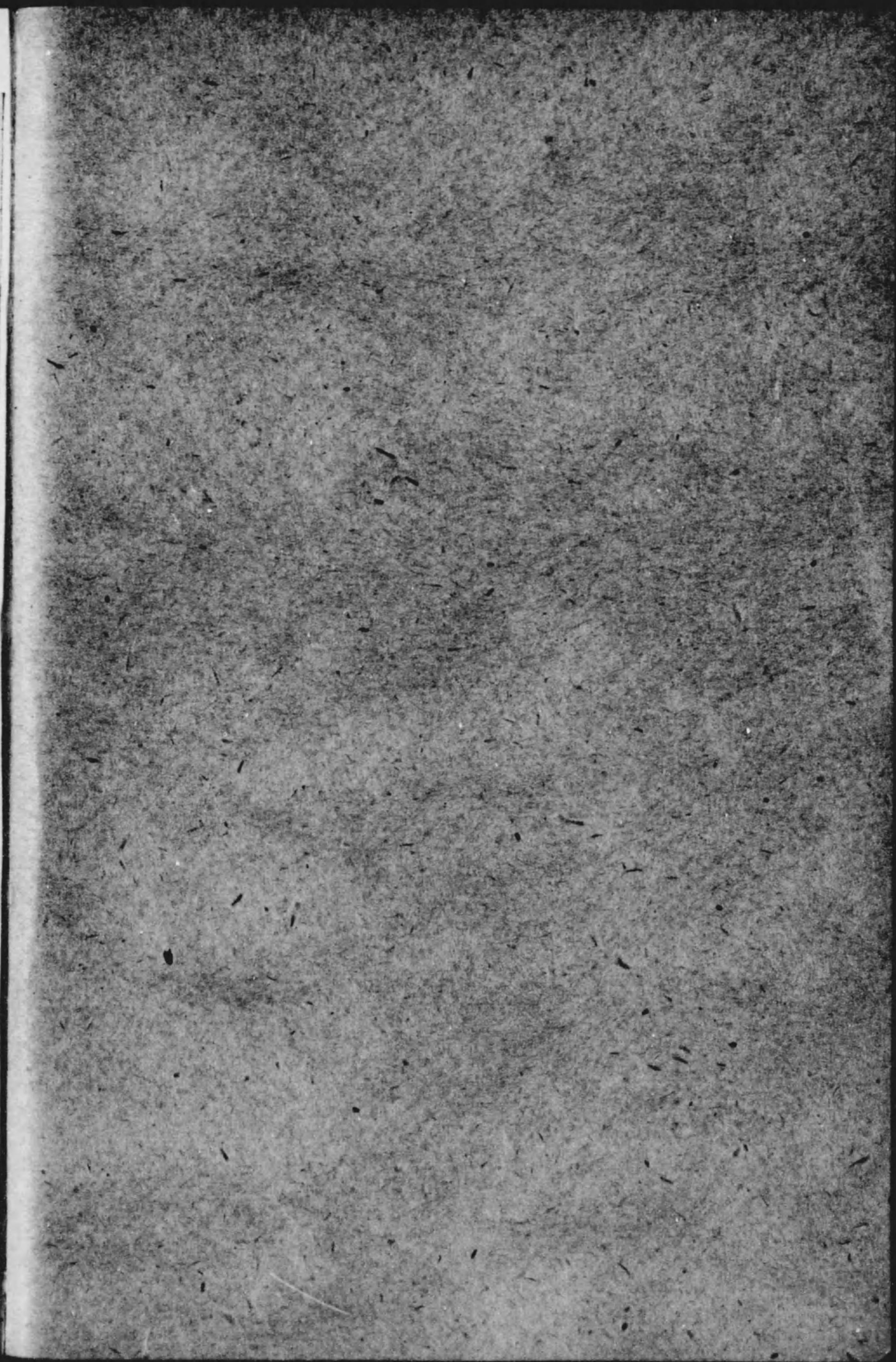
26. 5. 30

外 1882

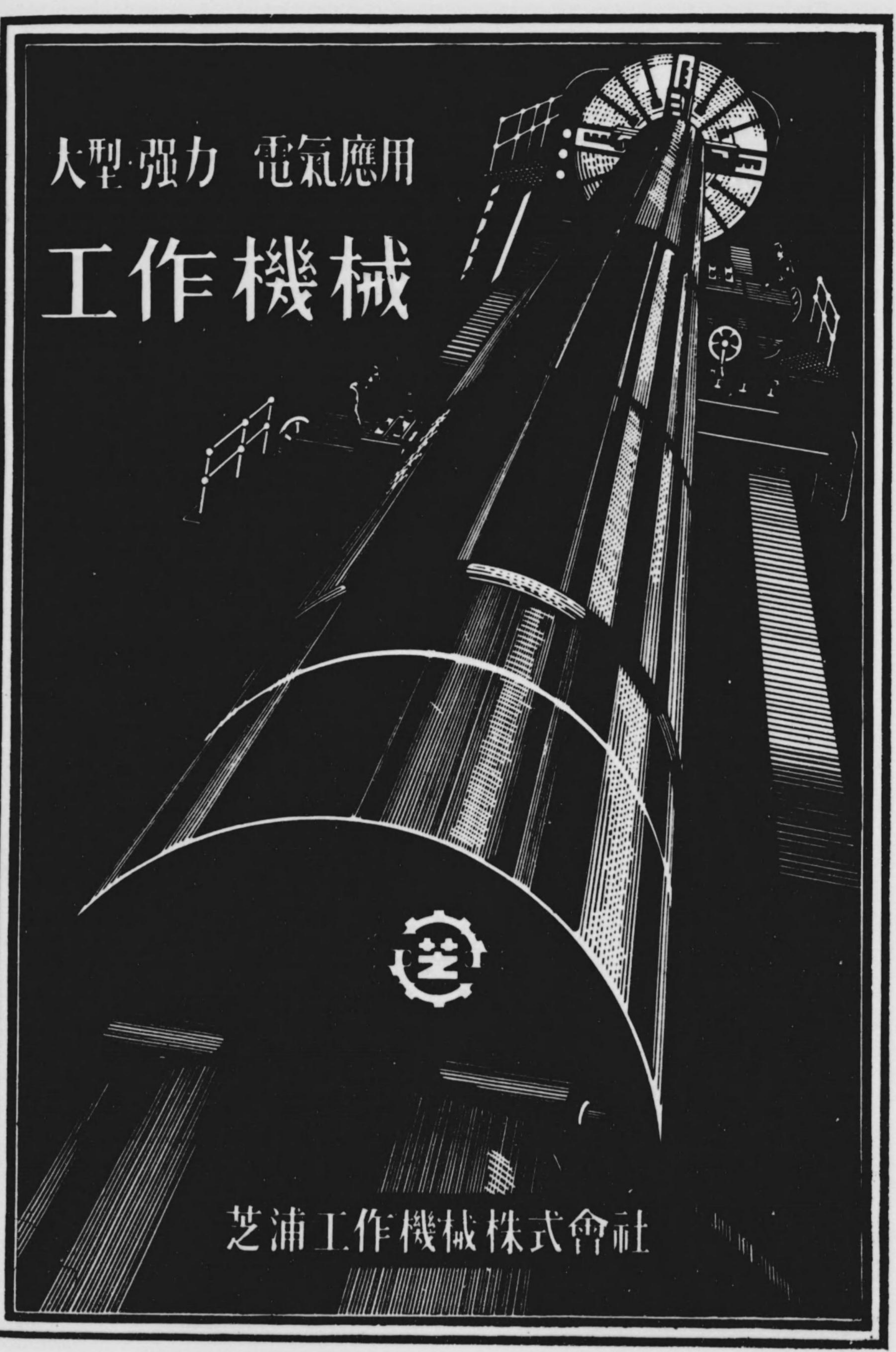
海 運 報 國



日本郵船株式會社



大型強力 電氣應用
工作機械



芝浦工作機械株式會社



東洋リリウム株式會社

營業所 大阪市東區瓦町二丁目・三和ビル
電話 北濱 二〇六〇番 三九一〇番
五三六四番

東京支店 東京市京橋區銀座四丁目 三和ビル
電話 京橋 一七〇一番 二五六四番

工場 兵庫縣伊丹町 電話伊丹 番六九番
大阪福島 九三二番



株式會社

東京石川島造船所

取締役社長 荒木彦弼

本社 東京市京橋區佃島五十四番地

(電話京橋二、一六一番ヨリ二、一六九番)

製品製作

艦艇、船舶、ディーゼル遠洋漁船、起重機船、浚渫船、船用蒸氣タービン、汽機、復水器、加熱器、蒸化器、熱交換器、航空發動機及び附屬品一式、空氣壓縮機、高壓瓦斯壓縮機、ターボブローアー、送風機、真空蒸溜機、各種起重機、石炭及び鑛石積卸装置、コンベヤー、捲揚機、ホイスト、ニューマチック・コンベヤー、汽罐、蓄壓器、ダイセスタター、キルン、瓦斯溜、煙突、水壓鐵管、サーヂタンク、ローリングダム、テンターゲート、ストニー・ゲート、決瀉板、水壓機、フイルター・プレス、高壓唧筒、特殊冷凍機、鐵骨建築、橋梁、亞鉛鍍鐵塔、製鐵用諸機械、セメント製造用諸機械、化學工業諸機械、瓦斯製造諸機械、鑛油蒸溜機、マーグ・ギヤー、

營業品目

兵器・工作機械・理化學機械及計器類・鑄造品・化學工業用機械及装置・輸送機械・風力機及空機調整用機器・汽罐及給炭機・空氣機械・ロードローラー
切削工具類・ゲージ類及測定器類・チャック類・鋸刃類・研磨材料

理研重工業株式會社

駐在所

本社 東京

舞鶴・吳・廣島

豊川・光・佐世保

營業所 大阪・名古屋・小倉・仙臺・京城・奉天・北京

新京・大連・天津

ピストンリング・自動車部品・發條類・代用燃料機・特殊鋼・各種鋼製品・鋼材・鍛造品・壓延品・其ノ他金屬材料



海軍省
其他
各官公署
御用



本社 神戸市神戶區明石町四七番地
支店 東京市麹町區丸の内二丁目二
出張所 東京市東區淡路町四丁目六一
宣傳所 大阪市南區心齋橋筋二丁目
同 東京市麹町區丸の内二丁目二
同 滿洲國新京大街二二三號

製造品目
絨類・毛布・オル・旗布シヤル
ン・フェルト・メモリヤス・モス
リン・毛絲

日本毛織株式會社

日毛プロク
昭和毛絲紡績株式會社



航空機用材料

デュラルミン・超デュラルミン
超々デュラルミン・エレクトロン
金屬製可變節及固定節プロペラ
其他航空機用特殊鋼品及鋼管

船艦用材料

シヤフト・シヤフトブラケット
船尾材・舵骨材・タービン翼車
罐 水ドラム・氣蓄器
鋼管・アルブラック復水器管
其他各種伸銅品・輕合金

住友金屬工業株式會社

大阪市此花區島屋町三七

軍用・商業用航空機
木製・金屬製プロペラー
航空用發動機・同部分品

設計製作



川西航空機株式會社

本社及工場

兵庫縣 武庫郡 鳴尾

東京事務所

東京市丸ノ内仲十三號館四號

電話西宮代表五〇二〇番(4)

電話丸ノ内(三)四四六六八七三五番

東京市京橋區銀座二丁目二

大倉商事株式會社

電話 京橋

二、一三〇—二、四九
七、二三一 番

製 一般機械器具類
品 一般兵器類
目 各種教練銃



中央工業株式會社

東京市京橋區木挽町三丁目四番地

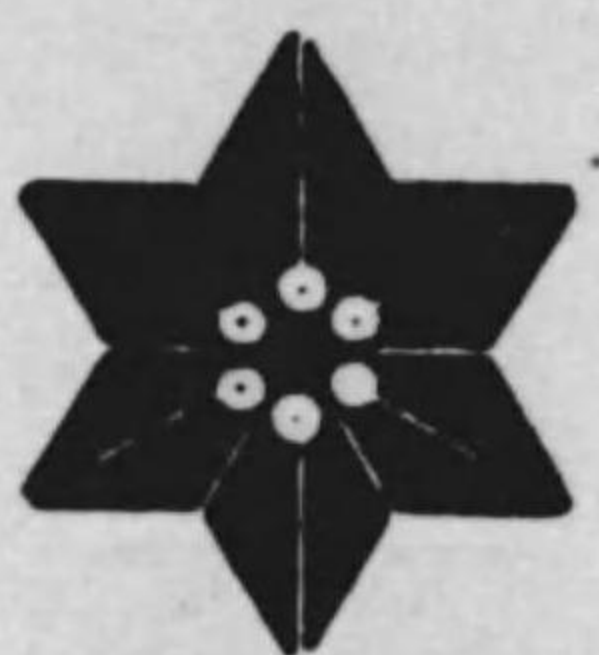
電話京橋(自九八九一
至九八九七)

工場及代理店

大森工場 東京市大森區堤方町二三番地
電話大森(自七五五一—至七五五三)
南部工場 東京府北多摩郡國分寺町
電話國分寺(自七九〇〇—至七九〇二)
王子工場 東京市王子區稻付島下町一五七一番地
電話王子(自二六三三—至二六三五)
新倉工場 埼玉縣北足立郡新倉村四三〇番地
電話新倉(自五〇〇一—至五〇〇三)
技術研究所 東京府北多摩郡小金井町六
電話小金井(自二六六一—至二六六三)
地方代理店 大倉商事株式會社支店出張所
教練銃代理店 株式會社大倉銃砲店

鋼索
麻網

創立明治二十年



東京製網株式會社

東京市日本橋區服橋三丁目五番地

工場
川崎工場 川崎市河原町
兵庫工場 神戸市兵庫區入江通
小倉工場 小倉市砂津

諸兵器ノ設計及製造



株式會社 萱場製作所

東京市芝區芝浦一丁目一番地一

電話三田(45)代表二一六一番(10)
宿直兼用二一六五番

創業明治五年
靴製造販賣



海軍省御用

大塚商店

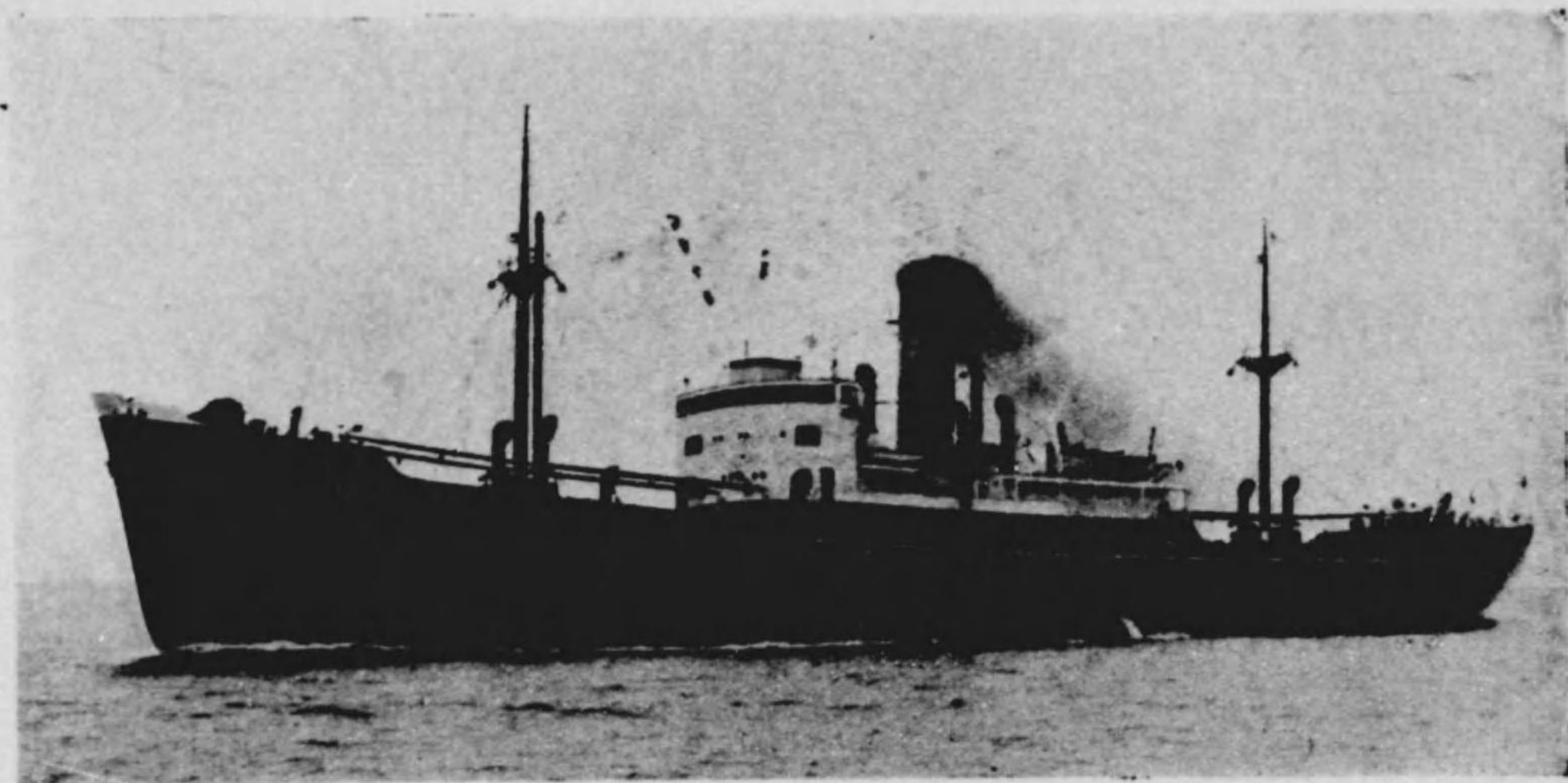
店主 大塚 菊雄

東京市芝區新橋五丁目十二番地
(省線新橋驛南二丁目電新橋五丁目電停際)

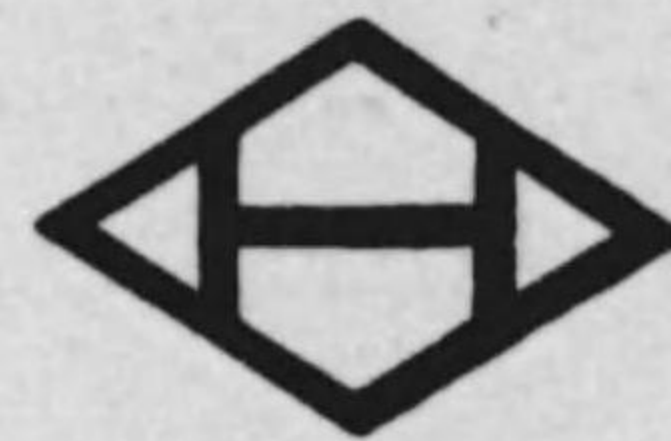
最新式製靴機械完備

出張所

電話芝(43)二〇二五(販賣部)
電話芝(43)三〇一八二(製靴工場)
振替東京六一九四八
江田島海軍兵學校構内



「九幸會」船物貨文註社會式株船汽陽會



株式
會社
播磨造船所

兵庫縣赤穂郡相生町

電話一四、一五、一六、二二番

神戸事務所 神戸市神戸區西町三十六番地(興銀ビル四階)

電話(代表)三宮 三四五〇番

東京事務所 東京市麴町區丸ノ内(東京海上ビル新館二階)

電話丸ノ内二七一七番

吳出張所 吳市仲通

電話吳四二五五番

- 一、船舶、艦艇ノ新造及修理工事
- 一、水壓鐵管、橋梁、各種鐵柱、鐵桁補強、鐵骨工事
- 一、陸船用汽機汽罐製作
- 一、英國ロイド協會公認タムラーク電氣熔接棒製作販賣
- 一、南洋木材直輸入製作販賣

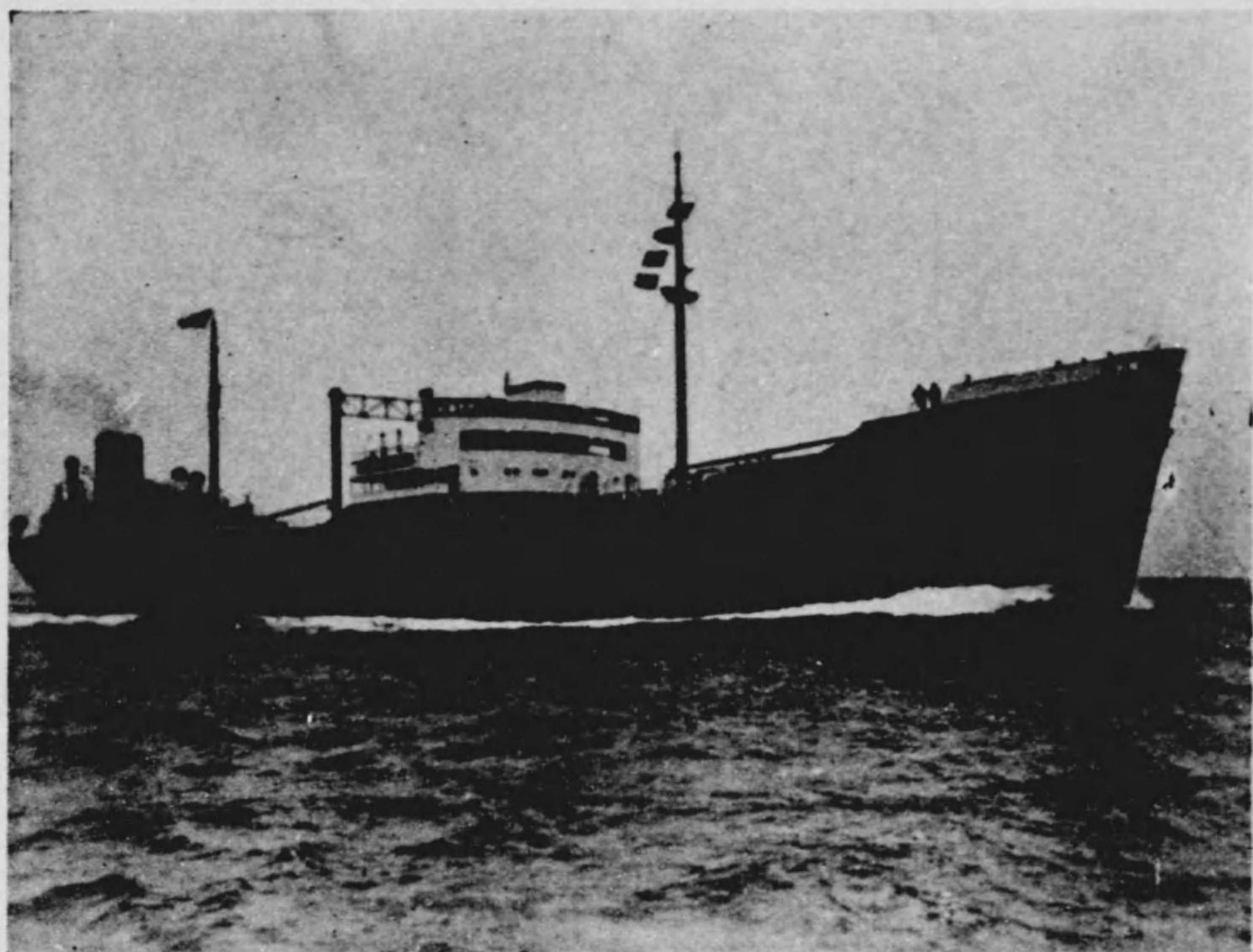


營業種目

- 航路標識航空標識
- 浮標及製缶
- 照明機械類
- 通信信號機類
- 鑄造及造船
- 兵器及全部品

日本光機工業株式會社

橫濱 電・鶴見・3781・ 鶴見



東邦丸 (油槽船重量一三五〇噸)



飯野海運産業株式會社

東京市丸ノ内明治生命館

貨物船

君島丸 第二龍寶丸 泰福丸
 國島丸 安島丸 大黒天丸
 王島丸 民島丸 第一犬島丸
 漢江丸 東裕丸 第二犬島丸
 光島丸 多喜丸 第六犬島丸
 福浦丸 彦島丸 高島丸
 常島丸 第一鷹取丸
 二十隻 重量 約六〇、〇〇〇噸
 外建造中ノモノ 約四〇、〇〇〇噸

油槽船

富士山丸 東邦丸
 極東丸 第二鷹取丸
 亞東丸 第三鷹取丸

六隻 重量 約五五、〇〇〇噸
 外ニ建造中ノモノ 約四〇、〇〇〇噸

本社 東舞鶴市

支店 東京、神戸、吳、徳山、若松、舞鶴、小樽
 出張所 宮津、仙崎、豊川、四日市、光、岩國、京
 城、大連、奉天、天津等

株式會社 藤永田造船所

本社

大阪市住吉區柴谷町四拾四番地

電話櫻川四五、四六、八〇七、八〇八番

船町工場

大阪市大正區船町六番地

電話泉尾七三一七三四番

東京出張所

東京市麴町區丸ノ内三丁目二番地
 三菱二十一號館

電話丸ノ内二六一七番

神戸出張所

神戸市神戶區明石町三十二番地
 明海ビル三階

電話三宮 三〇七八番



東京航空計器株式會社

本社並工場 川崎市木月二二〇〇番地
狛江工場 東京府下北多摩郡狛江村
羽田工場 東京市蒲田區羽田江戸見町



日本光學工業株式會社

本社 東京市品川區大井森前町五四四七番地
電話大森(06)八七二一—八七二六・五三六九・八四七一



愛知時計電機株式会社

主要製品

飛行機・飛行艇・發動機
砲・水雷兵器・通信器類

本社
瑞穂工場
伊保ヶ原飛行場
出張所

名古屋市熱田区千代字船方一五
名古屋市昭和区堀田通三ノ三
愛知縣西加茂郡保見村
東京市京橋區木挽町五ノ一



疲労恢復に オリザニン

強力ビタミンB剤

——疲労の原因除去——

疲労の原因は糖分の分解に依つて生じた乳酸が、体内に蓄積するからであると言はれ、ビタミンB₁は乳酸の生成を防止すると共に過剰の乳酸を分解して、疲労の防止、恢復に顕著な奏效を見ることは眞驗諸家の眞證するところである。

(未・錠・液・エキス・注射液)

食慾不振に

強力消化酵素

タカチアスターゼ

——澱粉以外も完全消化——

タカチアスターゼは澱粉糖化力の著しく強大なることは勿論、麦芽、蛋白質、ペプトン、脂肪、纖維素その他炭水化物分解酵素等數種を含有し、食慾不振、消化不良その他胃腸疾患に適應することを眞證されてゐる。

(錠) 30錠 100錠 (未) 14錠 25錠

三共株式会社

藤倉電線株式會社

光線



發動機着火裝置用高壓電纜



本社 東京 大阪 名古屋 京都 天津 上海
 代理店 三井物産株式會社

No. 103

健康日本の必需品

東洋一の醫藥用酵母培養工場にて製出されるわかもとは、特許培養わかもと酵母と新鋭アスペルギル菌の複合剤にして、國民の健康確保上最も頻繁に用ひられる必需品です。

本剤は三消化酵素に富み、強力ビタミンB₁B₂複合體も他のB剤に優つて同化性高き特長あり

胃腸強化・結核治療力増勢等に妊産婦の栄養・虚弱兒の救護著しき實効を發現し、特に米を主食とする人に通常の潜在性ビタミンB缺乏症を防止し慢性的の心身衰弱と體力不調を補正いたします。



價廉 日五社 (一) 價廉
 一四十六號 (一) 價廉
 (價廉にて特選定協りよに方場)



補本ともかわ
 東京・大阪・天津・京都・名古屋・上海・天津・北京・漢口・青島



日本通信工業株式會社

主要製品

各種無線通信機器
各種高級測定器
各種蓄電器
可聽變壓器
マイクロフォン

有線電話機及交換機
高聲器
高聲裝置
卓上彫刻機
タイムレコーダー

本社及工場 川崎市北見方二六〇番地
電話 玉川一七(營業專用)
溝ノ口二〇六、二〇八—二二二
二三—二三五

分工場 東京市大森區新井宿
同 大阪市旭區關目町



東海鉛管株式會社

アルミニウム箔
特殊輕合金鑄物
輕合金
環狀金屬衛帶
純鉛鍍金加工
鉛
鉛
鉛
茶
錫
錫

紙箔 鉛管 鋅糸

本社及工場 橫濱市神奈川區富家一丁目番地
電話 神奈川(4)局川奈
番八三四二—六三四二
東京市丸の内三ノ一仲三號館三號
電話 丸內(23)局七八七一・八七〇二・九六三〇番



株式會社

明治工業製造所

東京市品川區北品川
三丁目二五八
電話 高輪 五〇九
三〇六八八番番番

海軍、陸軍、鐵道、造船、航空、製紙
人絹、鑛山、電氣、土木、建築、其他
諸工業用ゴム及エポナイト製品一切

創業明治卅三年



株式會社

三井商店

東京市京橋區銀座二丁目三番地
電話 東橋 一一七一番・一一七二番
一一七三番・一一七四番
一一七五番・一一七六番

支店及出張所
大阪、神戸、橫濱、橫須賀、吳、門司、
大牟田、舞鶴、光、京城、大連、奉天、
新京、北京、天津

營業科目

諸機械類(築港、土木、造船、航空)
鐵道、鑛山、電氣、農耕、其他用)
鐵鋼其他金屬類、織物、塗料、ゴム
食料品、雜貨、各種工業用材料、原料
直輸出入(內外諸工業會社百餘社代理)

販賣總代理店

NSK

目種業營

ボール・ベアリング
ローラー・ベアリング
スチール・ボール

日本精工株式會社

東京市品川区東大崎二丁目
電話大崎(49)四一八一番(6)

支社及出張所 大阪・名古屋・小倉・札幌

工場 大崎工場・多摩川工場・藤澤工場

品製

のくち式ポンプ
エハラ軸流ポンプ
各種ポンプ
タービン水車
エハラ送風機
空気壓縮機
ターボ冷凍機
急速濾過機
齒車變速裝置
特殊機械・工作機械



株式會社

荏原製作所

取締役社長 富山一清

本社 東京市 蒲田區羽田三丁目

營業所 東京市 丸之内丸ビル

出張所 大阪市 北區朝日ビル

福岡市 片土居町四一

京城市 南大門通五丁目二四

新賣庫の開發
ルツペ鋼の先驅

日本火工株式會社
大江山ケル工業株式會社

取締役社長 森 曉

東京市京橋區寶町味の素ビル

株式會社日本製鋼所

東京市麴町區丸ノ内壹丁目貳番地壹

電話丸ノ内(23)代表二四五二―長二四五四番
三九五九、六一六八―九番

製 品

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 帆 | ダ | 飛 | 服 | 布 | リ |
| 織 | 物 | 蚊 | 行 | ホ | ネ |
| 帳 | 機 | 翼 | ツ | ― | ― |
| 原 | 翼 | 布 | ク | ス | ン |
| 絲 | 布 | 地 | 布 | ミ | シ |
| 絲 | 縫 | 帆 | 翼 | シ | ン |
| 絲 | 縫 | 布 | 縫 | シ | ン |
| 絲 | 縫 | 絲 | 縫 | 絲 | 縫 |

東京市日本橋際



帝國製麻株式會社

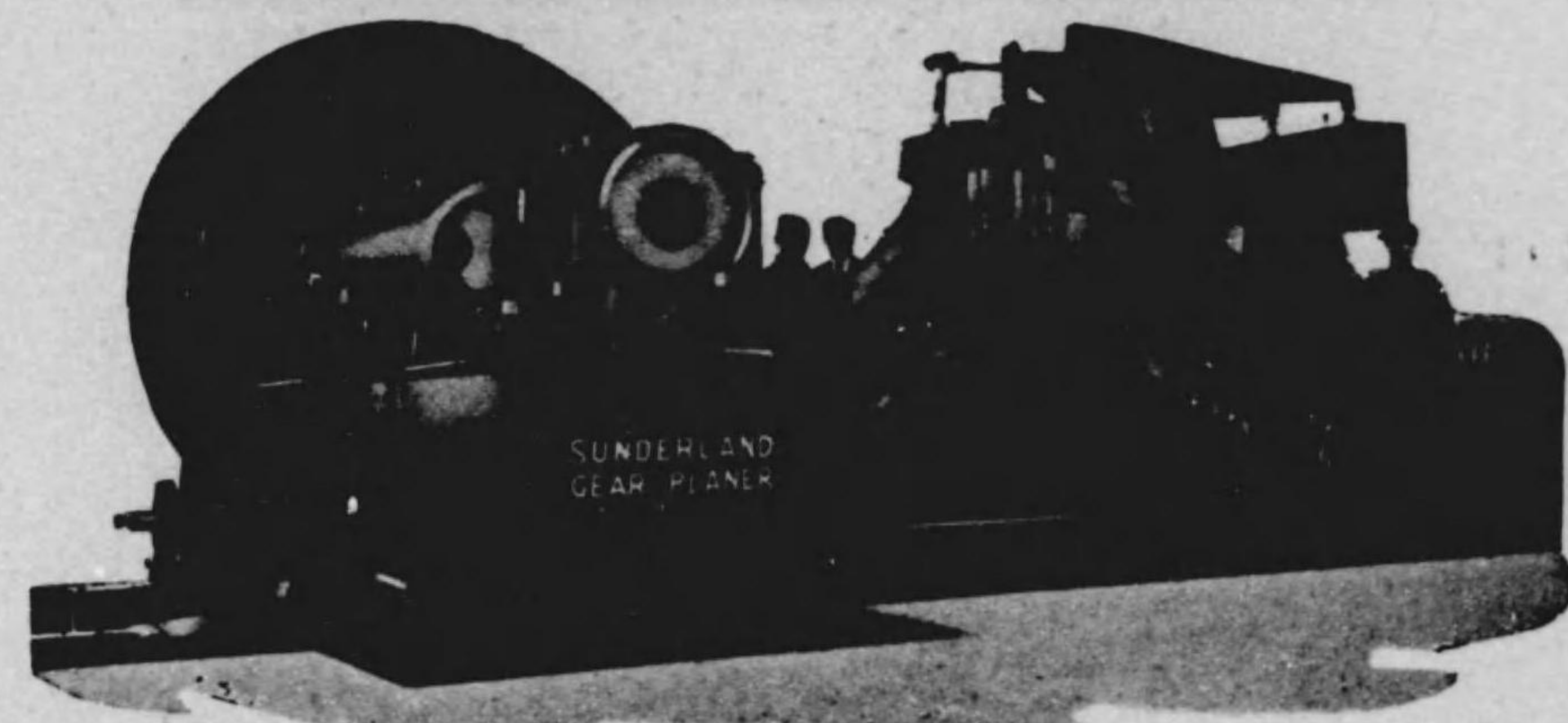
電話日本橋(24) 一二四一・一二四二・一二四三
一二四四・三九八七

振替口座東京二六四七四番

支店工場所在

| | |
|-----------------|------------|
| 支店 | 工場 |
| 東京市日本橋區室町一丁目一番地 | 大阪市西淀川區傳法町 |
| 大阪市北區宗是町一番地 | 大津市松本町 |
| 札幌市北七條東一丁目 | 栃木縣鹿沼町 |
| 京城市府黃金町二丁目 | 札幌市北七條東一丁目 |
| | 東京市王子區赤羽町 |

ASSOCIATED
British Machine Tool Makers Ltd.



J. PARKINSON & SON

“SUNDERLAND”

No. 35 DOUBLE HELICAL GEAR PLANER

180" DIAMETER x 30"

FACE x 26 MODULE



英國聯合工作機械製造株式會社
 日本及滿洲總代理店

株式會社

高田商會

本店
 大阪支店
 名古屋支店
 門司支店
 大連支店

其他支店出張所

東京市麴町區丸ノ内二丁目六番地
 大阪市北區中之島二丁目二十番地
 名古屋市區廣小路通七丁目一番地
 門司市西本町一丁目九百四十七番地
 大連市敷島町四十九番地
 橫須賀、舞鶴、神戸、吳、姫路、豐川、佐世保、札幌
 臺北、京城、奉天、新京、北京、天津、バタヴィヤ
 上海、倫敦、紐育、漢堡

海運報國



| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--|---|---|
| 北 | 南 | 阿 | 新 | 濠 | 印 | 比 | 泰 | 佛 | | | |
| 米 | 米 | 弗 | 西 | 洲 | 度 | 律 | 國 | 印 | | 沖 | 臺 |
| ~ | ~ | 利 | 蘭 | ~ | ~ | 賓 | ~ | ~ | | 繩 | 灣 |
| | | 加 | | | | | | | | 洲 | |
| | | ~ | | | | | | | | ~ | ~ |

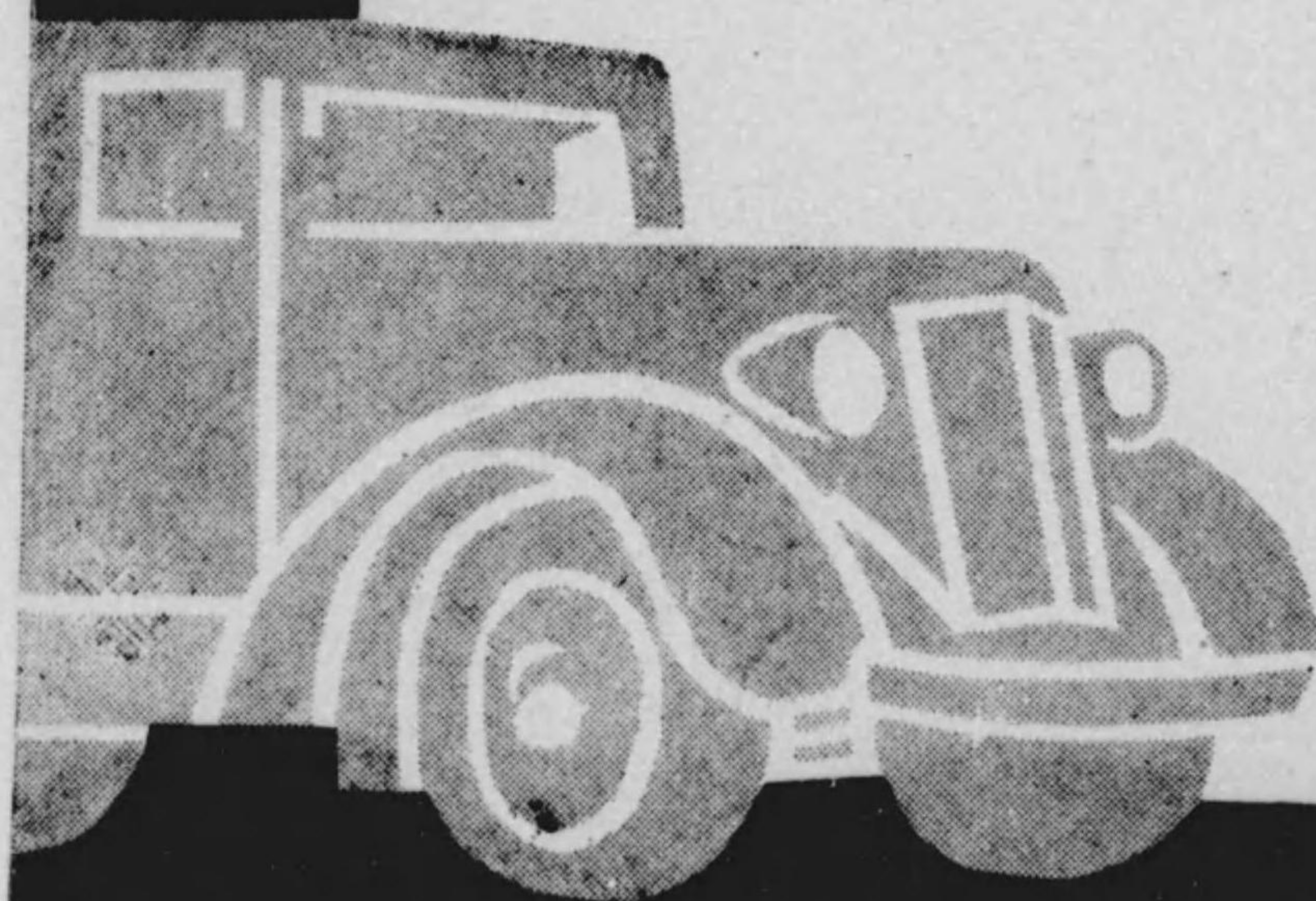
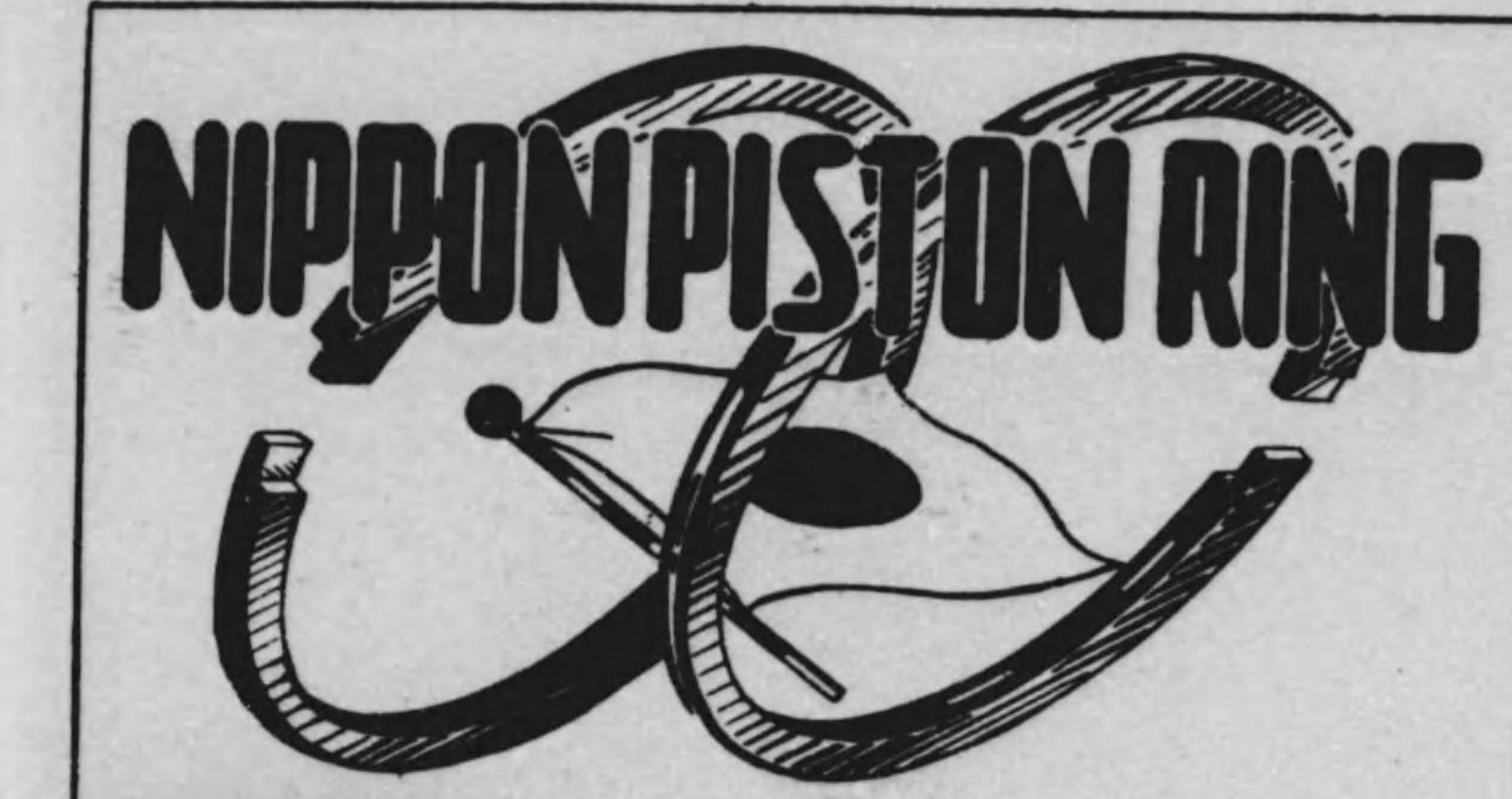
—呈進書內案—

大坂商船

東京市芝區新櫻田町十七番地

日本ピストンリング株式会社

電話 銀座(57)代表 七七九一(8)
營業所 東京・横濱・名古屋・大阪・神戸・福岡・奉天・上海・天津
工場 川口工場・與野工場・金山工場



營業科目

- 物品販賣業 問屋業 運送業 代理業
- 仲立業 製造加工業 工事請負業 度量衡器並ニ計量器販賣業
- 藥品販賣業 壓縮瓦斯液化瓦斯並ニ其容器販賣業 其他附帶事業



三菱商事株式会社

本店 東京市麴町區丸ノ内貳丁目拾番地

支店

小樽、横濱、名古屋、大阪、神戸、吳、門司、臺北、高雄、京城、大連、奉天、新京、哈爾濱、北京、天津、青島、濟南、上海、漢口、香港、河内、盤谷、新嘉坡、スラバヤ、バタビア、シドニー、カルカッタ、孟買、アレキサンドリア、倫敦、紐育、シアトル、桑港

出張員所

青森、仙臺、新潟、横須賀、函館、牛田、舞鶴、岡山、姫路、光、長崎、佐世保、八幡、基隆、釜山、清津、平壤、群山、元山、錦州、營口、安東、牡丹江、佳木斯、石門、大同、厚和、太原、張家口、開封、彰德、新鄉、商邱、海州、南京、蕪湖、廈門、汕頭、廣東、海防、西貢、マニラ、メダン、メルボルン、マドラス、蘭頁、カラチ、ペイロート、バグダッド、羅馬、ロスアンゼルス、サンパウロ

代理店

佛國三菱株式會社(巴里)、同里坊支店、同カサブランカ支店、獨國三菱商事會社(柏林)、智利三菱商事株式會社(チリ)、サンチアゴ、亞國三菱會社(ブエノスアイレス)、日波貿易會社(テヘラン)、コンバインド、エイジエンシース會社、南阿ヨハネスブルグ



中島飛行機株式會社

563-29

R877
K21

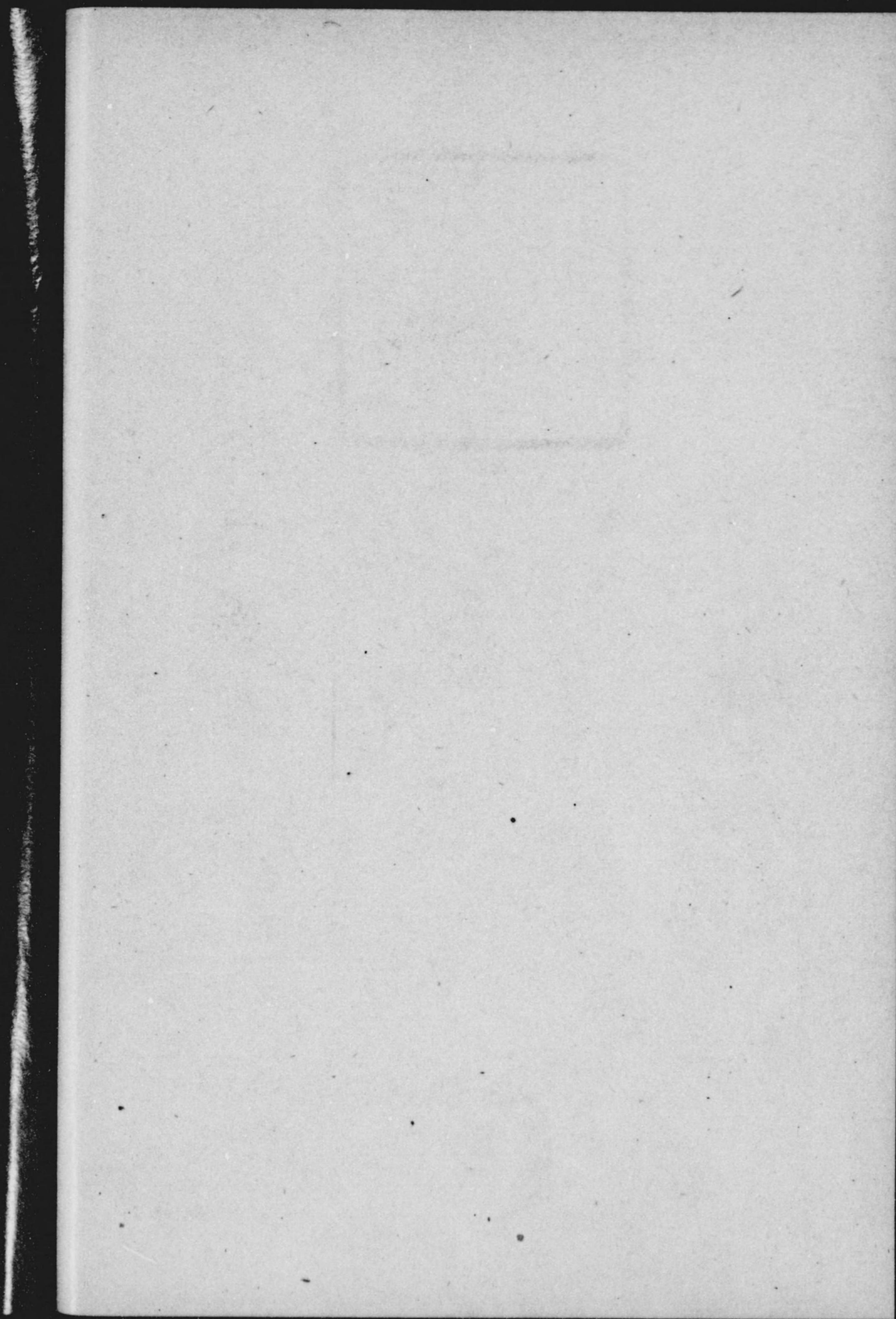
昭和十六年版



海軍要覽

財團法人
海軍有終會編





制制
空海

永野
修
身
題

583
21

序

今や歐洲動亂は獨逸の地中海進出、對英通商破壞戰の熾烈と相俟つて英國の苦悶は愈々其の度を増加すべく、延いて米國の對英援助の強行行爲を現出すべきは想像に難からず、斯くて戰禍の波及するところ容易に測り知るべからざるものあり。

翻つて支那事變を見るに、我が忠勇なる海陸軍の絶えざる猛攻に依り、蔣介石軍の疲弊困憊殆んど其の極に達すと雖も、彼れ尙ほ第三國の援助を頼みとし、剩へ戰局前途の判斷を誤り、宛も自己に有利なる進展を來たすが如く思惟し、敢て干戈を收むるの態度に出づるを欲せざるなり。

右様の次第なるを以て、大東亞の新秩序建設は、畢竟するに第三國並に蔣介石をして我が國の儼然たる、而して公平なる態度を認識せしむると同時に、彼れの呼號する長期抗戰が畢竟自滅を招くに過ぎざることを覺らしむる以外に、迅速なる解決方法を發見すること難し。

更に上記關係第三國の状態を仔細に觀察するに、彼等は未曾有の軍備擴張に狂奔し、來るべき世界大動亂に備へ、之によつて最後の勝利を得、以て自己の目的完遂を期しつゝあるが如し。

此の秋に際し、多年海防海事に關する諸問題を研究し、機關雜誌「有終」を始めとし、各種有益なる書籍を刊行し來れる財團法人海軍有終會が、隔年發行にかゝる海軍要覽をば新粧を凝らして茲に其の昭和十六年版を刊行するに至れるは、洵に欣快とするところにして、其の内容の斬新にして確實豊富なること、斷じて他の追隨を許さざるものなるを信じ、敢て本書を江湖に推奨する所以なり、以て序となす。

昭和十六年七月

海軍大將 及川古志郎

緒言

本年の「要覽」は前回版と同じく總説を劈頭に、列強の海軍々備の各般に亘り詳説すると共に、海軍關係兵器並に艦船・飛行機、軍需品に對しても斬新なる資料に依り解説し、更に論文的に興味多き歴史・戦史の一部を紹述し、一般海事の諸問題をも取扱ひ、國防資源の巨細にも及び、最後に支那事變、歐洲動亂記事を掲げ、尙ほ末尾に列國海軍現狀參考圖表を添付した。

恐らく此の一冊をよく熟讀したならば凡そ海軍關係の知識に於て不足なからんことを確信する。本要覽に於て最も困難を感じたことは、世界動亂によつて關係資料中、機密に屬するものは勿論それに近いものすら得られないことであつた。特に兵器と資源に於て然りとする。

本稿は概ね海軍當局の校閲を得てゐるが、それは多くは機密保持上からの見地であつて、其の悉くが當局の意見や觀察と合致するや否やは別問題であることを斷つて置く。終りに臨み、海軍々令部總長、海軍大臣兩閣下から、それ〴〵題字及び序文を忝うしたことは、時局重大、軍務多端の折柄、特に感激に堪へない所である。又幾多貴重なる資料を下附、貸與、又は寄投し、以て本編纂事業を援助されたる海軍諸官憲に對し深厚なる感謝の意を表す。

本書の編纂は昨年六月、左記委員組織に依つて著手し、爾來銳意熱心資料の蒐集、編述に努力し

今度刊行に至れる次第であつて、本會はこゝに各委員に對し謝辭を呈する次第である。

昭和十六年七月中旬

法財團 海軍有終會

一、本書編纂に關する分擔

| | | |
|-------|--------|------|
| 編纂委員長 | 海軍中將 | 竹内重利 |
| 幹事長 | 海軍少將 | 松本匠 |
| 編纂主任 | 海軍大佐 | 廣瀬彦太 |
| 幹事 | " | 西川速水 |
| 同 | 海軍主計大佐 | 生島綱 |

二、編纂委員分擔表

| 篇名 | 章 | 節 | 官名 | 氏名 | 篇 | 章 | 節 | 官名 | 氏名 | 篇 |
|----|----|----|-------|------|----|----|----|----|----|---|
| 第一 | 第一 | 第一 | 海軍少將 | 松本匠 | 第一 | 第一 | 第一 | 同 | 同 | 同 |
| 第二 | 第二 | 第二 | 海軍大佐 | 廣瀬彦太 | 第二 | 第二 | 第二 | 同 | 同 | 同 |
| 第三 | 第三 | 第三 | 同主計大佐 | 生島綱 | 第三 | 第三 | 第三 | 同 | 同 | 同 |
| 第四 | 第四 | 第四 | 同造船中將 | 永村清 | 第四 | 第四 | 第四 | 同 | 同 | 同 |
| 第五 | 第五 | 第五 | 同 | 同 | 第五 | 第五 | 第五 | 同 | 同 | 同 |
| 第六 | 第六 | 第六 | 同 | 同 | 第六 | 第六 | 第六 | 同 | 同 | 同 |
| 第七 | 第七 | 第七 | 同 | 同 | 第七 | 第七 | 第七 | 同 | 同 | 同 |
| 第八 | 第八 | 第八 | 同 | 同 | 第八 | 第八 | 第八 | 同 | 同 | 同 |
| 第九 | 第九 | 第九 | 同 | 同 | 第九 | 第九 | 第九 | 同 | 同 | 同 |
| 第十 | 第十 | 第十 | 同 | 同 | 第十 | 第十 | 第十 | 同 | 同 | 同 |

凡例

- 一、本書の内容は概ね昭和十五年末を以て締切りとせるも、往々本年度に入りて記述せる所あり。
- 二、書中屢々専門略語を用ひたる箇所あり、即ち、一例を示せば航空母艦を航母、又重巡洋艦を重巡とせるが如し。
- 三、度量衡は帝國海軍の規定に従ひ、メートル式に依れるも、出所の關係上、當該國に於ける度量衡そのまゝを使用せる所あり。
- 四、文體並に章節の區分等、編纂者によりて不同あり、敢て加筆せず、又歐語による固有名詞の呼稱に就ても、所によりて若干相違あり。
- 五、本書に挿入のアート・ペーパーの寫眞は、必ずしも同所の本文と關係なきものあり。

換算表

○砲の口径

| |
|-----------|
| 16吋=40糎 |
| 15 = 38 |
| 14 = 36 |
| 11½ = 34 |
| 13.4 = 34 |
| 12 = 30 |
| 11 = 28 |
| 10 = 25 |
| 8 = 20 |
| 7.5 = 19 |
| 6 = 15 |
| 5.5 = 14 |
| 5.1 = 13 |
| 5 = 13 |
| 4.7 = 12 |
| 4 = 10 |
| 3 = 8 |
| 2.5 = 6 |
| 1 = 2.5 |
| 75耗 = 8 |
| 22听 = 9 |
| 6 = 6 |
| 3 = 5 |
| 2½ = 8 |

○發射管の徑

| |
|-----------|
| 21吋 = 52糎 |
| 20.9 = 53 |
| 19.7 = 50 |
| 18 = 45 |
| 14 = 36 |

○度量衡單位

海はメートル・トン

| |
|--------------|
| 1吋 = 25.4耗 |
| 1耗 = 0.039吋 |
| 1呎 = 0.3048米 |
| 1米 = 3.2809呎 |
| 1哩 = 1.6093軒 |
| 1哩 = 1.853軒 |
| 1听 = 0.453甬 |
| 1甬 = 2.204听 |
| 1噸 = 1.016噸 |
| 1噸 = 0.984噸 |

○油料單位

海はガロン

| |
|-----------------------|
| 1石 = 39.7英當 = 47.66米當 |
| = 1.136耗 |
| 1耗 = 0.88石(燈油) |
| = 1.41石(原油) |
| 1英當 = 2.52升 |
| 1米當 = 2.09升 |
| 1立 = 0.554升 |
| 1噸 = 約6石(原油) |
| 1噸 = 約5.54石 |
| 1兩 = 36立 = 約2斗 |

層對照

| 邦 曆 | 西 曆 |
|--------|------|
| 紀元2528 | 1868 |
| 明治 元 | |
| 10 | |
| 20 | |
| 30 | |
| 31 | |
| 32 | |
| 33 | |
| 37 | |
| 38 | |
| 49 | |
| 40 | |
| 42 | |
| 44 | |
| 紀元2572 | 12 |
| 大正 元 | |
| 3 | |
| 4 | |
| 5 | |
| 6 | |
| 7 | |
| 8 | |
| 9 | |
| 10 | |
| 11 | |
| 12 | |
| 14 | |
| 紀元2586 | 26 |
| 昭和 元 | |
| 2 | |
| 3 | |
| 4 | |
| 5 | |
| 6 | |
| 7 | |
| 8 | |
| 9 | |
| 10 | |
| 11 | |
| 12 | |
| 13 | |
| 14 | |
| 紀元2600 | 1940 |
| 15 | |
| 昭和 16 | |
| 17 | |
| 42 | |

○軍艦と商船との噸數表はし方

一、排水量 常備狀態に於ける軍艦が水上に浮んで排除し居る水の重さを排水量といふ。即ち排水量は艦全體の重量なり。

英噸 海水の重さは季節と所により相違あるも、普通一立方呎を七十四听とし、三十五立方呎を一英噸として數ふ。
佛噸 即ち米噸(噸)は一立方米にして、英噸の〇・九八四二に當り、英噸は佛噸の一・〇一六に相當す。
二、基準排水量 前項の排水量より燃料及び補給水量を除きたる噸數なり。従つて華府條約協定の一萬噸巡洋艦は從來の常備排水量(各國造船計畫によりて異なる)の約一萬三千噸にも相當す。

商船

一、總噸數 船の全容積を立方呎を單位として計り、之を百にて除したる商を謂ふ。即ち大體に於て總噸數は船の全容積を表はす數なり。(往時の千石船は十立方呎を以て一石とす)
二、登録噸數(純噸數) 總噸數の中より機調室及び居住用室の容積を除きたる殘餘の噸數、即ち乗客又は貨物搭載の爲め利用し得る容積を示す數量なり。

以上の外

載貨容積噸數 とは容積上其の船の積載し得べき場所を四十六立方呎を以て一噸として數へたる噸數なり。
載貨重量噸數 とは其の船の積載し得べき限度を重量噸にて表はしたるもの、即ち空荷狀態と滿載狀態との排水量の差なり。

軍艦と商船との比較表

軍艦と商船とは直ちに其の大小を比較する能はず。客船と貨物船とは其の計畫に於て異なるも、其の滿載狀態に於ける吃水に對する計畫排水量噸數あり、船型により頗る區々にして一定の標準を示し難きも、客船の排水量は總噸數に三割弱(約二九%)の噸數を加へたるもの。貨物船の滿載排水量は總噸數の殆んど二倍に相當す。

昭和十六年

海軍要覽

目次

總說

第一篇 軍備

第一章 列國海軍政策

第一節 概說

第二節 米國

第三節 英國

第四節 獨逸

第五節 ソ聯邦

第六節 伊太利

第七節 佛國

第二章 列國の造艦政策と建艦現狀

第一節 概說

第二節 米國

目次

..... 一五

..... 一五

..... 一五

..... 一七

..... 一八

..... 一八

..... 一九

..... 二〇

..... 二〇

..... 二〇

..... 二三

第三節 英國……………六

第四節 獨逸……………六

第五節 ソ聯邦……………三

第六節 伊太利……………三

第七節 佛蘭西……………三

第八節 各國の代表艦及び建艦概要……………三

第三節 列國海軍豫算並に施設……………三

第一節 總說……………三

第二節 日本……………三

第三節 米國……………三

第四節 英國……………三

第五節 佛國……………三

第二篇 海軍艦船……………三

緒言……………三

第一章 主力艦……………三

(一) 英國の主力艦……………三

(二) 米國……………三

(三) 獨逸……………三

(四) 伊國……………三

(五) ソ聯邦……………三

(六) 佛國……………三

第二章 航空母艦……………三

第三章 巡洋艦……………七

第一節 甲級巡洋艦……………七

第二節 乙級巡洋艦……………七

第三節 巡洋艦の變遷……………七

第四章 驅逐艦……………七

第五章 水雷艇……………七

第六章 潜水艇……………七

第七章 補助艦艇……………七

第八章 高速魚雷艇……………七

第九章 現時の歐洲戰爭に於ける艦船の損失……………七

第十章 最近建造されたる日本の艦艇……………七

結 言……………七

第三篇 海軍兵器と船用機關……………七

第一章 砲兵兵器……………七

第一節 列國砲兵兵器概説……………七

第二節 列國に於ける對航空機砲銃概説(一、高角砲二、機銃)……………七

第三節 戰艦主砲の變遷……………七

第四節 戰艦の兵裝……………七

第二章 水雷兵器……………一六九

 第一節 水雷の起源並に其の發達……………一六九

 第二節 魚雷の現在と其の將來……………一七二

 第三節 機雷……………一七三

 第四節 飛行機防禦用空中機雷堰……………一七四

 第五節 飛行機による機雷戰……………一七五

 第六節 獨逸の磁氣機雷……………一七六

 第七節 磁氣機雷防止對策……………一七八

 第八節 掃海……………一八〇

 第九節 對潛兵器……………一八二

第三章 通信兵器……………一八六

 第一節 通信兵器の概念……………一八六

 第二節 電子工學の發達……………一八八

 第三節 無裝荷搬送電氣通信……………一九〇

 第四節 超短波無線……………一九一

 第五節 無線操縱高速艇……………一九二

 第六節 無線嚮導と航空路照明……………一九三

第四章 化學兵器……………一九五

 第一節 毒瓦斯……………一九五

 第二節 燒夷彈の種類性能……………一九九

 第三節 燒夷彈の消火方法……………二〇〇

 第四節 爆彈の威力……………二〇一

 第五節 煙幕……………二〇三

 第六節 煙幕と其の展張法……………二〇四

第五章 船用蒸氣タービンと内燃機關……………二〇五

 第一節 序說……………二〇五

 第二節 内燃機關……………二〇七

 第三節 高壓高溫蒸氣……………二〇九

 第四節 汽缸……………二一一

 第五節 減速齒車タービン……………二一〇

 第六節 排氣タービン……………二一〇

 第七節 電氣推進……………二一四

第四篇 航 空……………二一五

 第一章 海軍航空の沿革……………二一五

 第二章 海洋作戰と航空……………二一八

 第三章 列強の航空政策……………二二八

第一節 米 國……………三六八

第二節 英 國……………三六一

第三節 獨 逸……………三九五

第四節 伊 太 利……………三九六

第五節 ソ 聯 邦……………三九九

第四章 各種飛行機……………三〇一

第一節 戰 闘 機……………三〇一

第二節 爆 撃 機……………三〇四

一 急降下爆撃機……………三〇四

二 急降下爆撃機の設計……………三〇八

三 現代の急降下爆撃機……………三〇九

四 攻 撃 機……………三一一

第三節 偵 察 機……………三一一

第四節 飛 行 艇……………三二四

第五章 航空發動機……………三二五

第一節 發動機一般……………三二八

第二節 ダイムラー・ベンツ發動機……………三三〇

第三節 ユンカース・ユモ・ガソリン發動機……………三三二

第四節 ユンカース・チーゼル發動機……………三三三

第六章 東亞航空路の現状……………三三四

第一節 歐米の東亞向航空路……………三三四

第二節 歐洲戰爭の影響……………三三六

第三節 航空日本の進路……………三三八

第七章 歐洲戰爭餘聞……………三三九

第一節 空輸兵團と落下傘部隊……………三三九

第二節 空輸兵團の編制の一例……………三三九

第三節 飛行機搭乗區分……………三三九

第四節 獨逸飛行機の自動防漏油槽と裝甲……………三三九

第五篇 醫 務 衛 生

第一章 衛生機關の變遷……………三三七

第一節 起 源……………三三七

第二節 軍醫部中央機關……………三三九

第三節 海軍々醫學校……………三四〇

第四節 海軍病院……………三四三

第五節 艦船部隊……………三四五

第六節 軍醫部員の任用……………三四七

第二章 防 疫……………三三

第一節 海軍に於ける傳染病豫防法……………三三

第二節 軍港要港の防疫……………三五

第三節 避病院及び消毒所……………三五

第四節 特種傳染病に對する豫防……………三五

第三章 兵 食……………三六

第一節 初期に於ける海軍兵食……………三六

第二節 脚氣對策と兵食……………三六

第三節 海軍兵食の研究調査概要……………三六

第六篇 戰 史

第一章 蘭英戰爭と其の教訓……………三七

第一節 第一次蘭英戰爭……………三七

第二節 第二次蘭英戰爭……………三七

第三節 第三次蘭英戰爭……………三七

第四節 教 訓……………三七

第二章 海上權力と國家の消長……………三七

第一節 神代時代……………三七

第二節 神武天皇以降……………三七

第七篇 支那事變と海軍

第一章 緒 言……………四七

第二章 艦艇及び陸戰隊の奮戦……………四九

第一節 昭和十四年初頭北・南支に於ける陸戰隊の行動……………四九

第二節 海南島攻略戰及び掃蕩戰……………四九

第三節 北支作戰……………四九

第四節 南支作戰……………四九

第五節 中支作戰……………四九

第六節 中山作戰……………四九

第三章 航空部隊の活躍(昭和十四年度).....四六
 第一節 昭和十四年一月至三月北・中・南支方面.....四六
 第二節 南支方面.....四七
 第三節 中支方面.....四七
 第四節 北支方面.....四八
 第四章 航空部隊の活躍(昭和十五年度).....四九
 第一節 昭和十五年初頭航空部隊の活躍.....四九
 第二節 南支航空部隊の活躍.....五〇
 第三節 佛印ルートへの爆撃.....五一
 第四節 敵空軍基地爆撃.....五二
 第五節 支那奥地制壓.....五三
 第六節 南支方面爆撃.....五三
 第七節 陸上作戦協力.....五四
 第八節 封鎖作戦協力.....五四
 第九節 ビルマ・ルート爆撃遮断.....五五
 第五章 支那沿岸交通遮断.....五五
 第一節 抗戦輸血路の閉塞.....五六
 第二節 南支沿岸封鎖強化.....五七

第三節 浙江福建沿岸交通遮断強化.....五七
 第四節 炎熱下の沿岸封鎖戦.....五八
 第六章 江上作戦並に水路啓開.....五九
 第一節 中・南支江上作戦.....五九
 第二節 南昌攻略戦と鄱陽湖畔の大奮闘.....六〇
 第三節 洞庭湖上に於ける奮戦闘.....六一
 第七章 陸軍との協同作戦.....六一
 第一節 江蘇省北部作戦.....六二
 第二節 北海作戦.....六三
 第三節 魯東作戦.....六四
 第八章 結 言.....六五
第八篇 欧州戦争
 第一章 開戦迄の欧州政局の推移.....六六
 第二章 戦争勃發より北歐作戦迄の情況.....六七
 一 一般戦況.....六七
 二 海上作戦の情況.....六八
 三 獨逸海軍の通商破壊戦.....六九
 第三章 北歐作戦より獨佛休戦協定締結迄の情況.....七〇

一 一般戦況……………四七

二 北歐作戦に於ける海上作戦……………四八

三 蘭白侵入後の海上作戦……………四八

四 獨逸が撃沈を主張する三主力艦に就て……………四八

第四章 獨佛休戦協定締結より昭和十五年末迄の情況……………四八

一 一般戦況……………四八

二 獨逸空軍の活躍……………四八

三 獨逸の對英封鎖宣言と其の成果概要……………四八

第五章 佛國海軍を中心として觀たる海上作戦……………四八

一 一般情況……………四八

二 獨佛休戦後佛國艦隊を繞る獨英の態度……………四八

三 オラン海戦(附)佛國艦隊の運命……………四八

第六章 地中海及び阿弗利加に於ける情況……………四九

一 地中海に於ける伊英艦隊の角逐……………四九

二 阿弗利加に於ける戰況……………四九

第七章 對英援助に狂奔する米國……………四九

附 錄……………五〇

昭和十五年三月二十八日の倫敦に於ける英佛最高軍事會議後公表されたる英佛……………五〇

第九篇 國防資源及び海軍國防資源

共同コミュニケ……………五〇

獨佛休戦協定全文……………五〇

伊佛休戦協定全文……………五〇

第一章 人的資源事項……………五〇

第一節 昭和十五年度勞務動員計畫……………五〇

第二節 技術者及び技能者の養成……………五〇

第一 學校に於ける技術者の養成……………五一

第二 工場事業場に於ける技能者の養成……………五一

第三節 機械技術者檢定制度……………五一

第四節 國民體力法及び國民優生法……………五一

第二章 大東亞共榮圈の經濟建設と資源……………五一

第一節 緒言……………五一

第二節 日滿支經濟建設十年計畫……………五一

第三節 大東亞、歐洲廣域經濟圈の重要物資生産額……………五一

(附)本邦貿易地區分析表(昭和十四年度)

第四節 滿支資源開發計畫……………五二

第一 滿洲國の三大國策……………五二

第二 北支産業五ヶ年計畫……………五五

第三 蒙疆鑛産資源開發五ヶ年計畫……………五七

第三章 鐵 鋼……………五八

第一節 昭和十四年世界鐵鋼業概況……………五八

第二節 屑鐵及び屑鐵對策……………五九

第四章 南洋の資源……………五九

第五章 ソ聯邦の資源……………五九

第六章 米國の不足軍需原料と其の對策……………五九

第十篇 海 事……………五九

第一章 本邦海運對策……………五九

一 船腹の擴充……………五九

二 船腹利用能率の増進……………五九

三 海運並に造船の統制……………五九

第二章 漁 業……………五九

第一節 北洋漁業問題に就て……………五九

第二節 新體制と海洋漁業行政機構に就て……………五九

附 錄……………五九

列國海軍現狀參考圖表……………五九

(目次終)

昭和十六年版 海軍要覽

總說 世界新秩序建設の進展

世界情勢の激變

一、世界情勢の急轉

世界は今や激變の渦中に在り、東亞西歐共に新秩序建設に向つて懸命に巨歩を進めてゐる。曾て前歐洲大戰に於ける聯合國の勝利は、英米佛自由主義國家群をして、其の後の二十有餘年間を通じ、ヴェルサイユ條約と、國際聯盟との桎梏によつて、至世界の政治、經濟體制を壟斷し、是等現狀維持國家群の指導下に自由主義思想の跋扈するところとなつたが、益々其の因果循環の理に漏れざる世界歴史の齒車は今や遂に大激變期に到達したのである。所謂持てる國、飽樂國は現狀維持體制下に、さしたる人口の増加もなく飽食暖衣の社會生活を續けて來た、其の英佛の勢力が、今や大戰以來二十有餘年間再起の信念に燃え、臥薪嘗膽一切を擧げて國力の恢復擴大に邁進して來た獨逸の軍事勢力に對抗し得べくもなきは理の當然であつて、今次歐洲戰爭の舞臺には、英佛自由主義體制の脆弱性を完全に暴露したのである。

然らば日本は何が故に東亞新秩序の建設に向つて立ち、獨伊は何が故に歐洲新秩序建設に向つて蹶起したか、皆これ自己存立の爲めであり共存共榮の爲めであつて、決して平地に波瀾を生じ、徒らに世界平和を擾亂せんとする爲め

總說 世界新秩序建設の進展

武装の單位

往昔弓箭刀鎗が主要武器であり、車馬舟筏が唯一の交通機關であつた時代には、武装の單位は一都市であり、ヒンタールランドは一藩で事足りた。進んで軍艦や大砲が主戦兵器として用ひられる様になると、一市一藩の賄ひ得べくもなき大規模のものとなり、茲に武装の單位は一國に擴大さるゝに至つた。更に近代の如く飛行機、戦車、自動車等の出現は、時間的に世界を著しく短縮し且つ其の裝備に莫大なる費用と人員とを要することゝなつて、領土狭小、物資に乏しく、従て人口亦豊かならざる小國の獨立は之を維持すること頗る困難なるに至つた。宜なる哉、今次歐洲戦争勃發前、埃太利の合邦せられ、チエコの併合せらるゝや、五千萬以下の人口を以てしては國家の獨立は之を維持するに困難なりと叫ばるゝに至つた。

若し夫れ北米合衆國の如き國防豫算に年々數百億を投ずる大國が現れ出すと、有數列強とて之と對抗するには並み大抵の骨折では出來ない、況んや支那の如き或る種の原料豊富にあつても、之を開發すべき技術もなく資本もなき國家は如何に領土廣大人口饒多であつても、自體自身を以て獨立するの能力を缺き空しく先進強國の好餌となりつゝあるのである、更に遺憾なるは國防資源として不可缺重要品の一なる油及びゴムの産地ではないことである。故に日滿支三國共榮圈を結成し、善隣友好、經濟提携、共同防共の、固き互助聯關體制を形つくるとしても、自給自足圈としては未だ完きものではない。況んや戰略要地として西太平洋防備上の見地より之を眺むる時、殊更に其の感を深ふるのである。

歐洲に於ける獨伊兩國の立場に於ても、現状に不平不満なるは勿論であつて、特に獨逸は前大戰に於て、國家と稱するには餘りにも痛ましき不具者同様の無力者に叩きつけられた、叩きつけたのは英國であつて自ら世界の警察官を

現状維持

以て自認し、世界中の主要港灣・岬角・海峡には悉く番兵を配置し、英國本位の秩序體制を亂すものは世界平和の攪亂者なる烙印を捺して來た、現状打破の必要を痛感せる獨逸が復舊の念に燃ゆる民族精神に鞭うつて打倒英國の一念に固まつたことは當然である。

加之、英國は自己の最大競争者たる獨逸を一旦叩きつけたる後は、日本を以て次代競争者なりと目指し、英國に對し多大の援助を與へたる功勞者に報ゆるに却つて阻害壓迫の手段に出で、多年に亙る同盟を蔽覆の如く放擲し只管米國の歡心を迎ふるに汲々として、或は華府條約により我が海軍に五對三の劣勢比率を強要し、或は四國條約、九ヶ國條約、不戰條約等により日本をして手も足も出せない様な桎梏をはめ、米佛ソ支を使喚して日本包圍の體制を整へ第二獨逸たらしめんとしたのである。

前大戰後に苦杯を喫せる伊太利も亦、ヴェルサイユ體制に大なる不満を抱き、「羅馬時代の再建」を目標として地中海制覇に向つて動き出した。然るに地中海の兩方の門戸は嚴重なる英國の番兵に見張られてゐて、「所謂檻の中の伊太利」の嘆をかこたしめたのである。

尙ほ世界舊秩序破壊に有力なる一員として蘇聯あるを忘れてはならぬ、赤化思想による世界革命を提唱し來れる蘇聯が、其の最大障壁たる國家主義國獨逸と妥協し獨逸をして後顧の患を軽減せしめたのは所謂複雑怪奇にも見えるが、實は十分なる理由があるのである、元來蘇聯が最も身近に脅威を感じる相手國は獨逸であつて、妙くとも近代歴史の示す範圍に於ては、蘇聯の受くべき外敵の目標としては獨逸以外には無く、此の外寇の患を除くと共に速かに國防國家を建設せんとする蘇聯の企圖は獨逸の技術を藉るのでなければ其の成功は困難なので、己むを得ず提携の必要に迫られ、更に兩國協定の副産物として沿バルト海三國を併合し、バルト海制覇の甚大なる利權を獲得したのである。

一方獨逸も亦蘇聯との協定によつて自己背後の悩みを減じたるのみならず、却つて之をヒンタールランドとして利用

現状不満

四
總説 世界新秩序建設の進展
することに依て十分に歐洲作戦を遂行し得るに至つた之れ前大戰に於て體驗せる二正面作戦の困難を生かしたものに外ならぬのである。

二、東亞新秩序と世界新秩序

惟ふに最近の東洋史は全亞細亞十一億の黄色人種に對する英米佛蘭諸國搾取の歴史であつた、虐げられたる是等亞細亞民族中に於て決然として之に對抗し、眞に獨立國の面目を保持して來たのは單り皇國日本のみである。而かも國運を賭して敢然露國の侵略に對抗し友邦支那を救ひて以來、極東の守護者として被壓迫民族の渴仰を受くるに至つた。他方東亞に於ける英米植民地の番犬視せられた日本が却つて彼等より警戒と猜疑の眼を以て嫉視せられるに至つたのは、實に日露戰役に於て露國の南下を喰ひ止めた以後のことであり、更に世界大戰に於て一躍一等國の班に列し、内南洋委任統治領領有によつて、西太平洋上に有力なる足溜を獲得し、滿洲事變以來日滿提携によつて大陸に不動の地歩を築き、堂々自主的外交の大旗を掲げ、皇道正義に向つて勇往邁進するの氣魄を示すに至つて、東亞に於ける皇國の地位は全然從來と其の趣を異にして來た、即ち若し日本を無視して東亞に專横を振舞はんとするものあらば、斷乎として之を排撃するの決意と用意とを有するまでになつた。然し喬木に風勁く、出る杭の打たる、譬の如く列強の嫉視を招いたのも亦不可避の勢と謂はねばならぬ。

次いで昭和十二年一月一日以來海軍無條約時代に入るや、前世界大戰の疲勞より漸く回復し來たれる英米兩國は、俄かに危大なる豫算を計上し海軍大擴張の火蓋を切つて日本壓迫に拍車をかけて來た、のみならず英米佛蘇は轡を並べて日本包圍態勢を執り、老大華國を使喚して熾に排日抗日を煽り、蘆溝橋砲聲一發遂に今次事變を惹起せしめた。由來以夷制夷は狡智英國の傳統的國策であつて、鵲蚌をして相争はしめ漁夫の利を占めんとするは、又彼等不動の

最近の東洋史

海軍無條約時代

信條である。斯かる妖魔に踊らされたる蔣政權こそは洵に憐むべきであつて、世界の氣勢を覺らず歴史の推移を辨へず、濫りに第三國の煽てに乗り日本の恩義を忘れて無謀にも失地回復を呼號し、却つて社稷を廢亡の淵に沈めんとしてゐるのである。

支那事變
事變勃發以來將に滿四年に垂んとして、未だ其の結末を見るには至らないが、御稜威下に於ける皇軍の勇戰敢闘により、大陸の要衝悉く皇威に靡き、今や東亞新秩序の建設に向つて長期建設戦の歩みを進めてゐる、素々本事變に於ける皇軍の行動は、決して侵略征服の如き霸業達成を目的とするものではなく、善隣友好の本旨に悖り、却つて毎日抗日を以て國民教化の主眼とし、國交破壊を旨とする抗日政權に對して、其の反省を促さんが爲めの慈悲の鐵拳に外ならないのであつて興亞聖戰と稱せらるゝ所以である。今や皇軍の武威全支に光被し我國の眞意漸く明かになつて來たので、之に共鳴し志を同じうする汪國民政府の改組還都は行はれ、日華條約は締結せられ、日滿華互助聯關を志す新秩序の礎石はこゝに築かるゝことになつた。之を助成し育成し以て世界新秩序の一翼たらしむることは今後に於ける非常の忍耐と努力とに俟たねばならぬ所である。

我國が興亞の聖戰に忙殺さるゝの時、飽く迄興隆日本の擡頭を阻碍し其の發展を挫かうとする英米諸國は、舊秩序の維持に之れ勵めて、極力蔣政權を支援し、我が國に對しては事毎に敵性を露はし來つたが、何ぞ圖らん其の足許には、均しく不合理なる舊秩序に不満を抱き資源再分配の公平化を叫びつゝ、猛然颯起倒英の火蓋を切つて縱横無盡に荒れまわる武者振り凄まじき獨逸が現はれて來たのである。

獨逸一たび舊秩序破壊に向つて起つや、波蘭は旬日にして潰へ丁諾相次いで其の蹂躪する所となり、更に銳鋒西に向へば蘭白を席捲し、電撃一下英佛聯合軍を粉碎し、期月ならずして佛軍の降服となつた。餘威に乗じ今にも英國上陸作戦の決行を見るに至らんかを豫期せられたが、流石ドーバー海峡は尙ほ獨國の越ゆるに難き壘濠であり、英の海

獨逸の蹶起

總説 世界新秩序建設の進展

軍は依然として偉大なる浮べる要塞であつた、かくて空軍により、或は潜水艦による爆撃戦、封鎖戦が行はれ、今や獨英は攻防悪戦に秘術を盡してゐる。

先之、佛國マジノ線の突破せらるゝや、伊太利の對英佛宣戦となり、茲に獨伊を樞軸とせる對英戦が鮮明となつて來た。従て東亞新秩序建設戦は、世界新秩序建設戦の一翼となり東西連關切り難しては考へられぬものとなつたのである。

對英樞軸

三、高度國防國家と大東亞共榮圈

日本の現在は尙ほ支那事變の渦中に在る、而かも東亞新秩序の建設に向つて邁進しつゝあるのであるが東洋は是非共日本の力を以て指導して行かねばならぬ、これ即ち屢次の近衛聲明による方針であつて、其の實現には實現する丈の力の必要があり、力を養はんが爲には先づ高度國防國家體制を整へなければならぬ。

高度國防國家の要因

高度國防國家の要因としては、産業的に自給自足、工業的に軍需の充足が急務であり、其の根本問題として人的資源の必要がある。

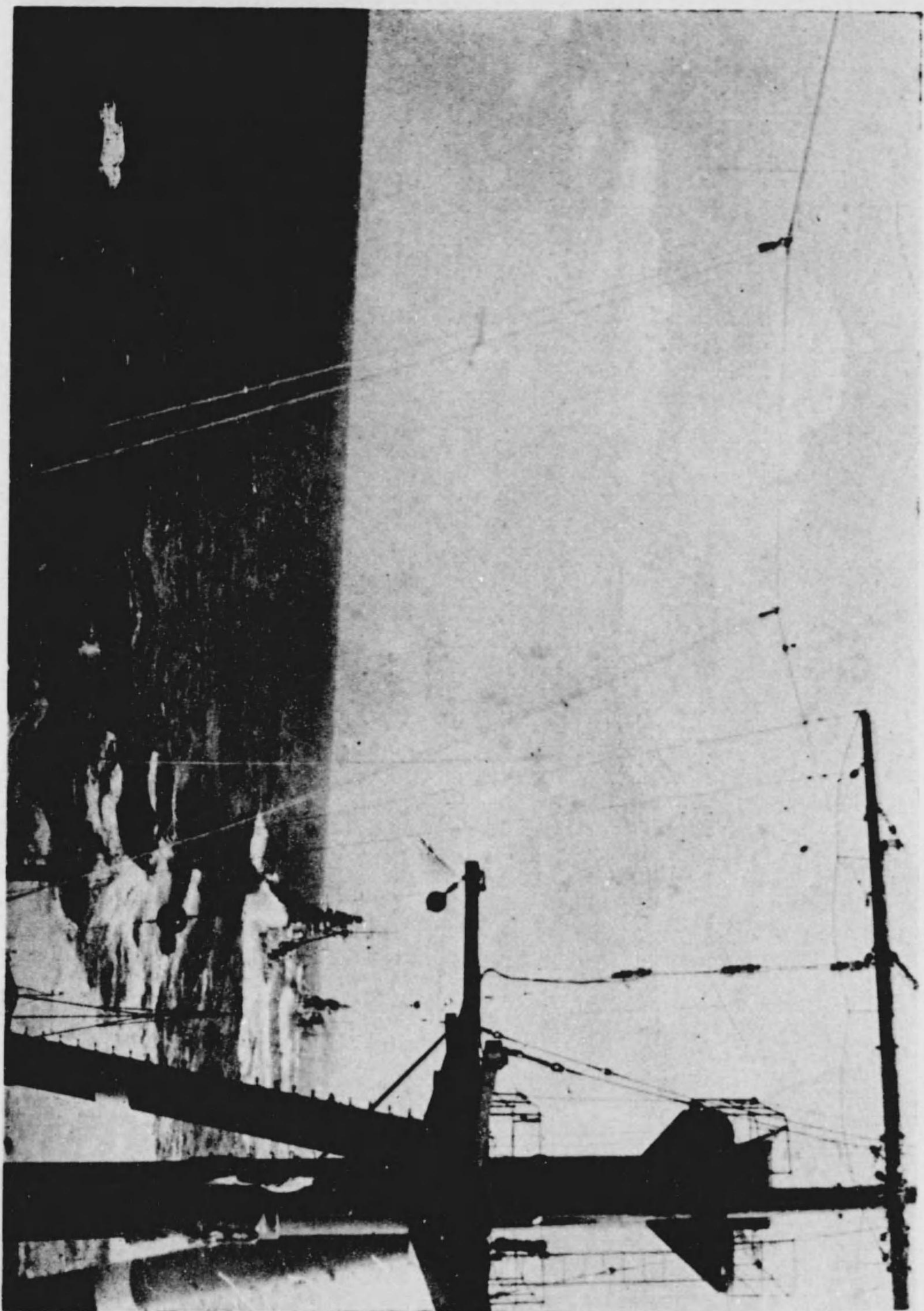
人口

一、人的資源(國民素質を含む)

方に一億餘萬の人口を有する日本は、世界獨立國中の大人人口國の一であり、其の素質として世界に冠たる尊皇愛國心を有することは、高度國防國家建設にとりて甚大なる強みである、併しながら國家總力戰の現代に於て、前線は言ふに及ばず銃後各部門戦士の多々益々必要なるは明かであつて、各種方面に互り人力の不足が痛感せらるゝ今日産めや殖やせよの繁榮策が叫ばれてゐる所以である。

唯素質に於ても科學的思索方面に關しては、遺憾ながら現在未だ世界一流國と比肩する迄には到つてゐない。従て

素質



鏡 精 の 軍 海 國 帝

科學工業の如きも多くは彼等に尙ほ一步を輸し、且つ依存して來た状態であつた。かゝる際、科學者の重用と科學の研究進歩とは須臾も忽せにすべからざる急務たるに相違なきも、さりとて一朝一夕に實現さるゝものでは無く、常住不斷の努力を積むと共に暫く他の要素即ち熾烈なる愛國心の發揮さるゝ結果として多分に補ひ得る所あらねばならぬ。

二、物質資源

物質資源に關しては、我が國は所謂「持たざる國」として甚だ恵まれてゐないのは周知の事實である。併しながら空しく其の成行に放任し敢て之を獲得するの手段を運らざるに於ては、何時まで経つても高度國防國家の建設は愚か安全獨立すら之を維持するに困難となつて來る、従つて資源の所在を探索し其の獲得打開の道を講ずることは刻下喫緊の問題である、國民如何に愛國心に燃え、尙武勇敢、義勇奉公の精神旺盛であつても其の國防裝備が劣弱なるに於ては、敵機械力の前に施すべき手段に窮して遂には屈服の餘儀なきに到らずとも限らない。我が維新前後の事情は能く之を證してゐる。

國防裝備

國防裝備の充實とは海軍に在りては即ち艦船・航空機・砲銃・彈藥・燃料等の強化充實であり、陸軍に於ても亦た戰車・飛行機・銃砲・彈藥等、軍裝備の強化充實並に其の機械化である、而かも近代化する軍裝備の充實には莫大なる物資と工業力とを必要とし、是等の物資を得んが爲めには豊富なる資源獲得の要がある。

高度國防國家建設に要する軍需資材中に於て、我が國産資源に最も不足を感ずるものは、第一石油・鐵・及び輕金屬、並にゴム等であり、是等は何れも海路程近き南洋諸島中に需むることを得るのである、試みに昭和十二年（西曆一九三七年）の統計に従へば、蘭領印度は世界總産額に對しゴムに於て三七・四〇%（三〇萬一四〇萬噸）、石油の三%（約八百萬噸）、錫の二・一%（約四萬噸）を産出し、而かも未開發部分は主要の資本投資國英米の政策に蔽はれて、尙ほ廣範圍に残されてゐる現状である。

又蘭印に産する農産物中世界第一のものとしては、規那の九三%、カボックの八二%、胡椒の八〇%、其の他ココナツの八三%、の外砂糖・米である。

世界の寶庫と諺はれ、エメラルドの首飾とも譬へらるゝ是等蘭領印度は列強垂涎の繁争地である、從來弱小國和蘭が克く其の所領として維持統治し得たのは畢竟列強の勢力均衡の庇蔭であつて、今や本國が獨逸の蹂躪する所となつた現在に於ては、甚だ不安定なる存在と謂はねばならぬ、本國潰ゆるの日、日本がいち早く其の現状維持を宣言したのも他強國の所領化を豫防し、今後の工作を進めんが爲めであつた、要するに蘭印は今も尙ほ蘭印であつて、各國共に之を存分に處理するには大なる障礙を覺悟せねばならぬ、然しながら國家存立自衛の必要上、我が國は決して之を放置することは出来なす。

四、三國條約と世界新秩序の新段階

佛蘭西の降伏、白蘭諾に互る獨逸勢力の擴大に續いて成立せる三國條約の締結は、世界情勢をして新秩序建設の推進力に一層拍車をかけ、英國の敗色も亦之を助成するの傾向を廣らし、三國聯繫による世界新秩序建設の潮は澎湃として漲るに至つた。

日獨伊三國條約の締結に當り 畏くも 大詔を渙發あらせられ、帝國の嚮ふ所を明かにし國民の進むべき大道を示させ給ふた、洵に感激の極みである。

謹みて 大詔を奉讀すれば、已に内閣告諭にもある如く本條約の精神が、八紘一宇の大國是に基き、東亞の安定を確保し世界の平和を保持するに在ることは炳乎として明かである。

尙ほ條約要旨の前文に掲げらるゝ如く、日獨伊三國は萬邦をして各々其の所を得しむるを以て恒久平和の先決要件

なりと認め、日本は大東亞の地域に、獨伊兩國は歐洲の地域に、夫々新秩序を建設し且つ之を維持するを根本義となし、此の趣旨に據れる努力につき相互に提携協力せんことを決意したのである。更に三國は歐亞の地域のみならず世界到る所に於て同様の努力を爲さんとする諸國とも協力して世界の恒久平和を確立し度き意向をも明かにした。

従つて我が日本としては已に東亞新秩序建設の爲めに戦はれつゝある所の支那事變を速かに解決し、以て一日も速かに平和を回復せねばならぬ。同様に獨伊兩國も亦歐洲の地域に新秩序を建設する爲めには、當面の戦亂を鎮定し平和を復することが先決條件である。故に同盟國に於ても現在の禍亂を擴大せしめざるの措置に出づべきは當然であつて、同盟の目的が進んで新なる敵國を求むるのではなく却つて第三國の誘發を阻止して、速かに戦火を消滅せんとする、道徳的意義と自衛的性質とを有するものなることは明かである。

然しながら尙ほ世界には不合理なる舊思想より蟬脱し得ずして、自己の優越感に陶醉し、贅澤の甘夢に耽らんが爲めに理不盡なる現状を頑守し、極力東西新秩序建設に反對し爲めに慘憺たる流血の悲劇に喘ぎつゝある國家もあれば、其の同類には名を自由主義擁護と國防とに藉り進攻的大軍備擴張に狂奔し、虎視眈々參戰の機を窺ひつゝある大國の存することを見逃してはならない。

彼のフランクスに於ける英佛聯合軍の大敗に依て數十萬の英軍は雪崩を打つて本國に逃げ歸つたが、更に數十度に互る獨逸軍の大爆撃に遭ひ、首都倫敦は將に荒廢に歸せんとしてゐる、勿論世界一の大海軍を擁してゐる英國が單に現段階の戦局のみを以て容易に屈服するが如きことはなかるべく、本國防備の英軍用機が防禦専用の特種裝備を有し、或は本國、加奈陀・濠洲を通じて多數の飛行士養成に懸命なること、或はアングロ・サクソン民族が鈍重にしてゲルマン民族の如く速戦即決的に事を運ぶの習性を缺ける爲め、持久戦に入るや漸次に本格的強みを發揮し得るの特性等が擧げられ、戦局の現状を以て俄かに大勢を決断するは尙早なりとの見解もあるのであるが、獨伊の對英攻撃の

背後を通ずる世界情勢の全體的傾向は、英米兩國の國際的地位をして著しく不利ならしめてゐる。

日獨伊三國同盟の締結は、かゝる國際情勢を馴致する根本的動因でもあつた。這般の歐洲大戰發生以來、獨伊對英佛抗爭を通じて、全世界諸國は明目張膽その推移を注視してゐた。中にもソ聯邦及び米國は其の戰時政策決定に關して慎重に考慮した。勿論米國は自由主義モンロー主義の本尊として、當初より對英援助に努めたが、軍事行動への積極的前進は前大戰の經驗に鑑みて之を控へ、單に軍需資材、艦船等の貸與を行ふ範圍に於て、政局の推移を見守つて來たのであつた。此際大統領の改選を中心とする國內政界の動きも亦對英援助政策の本格的積極化を阻みたる要因であつたのである。

五、米國の動向

日獨伊三國同盟の成立に伴ひ、今や新しき世界秩序の建設に向つて戦はれてゐる支那事變と歐洲戰爭とは、その性格に於て一體不二となり、太平洋問題と大西洋問題とは之を切り離して考ふ可らざるに至つた。太平洋の危機來が叫ばるゝ所以である。

元來米國の國策は遠く十九世紀末、マハン提督の教訓より發生し且つ成育してゐる、同氏は其の名著の一に於て國策とは何ぞやと謂へば、それは國家が要するならば武力を以て、之が支持徹底を期する所の政策を謂ふ、米國の場合に於てはモンロー主義と支那の門戸開放が即ちそれである。モンロー主義に就ては武力の發動の要は先づ見出されないが、極東に於ける均等擾亂を防遏せんが爲めには雄大なる海軍力を必要とす。

と述べてゐる。時の大統領は此の教訓に感奮し米西戰爭當時比島占領を決行し、支那問題に對する發言權確保と、支那市場への進出の爲めの據點たらしめ、「比島領有は太平洋に橋を架けたのだ」と喝破し、マハンの教訓に負ふ所な

米國國策

りと告白した。

この太平洋架橋の指標は支那への進出であり、其の活用を爲めには大海軍保有の要がある。之れ米國が常に海軍の優勢比率を主張し、大西洋方面を英國艦隊に委ね、全艦隊を用もなき太平洋に集中し以て極東進取政策に膠着しある所以である。

従つて支那事變勃發以來、英國と呼應して或は國際聯盟を利用し、或は九ヶ國條約を推進力として支那の抗戦力を支援し、日本を敗戦の地位に追ひ込まんとしてゐる。即ち理不盡極まる通商條約の廢棄も、高級ガソリン、特種石油の禁輸も、屑鐵並に各種金屬類その他各種工作機械の禁輸も皆この政策から出てゐるのであつて、所謂戰爭の一步手前まで進んで來てゐる。

今次の歐洲戦に於ても、米國民の同情は翕然として英國に向ひ、全體主義國をば蛇蝎の如く憎んでゐる、従つて中立法も何もあつたものではなく、艦船飛行機を始めあらゆる資材の供給を以て英國を援助し、今や半ば參戰してゐる有様である。特に國祖華聖頓以來の傳統を破りて、大統領に連続三選したるルーズベルトは、本年初頭爐邊閑談に於て、米國々防の第一線は、東英國に西重慶に在りと高唱し、露骨なる援英援蔣に乗り出して來た。

六、米國の狂的大軍擴

電撃戦に因る獨逸軍の快勝と英佛聯合軍の惨敗とを見て、米洲に就て怯えを抱くに至つた米國は、急遽大西・太平洋兩洋作戦の必要を感じ、之に應ぜんが爲め矢繼早に特別國防豫算を成立せしめ、從來のヴァインソン案にスタルク案を追加し、總額實に百二十七億弗を以て、昭和二十一年（一九四六年）末までに五萬五千噸級を含む戰艦三十五隻を始めとし、航空母艦二十隻、巡洋艦八十八隻、驅逐艦三百七十八隻、潜水艦百八十隻計七百一隻、總噸數三百五十萬噸、

米の英支

米の大軍

即ち現有勢力の七割増となる史上空前の尨大なる軍備擴張に著手した。尙ほ此の豫算内には二百萬の陸軍と、一萬五千の陸軍機、四千の海軍機と年産五萬機を目標とせる空軍の増強をも含まれてゐる。

殊に米國は合衆國艦隊の強化を圖り、從來の艦隊編制を更新し且つ首腦部の大交迭を行ひ、太平洋艦隊、大西洋艦隊、亞細亞艦隊には夫々獨立の司令官を任命し、尙ほ其の上に太平洋艦隊とその他の艦隊とを統率する聯合艦隊司令長官を任命し、ル大統領の最も信頼せるキンメル少將を簡拔して大將に昇せ、豫て慎重論者と謂はれてゐたりチャー・ドソン太平洋艦隊司令長官に代らしめたのである。

又軍備大擴張に伴ふ建艦に大童となり、造船所の勞務時間の如きは國柄に似ず一週七十二時間に増加して兩洋艦隊の完成を急いでゐる。特にスタルク案に依る新艦船、ケンタッキー以下の七隻は五萬乃至六萬噸の大戦艦にして主砲として十八吋砲を有し、全部太平洋方面へ備へられる豫定である。

尙ほ大建艦に伴ふ設備の擴張、充員等に對しても銳意努力し、兵學校生徒毎年千二百名以上を採用し、艦隊充當兵員も徒來の十萬人より十九萬七千人に更に一躍約廿四萬人に増加せんとしてゐる。併しながら多艦多兵必ずしも強兵ではない、素より量強大にして質優良なるは莫ふ所なれども、最後の勝敗を決するものは物にあらず人であり精神であることを銘記せねばならぬ。有形的勢力如何に大なりとも、艦數如何に多くとも烏合の衆は毫も怖るゝに足らないのである、さりながら近代科學や新銳兵器の向上には最も力を注ぐべきであつて、若し苟且にも之を輕視し或は自己陶醉に耽り敵を蔑視するが如きことあらば、由々しき大事にして特に戒慎を要する所である。

更に海上作戰に於ては、策源地としての軍港、補給基地たる根據地の重要なるは言ふ迄もない、如何に尨大なる海軍力を擁しても根據地なき艦隊は、恰も後方聯絡を斷たれて孤立無援に陥りたる落下傘部隊の如く、進退これ谷まるの外はあるまい。米國が最近頻りに艦船・飛行機の増強を圖ると同時に、根據地の新設に狂奔してゐる所以である。

人員の増

根據地の新設

最後の勝利者

年來の回顧

不動の國策

今若し假りに日米間に戦争起り砲火相見ゆるの不幸が起つたとせば、幾百隻より成る大艦隊の主力が、日本海々戰の如く太平洋の只中で四ツに取組み、一舉に雌雄を決すると云ふが如き場面は容易に出現しないであらう。米國は必らずや遠巻きに包圍陣を結成し、日本の經濟的屈伏を狙ひ、所謂眞綿式戰術を續行するものと豫想される。かくて飛行機、潜水艦及び小艦艇等に依る前哨戰が繰り返され、長期持久戰化するのが近代戰の特徴である。この間に於ける通商破壊戰に因る貿易の杜絶、敵機空襲、船舶の被害は勿論、戰線統後共に最初から戰場化することを覺悟せねばならぬ。戰闘に勝つただけでなく戦争にも勝ち、是が非でも所謂總力戰の最後の勝利者とならねばならないのである。

七、結 論

支那事變は東亞新秩序の建設戰であり、興亞の聖戰である、後るゝこと二年にして西歐新秩序建設戰は勃發し、今や東西に戰火閃めき、世界の大轉換期を示唆してゐる。此の重大時期に際會し想を皇國日本の將來に致すとき、年來の念願こゝに實現の機到れるを感ずるのである。苟くも大日本皇國として、我が肇國宏謨たる八紘一宇の大理念を光被せんが爲めには、自給自足の高度國防國家體制を整へなければならぬ。此の事は前述せる如く到底從來の大陸政策即ち日滿支經濟圏だけでは、國防線に於て將又資材供給力に於て日本の生命を保持することを得ない。これ則ち南洋を含む所の大東亞共榮圏の確立が我が國不動の國策として明確にされた所以である。

我が肇國の精神に基く所の雄大博愛なる此の日本國是は、他國の妨害等に因つて變更せらるゝ如き薄弱なるものではなく若し武力を以て之を妨害するものあらば、武力を以て反撥するのみである。併しながら共榮圏そのものゝ眞意を誤解さるゝに至つては甚だ心外なりと謂はねばならぬ、抑も共榮圏の確保と稱するは、從來の海賊的行爲や、帝國主義的侵略を以て未開の地を掠取し、之を搾取の對象として自己の繁榮と逸樂とを圖り來つた諸國の如く、何も利益

大東亞共榮圈

の獨占とか、他國の權益蹂躪とかの排他的行爲を意味するものではなく、太平洋に散在する諸國諸島の間に、有無相通の鐵則に従ひ、大東亞經濟圈を確立して、東洋民族は素より、世界人類の福祉に寄與せんとする共存共榮、隣保相助の眞意に外ならないのである。

大東亞共榮圈の確立に關しては、從來其の圈内に植民地を所有せる英・佛・蘭・葡等の中、方に自己存立の危險に直面して植民地に對する有力なる發言權を喪はんとし或は已に失ひしもの多く、而かも斯かる状態に立ち至らしめたる獨伊は、曩に三國同盟を締結し明かに條文を以て日本の大東亞に於ける新秩序建設に關して指導的地位を認め且之を尊重してゐるのであつて、今や有力なる發言を爲し得る強國は我國以外に唯米國あるのみである。

斯の如く今や我が國は東亞の盟主として、共榮圈の確保に向つて聖なる巨歩を踏み出したのであるが、何と云うても西太平洋の海空を制壓する丈の力あつての上の仕事であり、更に東西より邪魔立てする外敵を蹴散らす丈の海軍實力あつてのことである。こゝに始めて我が飛行機は西南太平洋上に圖南の鵬翼を連ね得べく、我が商船隊は縱横に南海の碧浪を蹴破し得べく、勤勉なる日本民族の飛躍となり、聰明なる技術と知識との進出となり、放擲されたるジャングルは忽ち開發せられ、死藏されたる寶庫は開かるべく、壓制擄取下に喘げる先住民族は救はるべく、かくの如くして文化的にも經濟的にも皇化仁風に浴せしむるは我が日本國民に與へられたる天の使命であらねばならぬ。

要之、制海なくして大陸政策無く、制海制空無くして共榮圈無し、東亞新秩序の建設と曰ひ、大東亞共榮圈の確立と曰ふも、我が優勢なる陸軍との協力の下に少くとも西太平洋の海空を制壓し得べき海軍力具有が先決條件であつて、高度國防國家樹立の急務なる所以である。

東亞の盟主

第一篇 軍 備

第一章 列國海軍政策

第一節 概 説

各國の海軍政策はその國策遂行を容易ならしむるため、その國の地位、國際情勢等に鑑み樹立されたもので、相當の不變性は持つてゐるが必ずしも一定不變のものではない、一國の軍備も亦他國の軍備狀況、その時の國際情勢、艦船兵器の進歩發達等により量的にも質的にも變化があるのは免れないところである。

故に列國の海軍政策を検討するにはその國策の如何が先決問題となるわけであるが、茲には之を省略して海軍政策を述べることにする。

今や時局は世界の大轉換期を示唆し、現状維持を主張する民主主義國家群と現状打破を標榜する全體主義國家群との間には既に烈しい戦火が交へられ、動もすると世界を擧げて戰禍の巷に捲き込まんとしてゐる、此の際列國の海軍政策の動向を知ることが蓋し極めて重要と謂はねばならぬ。

第二節 米 國

米國の海軍政策は從來世界第一の海軍と、世界最強の海軍を目標としてゐたが、スターク海軍作戦部長の就任と共に

に、一九四〇年に至り、従來の海軍政策を一擲して大西・太平洋兩洋艦隊主義に變更するに至つた。

最近世界を最も衝動させたものは、三選後のルーズヴェルト大統領が、一九四〇年十二月二十九日ホワイト・ハウスより放送した「爐邊閑談」と翌年一月六日議會に読んで朗讀した教書である。この閑談及び教書の持つ内容は殆んど同一であつて、日獨伊樞軸國に對する挑戰的態度を明確にしたものである。即ち爐邊閑談及び教書に於て言はんとしてゐる大統領の意圖は、「米國は史上未曾有の重大時局に際會してゐるのであるから、全力を擧げて米國國防の萬全を期しなければならぬと共に、場所の何れを問はず侵略に抵抗しつゝある民主主義諸國へは全面的援助を惜しまぬものである。而してこれ等の國へ今後續々多數の船舶、飛行機、戰車、大砲等を送ることが米國國防の安全を確保する所以だ」と云ふにある。

米大統領の爐邊閑談要旨

- 一、日獨伊三國條約は米國を威嚇するものである。
 - 二、獨逸は全世界を支配し全人類を奴隸にせんとしてゐる。
 - 三、日本は極東の戰爭製造者である。
 - 四、英米の運命は一致してゐる。若し英國が敗戦すれば米國は危険である。
 - 五、今日英國を極力援助する方が戰爭に捲き込まれる可能性が少い。
 - 六、英國を援助することは今からでも遅くはない。
 - 七、米國の全國土を擧げて英國援助の軍需工場とせよ。
 - 八、日獨伊と手を握るのはギャングに貢物をするやうなものだ。
- また教書の主旨には「米國は今や全世界に於ける民主主義國の巨大な兵器廠である」と謂つてゐる。

更に一月八日ノックス海軍長官は突如としてルーズヴェルト大統領の指令に基き、米海軍の大々的再編成並びに首腦部の大異動を發表したが、その要旨は次の如くである。

- 一、米國艦隊を大西洋、太平洋、亞細亞三艦隊に編成替へする。
 - 二、大西洋艦隊司令長官に、アーネスト・キング少將、太平洋艦隊司令長官にはハツバンド・キンメル大將を新たに任命し、亞細亞艦隊司令長官は従來通りのトーマス・ハート大將とす。
- その他ノックス長官が言明したところによれば、海軍兵員を新たに四萬五千人増員すること、之に依ると現在十九萬二千人を一躍二十三萬七千人に増加するわけである。

又大西、太平、亞細亞三艦隊の新編成は、歐洲及び極東に於ける事態に對處するためであることは勿論、太平・大西兩洋同時作戰を唱道する作戰部長スターク大將の「兩洋艦隊論」の實現に第一歩を進めたものと云へる、米海軍は今後もこの編成に於て艦船はもとより海軍基地も逐次増強されるものと豫想される。

茲に最も注目すべきは、従來米國の政策と軍備とは互に併行せず常に軍備が遅れ勝ちでペーパー・プランに終ることが多かつたが、最近では双方殆んど頭を並べるやうになり、動もすれば軍備の方が先行せんとするの増勢振りさへ示すに至つたことである。

第三節 英國

英國の海軍政策は従來海軍を以て國防の第一線とし、陸軍及び空軍はその補足的のものとしてゐるやうである。殊にその本國の地位並に世界第一の大植民地を領有する關係から通商路の確保及び本國と海外領土との連絡保持を重視し、主力艦隊用の外、多數の巡洋艦を保有するを以て海軍政策の主眼としてゐる。

空軍は一九三八年度より艦隊航空隊に關する限り空軍省より海軍省に移管せしめ、歐洲に於ける最大空軍國獨逸を標準として之に對抗し得る空軍の整備に乘出して來たが、今次の英獨開戦時にはその海軍兵力は獨逸より約七倍の優勢を持つてゐたにも拘らず、空軍力はその半分以下の劣勢であつたことは殊に注目し得る。

第四節 獨逸

獨逸の海軍政策は英獨海軍條約に依る對英三五%の兵力量を一九四一年末までに完成の目的を以て急速充實を圖ると共に、兵力量の劣勢は質的及び人的優越と、歐洲最優の空軍の協力に依つて之を補はんと期してゐるやうである。殊に歐洲戦に於ける對英作戦には飛行機、潜水艦戦に重點を置いて英本土の逆封鎖を強化しつゝある。

第五節 ソ 聯 邦

ソ聯邦の海軍政策は第一次五年計畫時代には潜水艦及び高速艇の急速大量建造に依る所謂「モスキート」艦隊の建設に着手し、第二次五年計畫時代の後半期には大海軍の建設を計畫し主として輕巡洋艦の起工を始め、第三次五年計畫時代には主力艦を含む大艦隊の整備に乘出したが、歐洲戦に於ける戦訓と國際情勢の推移に刺戟され、最近は特に海軍力の充實を痛感し、尨大なる國防豫算を以て之が建設に邁進しつゝある。

又空軍は陸軍以上に重視し之が整備充實には大なる努力を拂ひ、殊に重爆撃機に重點を置いてゐるやうである。

第六節 伊 太 利

伊太利の國策は地中海を制覇し、リビア、エチオピアを踏臺として北阿に跨る一大帝國の建設を理想として居るか

ら、その海軍政策もまた大空軍の威力と相俟つてアドリア海及び中東部地中海の制海權を確保する必要上、佛國海軍との均衡を保持するを以て目標としてゐた。

尙ほ伊エ紛争以來英國と深刻なる對立をなしてから、地中海に於ける英海軍に對抗する海軍力の整備をも考慮するに至つた。

空軍に對しては更に一層の關心を有し、地中海に於ける制空權、即ち對英佛の戦備は勿論、屬領との連絡保持のため大空軍の建設に大なる努力を傾注して來た。

然るに今次の歐洲戦に於て佛國の降服に伴ひ、現在は専ら英海軍に對抗し、英艦隊の半數以上を地中海の東西に釘つけにして盟邦獨逸の對英作戦に寄與してゐる。

第七節 佛 國

地中海に於ては伊國に對し優勢を保持し、少くとも西地中海の制海權の確保を期すると共に、特に本國及び北阿間の交通線の保持を重視して居り、又北海方面では獨逸に對し優勢を持し之を制壓するに足る兵力の保有を期してゐたが、今次歐洲戦に於ける敗戦の結果、獨伊との單獨講和に伴ひその同盟國であつた英艦隊との交戦となり、佛國の保有せる艦隊兵力量約六十萬噸のうち僅かにその三分の一約二十四萬噸を残すのみとなつたのである。

第二章 列國の造艦政策と建艦現狀

第一節 概 説

米國は世界第一海軍を目標として造艦政策を進めて來たことは從來と變りないが、政策と軍備との間に逕庭があつて、謂はば均衡のとれた近代的艦隊は出來てゐなかつた。然るに第一次ヴィンソン案に次ぐに更に二割増の第二次ヴィンソン案が議會を通過し、次いで一九四〇年一月には第三次ヴィンソン案が成立し、更に一割一分を加へられることになつた。その後世界情勢の逼迫と歐洲戰とに刺戟されて引續き第一次、第二次、第三次特別國防豫算の下に大建艦案が成立したのである。第三次特別國防豫算は所謂スターク案なるもので、尨大經費を以て一九四六年までに軍艦約七百一隻、三百五萬噸といふ大建艦計畫であり、尙この豫算には陸軍二百萬と陸海空軍兵力も含まれてゐる。これは佛國敗戦後の世界變局に備へるため、作戰部長スターク大將が大西、太平洋兩洋艦隊完遂を強調して現在の海軍兵力より七割増強を企圖したものである。

更に歐洲戰の激化と太平洋の危機を口實に、援英及び援蔣政策の強化に拍車をかけて來た米國は、逐次追加豫算を議會に提出して建艦の促進、海軍基地の防備強化に乘出し、今では政策と軍備の併頭を出現せんとしてゐるのは特に注目に値する。

英國は近年頻りに海軍及び空軍の整備に努力を拂ひ、歐洲政局の危機に備ふると共に、極東根據地の強化に努めつつあつたが、遂に今回の歐洲戰を迎ふるに至り、今や支那艦隊の大部は極東より引揚げ、歐洲方面に於ては全艦隊の

一部を以て獨逸の上陸作戰に備へ、その約半分以上は地中海の東西に分派して伊國艦隊と相對峙してゐる。

佛國は依然として伊國との建艦競争を行ふと共に、一方獨逸に對しても備ふる立場に在つたが、今度の歐洲戰に於て惨敗し、次いでオラン港に於ける英佛艦隊の交戦等により、全艦隊約六十萬噸のうちその約二十七萬噸を失ふに至つた。

伊國は空軍及び海軍の増勢に努力を傾注し、依然佛國を目標として建艦を續けて來たが、今次の歐洲戰に於て盟邦獨逸に加擔して起つに及び、佛國降服後は専ら全海軍を提げて地中海の英海軍と交戦してゐる。

獨逸は一九三五年、同三七年締結の英獨海軍協力に基き、對英三割五分の海軍力維持を以て造艦政策の目標として來たが、今度の英獨開戦には對英約三割の海軍力を以て戦火を交へるに至つた。

ソ聯邦は近年本格的な海軍の建設に乘出し、その造艦政策も小型から大型へと轉向しつゝあるものの如く、殊に今次歐洲戰の戦訓に鑑み、尨大なる豫算の下に海軍及び空軍の増勢を企てて居るやうである。

いま(昭和十五年九月)列強海軍既成艦艇の概要を表示すれば次の通である。

| | 主力艦 | 航約母艦 | 甲巡 | 乙巡 | 驅 | 潛 | 合計 |
|---|-----|------|----|----|-----|------|-----|
| 米 | 一五 | 六 | 一八 | 一九 | 二二八 | 一〇二 | 三八八 |
| 英 | 一四 | 六 | 一五 | 五二 | 一六八 | 四八 | 三〇三 |
| 獨 | 五 | | 二 | 四 | 約一八 | 約一〇〇 | 一二九 |
| 伊 | 六 | | 八 | 一三 | 五九 | 一〇五 | 一九一 |

(註) 英艦艇中には米よりの讓渡驅逐艦五〇隻と佛より接受したるものを含まず
英獨伊艦艇には戦開中撃沈せられたるものもあるも詳細不明なるを以て含まず

第二章 列國の造艦政策と建艦現狀

列國既成艦艇概要 (昭和十五年九月末日)

| 艦種別 | 戰艦隻數 (噸數) | 航母 | 巡洋艦 | | 驅逐艦 | 潛水艦 | 合計 |
|-----|----------------|--------------|---------------|--------------|---------------|---------------|---------------|
| | | | 甲級 | 乙級 | | | |
| 米 | 一五(四、四〇〇) | 六(一、三三〇,〇〇〇) | 一七(一、一七〇,〇〇〇) | 一七(五、九〇〇) | 三三(三、九〇〇,〇〇〇) | 一〇(一、〇〇〇,〇〇〇) | 三六(一、三三〇,三三〇) |
| 英 | 一四(四、四〇〇) | 六(一、一五〇) | 一五(一、四〇〇,〇〇〇) | 五(三、三〇〇,〇〇〇) | 一六(三、三六〇,〇〇〇) | 四(四、〇〇〇,〇〇〇) | 三〇(一、三三〇,三三〇) |
| 佛 | 六(一、七六〇) | 一(三、一〇〇) | 六(七、〇〇〇) | 一(七、七〇〇) | 六(一、〇〇〇,〇〇〇) | 七(七、三三〇) | 一六(八、五五〇) |
| 伊 | 六(一、四〇〇) | — | 八(九、三三〇) | 一(五、九〇〇) | 五(八、三三〇) | 一(七、七三〇) | 一六(八、五五〇) |
| 獨 | 五(一、〇〇〇) | — | 三(一〇,〇〇〇) | 四(三、四〇〇) | 約一(約三、〇〇〇) | 約一(約三、〇〇〇) | 約三(約三、〇〇〇) |
| 蘇 | 舊式 三(六、八七〇) | — | 三(三、〇〇〇) | 一(五、一七〇) | 約三(約三、〇〇〇) | 約三(約三、〇〇〇) | 約三(約三、〇〇〇) |
| 和蘭 | — | 一(一、〇〇〇) | — | 四(三、一〇〇) | 九(三、一五〇) | 三(一、四七三) | 三(五、〇一九) |

註 米驅逐艦中には英に譲渡せる五〇隻を含む
佛艦中には英海軍に接受又は武装解除されたものも含む
各交戦國間の擊沈艦艇は未詳なるを以て本表には考慮せず

第二節 米 國

米國海軍は近來軍備の大擴張を行ふと同時に、そのバランスド・フリート(釣合のとれた艦隊)の整備に腐心し兩洋艦隊の完遂に邁進してゐる。殊に海上武力の根幹たる主力艦は勿論、巡洋艦以下の補助部隊の建造促進にも全力を

傾注してゐるやうである。ルーズヴェルト大統領就任以來、米國の國防豫算は逐年増加して一九三九年には十一億四千萬弗餘に達したが、歐洲戰爭の勃發に伴ひ軍備に拍車を加へ、一九四〇年の第三次ヴァインソン案では、六十五億五千萬弗の豫算を以て戰闘艦艇二十一隻(一六七、〇〇〇噸)、特務艦艇二十二隻(七五、〇〇〇噸)を二箇年以内に建造することに決し、同年七月一日全部の發註を了し、更に同七月二十日成立したスターク案なるものは、邦貨約四百億圓以上の總豫算を以てする兩洋艦隊整備法案であつて、戰闘艦艇及び補助艦艇の七割増強で、一九四六年完成豫定を以て總艦艇七百一隻、三百五萬噸を建造するにある、そのうち二百一隻は九月九日各造船會社との建造を契約したといはれてゐる。

二、建艦狀況

一九四〇年末以來米海軍省の發表に依る、米海軍現有勢力は現に就役中の艦艇三五八隻であるが、目下建造中のもの及び發註済のものを加へれば左表の如く一九四七年には六八八隻、これに未發表のもの十三隻を加へ總計七〇一隻、三〇五萬餘噸といふ世界最大の海軍力となるわけである。

| 艦種 | 現在 | 建造中 | 新計畫(發註済) | 合計 |
|------|-----|-----|----------|-----|
| 戰艦 | 一五 | 一〇 | 七 | 三二 |
| 航空母艦 | 六 | 四 | 八 | 一八 |
| 巡洋艦 | 三七 | 二一 | 二七 | 八五 |
| 驅逐艦 | 一九七 | 五六 | 一一五 | 三六八 |
| 潛水艦 | 一〇三 | 三九 | 四三 | 一八五 |

第一篇 軍備

主力艦

| 艦名 | 噸數 | 計 | 備 |
|-------------|--------|-----|-----|
| アイダホ | 三三、四〇〇 | 三五八 | 二四 |
| ニューメキシコ | 三三、四〇〇 | 一三〇 | 二〇〇 |
| ペンシルヴァニア | 三三、一〇〇 | | 六八八 |
| ミシシッピ | 三三、〇〇〇 | | |
| アリゾナ | 三三、六〇〇 | | |
| コロラド | 三三、五〇〇 | | |
| テネシ | 三三、三〇〇 | | |
| ウエスト・ヴァージニア | 三三、八〇〇 | | |
| メリーランド | 三一、五〇〇 | | |
| ネヴァダ | 二九、〇〇〇 | | |
| オクラホマ | 二九、〇〇〇 | | |
| ニューヨーク | 二七、〇〇〇 | | |
| テキサス | 二七、〇〇〇 | | |
| アーカンソー | 二六、一〇〇 | | |

大軍備の擴張に狂奔する米國は殊に大建艦の工事に大重となり、造船所に於ける勤務時間の如きも一週四十時間よ

り七十二時間にまで増加して兩洋艦隊の完成を急ぎ、現に建造中の三萬五千噸級戦艦六隻のうちその五隻は本年中に竣工の豫定で、本年七月竣工の筈であつたノースカロライナは四月に繰上げられ、新編製の太平洋艦隊旗艦に豫定されてゐるといふ。又四萬五千噸級戦艦四隻の中その三隻は既に起工を終り、未起工のものは僅か一隻を残すのみとなつてゐる。

建造中の戦艦

| 艦名 | 噸數 | 竣工豫定(年一月) |
|----------|--------|-----------|
| ノースカロライナ | 三五、〇〇〇 | 一九四二—四 |
| ワシントン | 三五、〇〇〇 | 一九四二—九 |
| アラバマ | 三五、〇〇〇 | 一九四二—一二 |
| マサチューセツツ | 三五、〇〇〇 | |
| インディアナ | 三五、〇〇〇 | |
| サウスダコタ | 三五、〇〇〇 | 一九四二 |
| アイオワ | 四五、〇〇〇 | 一九四四 |
| ウイスクンシン | 四五、〇〇〇 | 一九四一(起工) |
| ミズーリ | 四五、〇〇〇 | 一九四一(起工) |
| ニュージャージー | 四五、〇〇〇 | 未起工 |

更に一月二十二日突如として發表されたスタート案に依る大戦艦七隻は、いづれも十八吋主砲を搭載するところの五萬乃至六萬噸級と想像されてゐるがその艦名は次の如くである。

第二章 列國の造艦政策と建艦現狀

ケンタツキ
イリ、ノイス
オハヨ
ルイジヤナ
ニューハンブシャー
メ
モン

對同盟國との建艦比較

一九四一年一月十七日ノックス海軍長官は米下院外交委員會に於て、日獨伊三國は侵略的意圖を持つと攻撃し、この儘の状態を續ければ歐洲極東の戦禍が必ず米國に波及し、その手始めとして南米が先づ槍玉に上るだらうと述べ、この際はが非でも英國を盛り立てて英米兩海軍の勢力を以て樞軸國に對抗すべしと述べ、最後に次の如き日獨伊三國と米國との海軍勢力比較表を發表した。

日獨伊三國對米國海軍勢力比較表（ノックス海軍長官發表）
 (一) 一九四一年一月に於ける噸數比較表

| | |
|-------|-----------|
| 米國 | 一、二五〇、〇〇〇 |
| 獨伊合同 | 八五〇、〇〇〇 |
| 日獨伊合同 | 一、八三五、〇〇〇 |

日獨伊佛合同

二、一四五、〇〇〇

(二) 一九四一年一月、一九四二年一月、一九四三年一月に於ける米國と日獨伊三國（佛國を含まず）との各艦種別、隻數比較表

| 艦種 | 米國 | 日獨伊 | 一九四一年 | 一九四二年 | 一九四三年 |
|------|----|-----|-------|-------|-------|
| 戰艦 | 米 | 日獨伊 | 二一五 | 二一七 | 二一八 |
| 航空母艦 | 米 | 日獨伊 | 八六 | 八六 | 八七 |
| 巡洋艦 | 米 | 日獨伊 | 七三七 | 八三七 | 一〇四五 |
| 驅逐艦 | 米 | 日獨伊 | 二七一九 | 二九二四 | 三二一九 |
| 潛水艦 | 米 | 日獨伊 | 二八四五 | 四〇〇八 | 五〇三三 |
| 總計 | 米 | 日獨伊 | 六五八二 | 八〇三二 | 九四二二 |

尙佛國の現有勢力は左の通りである。
 戰艦一、航空母艦一、巡洋艦一四、驅逐艦五二、潛水艦六〇

第三節 英 國

一、造 艦 政 策

英國は對外的軍備の不足からチェッコ問題以來、近年至るところ外交上退却を餘儀なくされて國防力の再建を決意し昭和十二年國防費十五億磅の巨額を以て五箇年計畫で軍備充實の促進に乗出し、昭和十七年（一九四二年）頃までには少くとも艦齡内艦船百五十萬噸以上を保有し、艦齡超過艦を加ふれば二百萬噸に垂なんとする大海軍力を目標として居り、空軍兵力も亦昭和十五年（一九四〇年）三月までには第一線機數約三千五百機を充實せんと企圖してゐたやうであるが、ポーランド問題を繞り一九三九年九月遂に獨逸と開戦するに至つた。

二、建 艦 狀 況

最近に於ける英國の建艦方針に依ると、英米佛三國ロンドン會議（一九三六年）で戦艦は三萬五千噸級に止めることに決したが、一九三八年日本が建艦通報協定に参加せざるに藉口して大體四萬五千噸に修正するに至つたのである。しかし新戦艦五隻（ジョージ五世、プリンス・オヴ・ウェールズ、アンソン、ビーティ、ゼリコー）は依然三萬五千噸の排水量でライオン以下の四隻は四萬噸、主砲十六吋砲のもので進んでゐるやうである。

而して獨英開戦當時、英海軍の勢力は約百三十五萬噸であつたが、今日まで英國側の發表その他に依る喪失艦艇は概ね次の通である。

戰艦（ロイヤル・オーク） 一隻

航空母艦（カレジマス） 一隻
 巡洋艦 二隻
 驅逐艦 一三隻
 潜水艦 一八隻

尙ほ佛國海軍より收容した艦艇の外、米國より讓渡を受けた驅逐艦は五十隻である。

三、最近に於ける英國の建艦計畫

主力艦は従來列強海軍よりも比較的小型を望み、その主砲の口径も小型を採用する傾向ありしは、蓋し政略上の理由の外他國より多數の主力艦を持ちたい希望から出發したものと考へられる。即ちキング・ジョージ五世以下の五隻は依然排水量は三萬五千噸で、主砲は十四吋砲十門であるが、ライオン以下四隻の戦艦はづれも排水量四萬噸、主砲十六吋砲を搭載するものと推定される。

一九四〇年初頭に於ける建造中の主力艦は七隻（二五五、〇〇〇噸）で未起工は二隻（八〇、〇〇〇噸）と傳へられてゐる。

航空母艦は近來純然たる近代的のもの建造に著手すると共に、巨費を投じて既成艦の近代的改装に努めてゐるやうである。今次の歐洲戦争に於て地中海に於ける英伊海戦の際、航空母艦の活躍は特に注目し値するものがあるといはれてゐる。而して同年初頭に於ける建造中の航空母艦は五隻（一一五、〇〇〇噸）未起工は一隻（二三、〇〇〇噸）といはれてゐる。

巡洋艦は各國と同じく、甲乙兩級巡洋艦の二種を保有する方針で進んでゐる。目下英國では甲級巡洋艦の建造は一

段落を告げたもののやうで現在建造中のものは一隻もないが、之に反して乙級巡洋艦の充實には目覚しい進捗を示してゐる。之は全世界の海洋八萬哩に達する通商貿易路乃至は物資補給線を保護すべき重大任務を有する英國としては絶對の必要から割出されたもので、目下七十隻の巡洋艦の整備を企圖してゐる。

一九四〇年初頭に於ける建造中の乙級巡洋艦は十四隻（一八九、〇五〇噸）で、未起工は九隻（六九、四五〇噸）といはれてゐる。

驅逐艦は英國の専門家の中には從來艦隊隨伴の大型艦と沿岸防備の中型及び小型艦の二種に大別して建造するを可とする意見がある。従つて前者は主として水雷發射機能に主力を注ぎ、後者は砲裝に重點を置き、兼ねて機雷掃海用並に巡邏、防空用など専ら沿岸防備に使用せんとするものやうである。

潜水艦は大型潜水艦としては一九三五年頃までは主として一千五百噸級を建造したのであつたが、一九三六年以降は一千百噸級を採用することに變更したやうである。之を既成及び建造中のものに就いて觀察すれば、その隻數の二十數隻に過ぎない點から見ても英國の潜水艦に對する關心は頗る微溫的であることが窺はれる。

尙ほ英國海軍の現有勢力は概ね次の通りである。（一九四〇年初頭調）

| 艦種 | 隻數 | 基準排水量(噸) |
|-------|-----|----------|
| 主力艦 | 一四 | 四四五、五五〇 |
| 航空母艦 | 六 | 一一四、八五〇 |
| 甲級巡洋艦 | 一五 | 一四五、六二〇 |
| 乙級巡洋艦 | 四九 | 三二四、三三五 |
| 驅逐艦 | 一八三 | 二四一、八〇九 |

| | | |
|-----|-----|-----------|
| 潜水艦 | 六〇 | 六二、七九九 |
| 計 | 三二七 | 一、三二四、九六三 |

第四節 獨逸

一、造艦政策

獨逸の造艦政策は、獨英海軍協定に基き對英三割五分の海軍力維持を目標として少くとも一九四一年までに、大戦艦五隻、袖珍戦艦三隻、航空母艦二隻、巡洋艦十四隻、驅逐艦及び水雷艇四十隻、並に潜水艦合計約二萬三千噸より成る新海軍の建設に進んで来たやうであるが、歐洲大戰の逼迫に伴ひ一九三九年四月二十九日、獨英海軍協定を一方的に廢棄して之を英國に通告し、同年九月英佛と宣戦するに至つたのである。

二、建艦狀況

獨逸の主力艦はポケット戦艦三隻（一〇、〇〇〇噸級、十一吋砲六門）の外に、シャルンホルスト級（二六、〇〇〇噸、十一吋砲九門）を建造し、次いでビスマルク級三萬五千噸級二隻（主砲十五吋砲八門）の建造にも着手するに至つた。今次の歐洲戦に通商破壊戦で活躍してゐたシャルンホルストの姉妹艦シュナイ号が南米のウルガイ沖で英艦隊と交戦後自爆したことは周知の通りである。
更に獨逸は航空母艦二隻（一九、二五〇噸級）の建造に着手したが、之は獨逸の再軍備建設に伴ふ最初の艦種であつた。

潜水艦の建造に就ては獨逸が特に力を入れたところであつて、一九三五年ヴェルサイユ條約の一方的破棄以來初めて建造に着手したもので、二五〇噸、五五〇噸、七五〇噸の三種に限定し、今次開戦當時は五十六隻を有してゐたが今日では既に二百數十隻を持つて居り、飛行機と協同して英國の逆封鎖を目指して盛んに活躍しつゝある。

第五節 蘇 聯 邦

一、建 艦 政 策

ソ聯は未だ列強の如き均衡のとれた艦隊を再建する能はず、専ら潜水艦や高速水雷艇のやうな所謂モスキート・フリートの建設に傾注し、潜水艦及び快速艇の數に於ては世界第一の域に達してゐたが、第二次五箇年計畫以來、強大なる海軍力の必要を痛感し、殊に最近は歐洲戰に刺戟されて大建艦を根幹とする近代的海軍の新建設に乗り出したやうであることは特に注目に値する。

二、建 艦 狀 況

ソ聯は既に三萬五千噸級の主力艦二隻乃至三隻建造中といはれてゐるが、その要目等は一切嚴秘に附せられてゐるので判明しない。

第六節 伊 太 利

一、造 艦 政 策

ムッソリニ首相はその就任以來舊ローマ帝國再現を理想として地中海の制覇を目指し、その建艦及び空軍整備にも着々歩武を進めて來たことは周知の通りである。即ち伊國は海上、特に地中海に面する歐洲大陸の強國佛蘭西と等勢の海軍を保持すべき原則の下に、一九三五年度より三萬五千噸級の新戦艦四隻の建造に着手したのである。

二、建 艦 狀 況

伊國の新戦艦リットリオ級三萬五千噸二隻は、一九三四年の起工に係かり、今次の歐洲戰爭中既に竣工就役し、他の二隻は目下建造中であるが是等主力艦は佛國主力艦と同様その主砲は十五吋砲である。

航空母艦は伊國は依然造つてゐない、之は地中海のみで作戦する見地の下に、今のところ適當なる沿岸及び散在せる島嶼を空軍基地に利用し得るので航空母艦の必要を認めないといふのである。又潜水艦に關しては獨逸と同じく一千噸級以下の中小型建造に集中してゐる。

第七節 佛 蘭 西

一、造 艦 政 策

佛國は近年歐洲の危機に伴ひ、専ら英國に依存することとなり對英海軍の必要は解消するに至つたが、一方伊國に對抗すると共に獨逸にも備へる必要に迫られ、腹背の獨伊樞軸國間に介在し、英佛聯合勢力を以て獨伊と干戈を交へるに至つたわけである。

二、建艦狀況

一九四〇年四月以來佛海軍は英海軍と協力して北海及びドーヴァー海峡方面で獨海軍と戦ひ、地中海方面では伊海軍と對抗してゐたが、北佛戦線に於ける惨敗により佛國は同年六月遂に獨逸に對し降服するに至つた。

その後佛艦隊の一部はオランダ港に於て英艦隊と交戦するの悲劇を演じ四分五裂の惨狀を呈するやうになつて、開戦當時約六十萬噸を有してゐた佛艦隊はその約二十七萬噸を失ひ殘存艦艇は僅かに約二十四萬噸に減少してしまつた。尙ほ佛國海軍の現有勢力は概ね次の如くである。(一九四〇年一月調)

(註、今次戦争のための喪失艦艇等をも含む)

| 艦種 | 隻數 | 基準排水量(噸) |
|-------|----|----------|
| 主力艦 | 七 | 一六四、〇〇〇 |
| 航空母艦 | 一 | 二二、〇〇〇 |
| 甲級巡洋艦 | 七 | 七〇、〇〇〇 |
| 乙級巡洋艦 | 一一 | 八〇、〇〇〇 |
| 驅逐艦 | 七八 | 一三三、〇〇〇 |
| 潜水艦 | 七九 | 七五、〇〇〇 |

計

一八三

五四四、〇〇〇

第八節 各國の代表艦及び建艦概要

以上概記した各國の造艦政策並に建艦狀況を綜合する意味に於て之に關する列國最新艦艇一覽表を擧ぐれば次の通りである。

| 新戰艦 | 國名 | 艦名 | 基準排水量 | 速力 | 主砲數 | 竣工建造年月 |
|-----|----------|-------|--------|-------|-----------------|-----------------------|
| 米 | アノイス | カロライナ | 四五、〇〇〇 | 二八・三〇 | 四〇糎—九 | 一九四一—四 一九四〇—六(既起工) |
| 英 | キングジョージ | 五世 | 三五、九〇〇 | 三三 | 三六糎—一〇 | 一九三九—二(進水済) 一九二七—六 |
| 佛 | ストラスブルグ | グ | 二六、五〇〇 | 二九・五 | 三三糎—八 (四聯二基) | 一九三八—二 |
| | ジャン・パール | ル | 三五、〇〇〇 | 三〇・〇 | 三八糎—八 | 一九四〇—三(進水済) |
| 伊 | リットリオ | オ | 三五、〇〇〇 | 三〇 | 三八糎—九 | 一九四〇 |
| 獨 | シャルンホルスト | マ | 二六、〇〇〇 | 三〇 | 二八糎—九 | 一九三九—一 |
| | ビスマルク | ク | 三五、〇〇〇 | — | 三八糎—八 | 一九四〇 |

第二章 列國の造艦政策と建艦現狀

三五

新巡洋艦

| 國名 | 艦名 | 基準排水量 | 速力 | 飛行機數 | 竣工年 |
|----|------------------------------------|-----------------------------|-----------|------------|------------------|
| 米 | ホワエン イタ ネスタ ツウ トブ ズ | 二〇四九 〇七九 〇〇〇〇 〇〇〇〇 | 三四 | 七六 | 一九三三 一九三八 |
| 獨 | アドミ ラル ヒツ バル グ | 一〇六 〇〇 〇〇 | 三一 | 一五 八 | 一九三五 一九四一 |
| 伊 | ボレル ゴザ ルノ | 一三〇 三〇 六二〇 | 四三六 | 三〇 八 | 一九三三 一九三九(起工) |
| 佛 | モア ンル トゼ カリ ム | 一七〇 六〇 〇〇 | 三三一 〇〇 | 一五 八 | 一九三三 一九三九 |
| 英 | ペドル セフ アト シヤ ト | 一〇九 〇九 〇七五 | 三三三 二五 | 一五 八 | 一九三三 一九三九 |
| 米 | ブル イツ クシ ン | 一〇九 〇三 〇七五 | 三三 | 一五 八 | 一九三三 一九三六 |

新驅逐艦

| 國名 | 艦名 | 基準排水量 | 速力 | 魚雷數 | 竣工建造年月 |
|----|--|--|---|---|--|
| 英 | イフビ イラ ク ン ド ミ タ ダ ブ ル ス | 二二三 三三三 三三三 三三三 〇〇〇〇 〇〇〇〇 | 三三 三三 三三 三三 三三 三三 | 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 | 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 |
| 佛 | ペジ ア ル ン ブル | 一八八 〇〇 一四六 〇〇 | 三三 二二 〇〇 | 四八 | 建造中 |
| 獨 | B ラ フ ゼ ツ ベ リ ン | 一九九 二二 五五〇 | 三三 二二 | 四四 〇〇 | 一九四四 一九四〇 |
| 蘇 | 外 ス ニ タ 隻 建 造 中 | 九〇〇〇 | 三〇 | 二二 | |
| 米 | シ W ・ B ・ ヨ ・ ヅ エ ツ ム イ ン ト ソ ン | 一、一、 五六八 五七三 〇〇〇 | 三三 三三 三三 三三 三三 三三 | 五五 三三 三三 三三 三三 三三 | 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 |
| 英 | ジ ヤ ガ ル | 一、一、 六八七 六九七 〇〇 | 三三 三三 三三 三三 三三 三三 | 五五 三三 三三 三三 三三 三三 | 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 一九三三 |

第一篇軍備

三八

| 國名 | 艦名 | 排水量(水上) | 水上速度 | 發射管數 | 進水年 |
|----|-------------------|---------|-------|----------|----------|
| 佛 | アヴ オール デタ (擲イ) | 二、七八四 | 三三八 | 五五種 一〇七 | 一九三八 一六六 |
| 伊 | Gア カイヂ ユツ シレ | 一、七六二 | 三九九 | 五三三種 一六六 | 一九三八 一七〇 |
| 獨 | LH マク 11 スン | 一、六八二 | 三六六 | 五三三種 一八八 | 一九三八 一七〇 |
| 米 | サバ ル 1 ゴ 1チ | 一、四三〇 | 二二 | 五三三種 一八六 | 一九三八 一七〇 |
| 英 | ウ ト ラ イ ク ア ス ラフル | 一、五二〇 | 一五・七五 | 五三三種 一六六 | 一九三八 一七〇 |
| 佛 | オ サ イ チ フ エ ラ ッ ク | 一、三七九 | 一四・五 | 五五種 一九一 | 一九三九 一七〇 |
| 伊 | Gセ マ イ ル コニ イト | 一、四六六 | 一八八 | 五四種 一八四 | 一九三九 一七〇 |

第三章 列國海軍豫算竝に施設
第一節 總說

戦近列國の國防費は年々増加の一途を辿り、殊に歐洲戰勃發以來、交戦國外に在る米國及びソ聯邦の國防豫算すらも未曾有の尨大を示し、世界は舉つて海軍力の増強に邁進してゐる。いま最近兩三年間にける列國軍事費を表示すれば次の通りである。

列國軍事費(對總豫算)一覽表

| 國名 | 昭和十四年度(一九三九年) | | | 昭和十五年度(一九四〇年) | | |
|------|---------------|------------|-----|---------------|--------------|-----|
| | 總歲出 | 海軍費 | 百分比 | 總歲出 | 海軍費 | 百分比 |
| 日(圓) | 一、三六三、一六七、七〇〇 | 八六、三三、四三三 | 七・三 | 一、三、五〇〇、〇〇〇 | 一、〇九〇、〇〇〇 | 七・五 |
| 米(弗) | 九、〇九〇、三三三、六四一 | 七〇、七九、四四六 | 七・九 | 一、八、三三三、三三三 | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 五・五 |
| 英(磅) | 一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇 | 八四、三三三、三三三 | 八・四 | 不發表 | 不發表 | — |
| 佛(法) | 一〇〇、〇〇〇、〇〇〇 | 八〇、〇〇〇、〇〇〇 | 八〇 | 七九、八八九、二七〇 | 七、八八五、二八、一三三 | 九・九 |

第一篇 軍 備

四〇

伊(利)

三六、三〇、三五、九六

二、七三、五七、八〇九

一三・七

四三、三六、七三、八六一

三、四五、五九、八三、元

八・五

註 一、英佛伊には空軍費あるも之を省けり

二、×追加豫算

三、各國會計年度 日英は自四月一日至翌年三月三十一日、米伊は自七月一日至翌年六月三十日、佛は自一月一日至翌年十二月三十一日

第二節 日 本

一、海 軍 豫 算

昭和十五年度海軍豫算中第七十五回帝國議會に於て海軍側より貴衆兩院に對する説明の概要は經常部、臨時部を併せ十億二千八百九十四萬五千三百三十圓であつて、之を前年度豫算額八億二千六百七十五萬二千四百三十二圓に比すれば二億二百九十九萬二千六百九十八圓の増加を示してゐる。

昭和十六年度海軍豫算中貴衆兩院に對し一般會計海軍豫算説明の内譯は左の通りである。(單位千圓)

| | |
|-----|-----------|
| 經常部 | 四六四、三四五 |
| 臨時部 | 七七六、六八八 |
| 計 | 一、二四一、〇三四 |

而してこれを昭和十五年度豫算に比すれば二・一、九五八の増加となつてゐる。航空經費については出來得る限り

節減繰延べを行ひ、出征艦船部隊の維持費等は前年同様臨時軍事費を以て充てることとしたので、これは一般會計より減少したが、既定經費の増加、新艦船部隊の維持費の増加、艦船部隊工作等その他緊要なる人員の増加、工作廳、防備部隊、航空隊の増設整備等、既定・新規とも増加したため二億圓餘の増加となつたものである。

一、昭和十六年度海軍省所管歳出豫算

| | | |
|-------------|--|--------------|
| 經常部 | | 一、一七九、三七八圓 |
| 第一款 海軍本省 | | 四六二、一九九、二四四圓 |
| 第二款 軍費 | | 九六六、五六五圓 |
| 第三款 諸支出金 | | 四六四、三四五、一八七圓 |
| 臨時部 | | 四二四、一七四、八九七圓 |
| 第一款 艦艇製造費 | | 一八五、三四九、〇〇〇圓 |
| 第二款 水陸整備費 | | 八四、二六二、〇〇〇圓 |
| 第三款 航空隊設備費 | | 四二、〇七五、〇〇〇圓 |
| 第四款 艦船整備費 | | 九、八三七、六〇〇圓 |
| 第五款 軍需品整備費 | | 九六二、四六二圓 |
| 第六款 管轄費 | | 二、七七三、一二九圓 |
| 第七款 受託造修費 | | 二〇一、七〇三圓 |
| 第八款 拂下圖誌製造費 | | |

第三章 列國海軍豫算並に施設

- 第一篇 軍備
 - 第九款 研究費 一八、三一七、四七六圓
 - 第十款 一時賜金 三二八、〇四〇圓
 - 第十一款 震災復舊費 二〇〇、〇〇〇圓
 - 第十二款 航空高層氣象圖誌其他調製費 五〇、〇一三圓
 - 第十三款 在勤作其他臨時増給 六五七、六〇七圓
 - 第十四款 特別會計資本繰入 七、五〇〇、〇〇〇圓

二、昭和十六年度海軍省所管追加豫算

- 經常部、臨時部合計 一、二四一、〇三四、一一四圓
- 經常部 七七六、六八八、九二七圓
- 臨時部合計 七、五〇〇、〇〇〇圓
- 臨時部
 - 第一款 艦艇製造費 八七、一四五、七五〇圓
 - 第二款 水陸整備費 一七二、七八八、〇〇〇圓
 - 第三款 航空隊設備費 七、三〇〇、〇〇〇圓
 - 第五款 軍需品整備費 四一、一五〇、〇〇〇圓
 - 第十五款 災害費 三五四、二五〇圓
- 經常部、臨時部合計 三〇八、七三八、〇〇〇圓
- 臨時部合計 三〇八、九五一、六八二圓

三、昭和十六年度海軍省所管歳出豫算總額

- 經常部 四六四、五五八、八六九圓
- 臨時部 一、〇八五、四二六、九二七圓
- 計 一、五四九、九八五、七九六圓

右ヲ前年度豫算額ニ比スレバ左ノ如シ

| 區分 | 十六年度豫算額 | 十五年度豫算額 | 比較ノ差増減(△) |
|-----|----------------|----------------|--------------|
| 經常部 | 四六四、五五八、八六九圓 | 三五一、三九二、九〇一圓 | 一一三、一六五、九六八圓 |
| 臨時部 | 一、〇八五、四二六、九二七圓 | 六七七、六八二、六一六圓 | 四〇七、七四四、三一〇圓 |
| 計 | 一、五四九、九八五、七九六圓 | 一、〇二九、〇七五、五一七圓 | 五二〇、九一〇、二七九圓 |

四、昭和十六年度豫算増減ノ大別

| 區分 | 經常部 | 臨時部 | 計 |
|-----------------------|----------------|---------------|----------------|
| (一) 前年度ヨリノ施設等ニ伴フ經費ノ増加 | 二四三、三八六、三〇七圓 | 五〇、〇一三圓 | 二四三、四三六、三二〇圓 |
| (二) 新規要求ニ依ル經費ノ増加 | 五一、二二四、〇〇二圓 | 四四四、四五五、九二七圓 | 四九五、六七九、九二九圓 |
| (三) 前年度ヨリノ施設等ニ伴フ經費ノ減少 | △ 一四、四〇〇、八六五圓 | △ 二五、二六九、六二九圓 | △ 三九、六七〇、四九四圓 |
| (四) 節約ニ依ル經費ノ減少 | △ 三、二四四、八七二圓 | △ 一一、四八〇、〇〇〇圓 | △ 一四、七二四、八七二圓 |
| (五) 要求ニ依ル經費ノ減少 | △ 一六三、七九八、六〇四圓 | △ 一二、〇〇〇圓 | △ 一六三、八一〇、六〇四圓 |

第三章 列國海軍豫算並ニ施設

第一篇 軍備

合計

一一三、一六五、九六八

四〇七、七四四、三二一

四四

五二〇、九二〇、二七九

右各項ノ内譯ヲ示セバ左ノ如シ

(一) 前年度ヨリノ施設等ニ伴フ經費ノ増加

| 區分 | 經常部 | 臨時部 | 計 |
|-----------------|--------------------------|---------------------|--------------------------|
| 1 既定經費豫定年割額等ノ増加 | 二四三、三八六、三〇七 ^円 | 五〇、〇一三 ^円 | 二四三、四三六、三二〇 ^円 |

(二) 新規要求ニ依ル經費ノ増加

| 區分 | 經常部 | 臨時部 | 計 |
|---------------|------------------------|-------------|------------------------|
| 1 新艦船維持ニ關スル經費 | 九、四六七、一四〇 ^円 | | 九、四六七、一四〇 ^円 |
| 2 定員充實ニ關スル經費 | 七、八〇九、六八二 | | 七、八〇九、六八二 |
| 3 航空ニ關スル經費 | 一、五八八、三一〇 | | 一、五八八、三一〇 |
| 4 艦船建造ニ關スル經費 | | 一一、七四二、〇〇〇 | 一一、七四二、〇〇〇 |
| 5 水陸諸設備ニ關スル經費 | | 一一〇、四四五、七五〇 | 一一〇、四四五、七五〇 |
| 6 艦船整備ニ關スル經費 | | 二二八、四一二、〇〇〇 | 二二八、四一二、〇〇〇 |
| 7 軍需品整備ニ關スル經費 | | 一一、五三八、〇〇〇 | 一一、五三八、〇〇〇 |
| 8 其ノ他ノ經費 | | 四四、八六七、六〇〇 | 四四、八六七、六〇〇 |
| 計 | 二二、三五八、八七〇 | 二六、四五〇、五七七 | 四八、八〇九、四四七 |
| 計 | 五一、二二四、〇〇二 | 四四四、四五五、九二七 | 四九五、六七九、九二七 |

(三) 前年度ヨリノ施設等ニ伴フ經費ノ減少

| 區分 | 經常部 | 臨時部 | 計 |
|---------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1 前年度限費途ノ減少 | △一四、四〇〇、八六五 ^円 | △一〇、〇二一、三九九 ^円 | △二四、四二二、二六四 ^円 |
| 2 既定繼續費年割額ノ増減 | △一四、四〇〇、八六五 ^円 | △一五、二四八、二三〇 | △一五、二四八、二三〇 |
| 計 | △一四、四〇〇、八六五 | △二五、二六九、六二九 | △三九、六七〇、四九四 |

(四) 節約ニ依ル經費ノ減少

| 區分 | 經常部 | 臨時部 | 計 |
|-------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1 節約額 | △三、二四四、八七二 ^円 | △一、四八〇、〇〇〇 ^円 | △三、二四四、八七二 ^円 |
| 2 繰延額 | △三、二四四、八七二 ^円 | △一、四八〇、〇〇〇 ^円 | △一、四八〇、〇〇〇 ^円 |
| 計 | △三、二四四、八七二 | △一、四八〇、〇〇〇 | △一四、七三四、八七二 |

(五) 要求ニ依ル經費ノ減少

第三章 列國海軍豫算並に施設

| 區分 | 經常部 | 臨時部 | 計 |
|--------|---------------------------|----------------------|--------------|
| 1 要求減額 | △一六三、七九八、六〇四 _円 | △一二、〇〇〇 _円 | △一六三、八一〇、六〇四 |

二、施設

海軍制度の改變その他に伴ふ新規事業は次の如くである。(自昭和十五年五月一日至同十六年四月一日)

昭和十五年度中の主なる新規事業

- 一、新艦船維持費
- 一、定員充實に關する經費
- 一、航空に關する經費
- 一、水陸諸設備に關する經費
- 一、艦船整備に關する經費
- 一、軍需品整備に關する經費
- 一、諸研究費
- 一、教育に關する經費
- 一、建築物の維持費其他

昭和十六年度中の主なる新規事業

- 一、阪神海軍部の經理部、軍需部新設に要する經費
- 一、各要港部に建築部新設に要する經費
- 一、海軍機雷學校、海軍工作學校の新設費
- 一、霞ヶ浦病院、山中病院の維持費
- 一、委託齒科生徒採用費
- 一、兵科、機關科、工作科の豫備補修等の増員に要する經費
- 一、兵員の豫防施設と改善費

第三節 米 國

一、海軍豫算

米國は一九四〇年四月獨逸軍が北歐戰に成功し、五月白蘭進入、次いで六月佛軍の降伏に刺戟せられて第一乃至第三特別國防豫算を議會に提出し、一舉にして之を成立せしめた。

この大軍備豫算は一九四〇年六月十七日成立した第三次ヴィンソン案に依る豫算六五、五〇〇萬弗に引續き六月十八日議會に提出、七月二十日成立を見たところの所謂スターク案であつて、その主なる用途は、艦艇、航空機及び所要人員の充實その他海軍基地の強化、陸軍軍備の充實を目標としたものである。

國防豫算(單位百萬弗)

第一特別國防豫算

三、三一三(陸軍費一、八二〇を含む)

第三章 列國海軍豫算並に施設

| | |
|----------|-------|
| 第二特別國防豫算 | 一、七七七 |
| 第三特別國防豫算 | 五、二五六 |
| 追加國防豫算 | 一、四八三 |
| 合 計 | 一、七二九 |

翌一九四一年豫算總額は百五十五億弗以上に達し、總豫算額の六割二分約百八億弗は軍事費(内海軍費は三四億弗)に充當されてゐる。

更に援英、援蔣の積極的工作に乗出した米國は武器貸與法案及び第四次國防追加豫算十五億三千三百五十六萬弗餘を三月の上院で可決したと傳へられてゐる。

尙ほ一月八日發表されたルーズヴェルト大統領の百七十五億弗豫算説明の教書の一節を摘録すれば次の如くである。

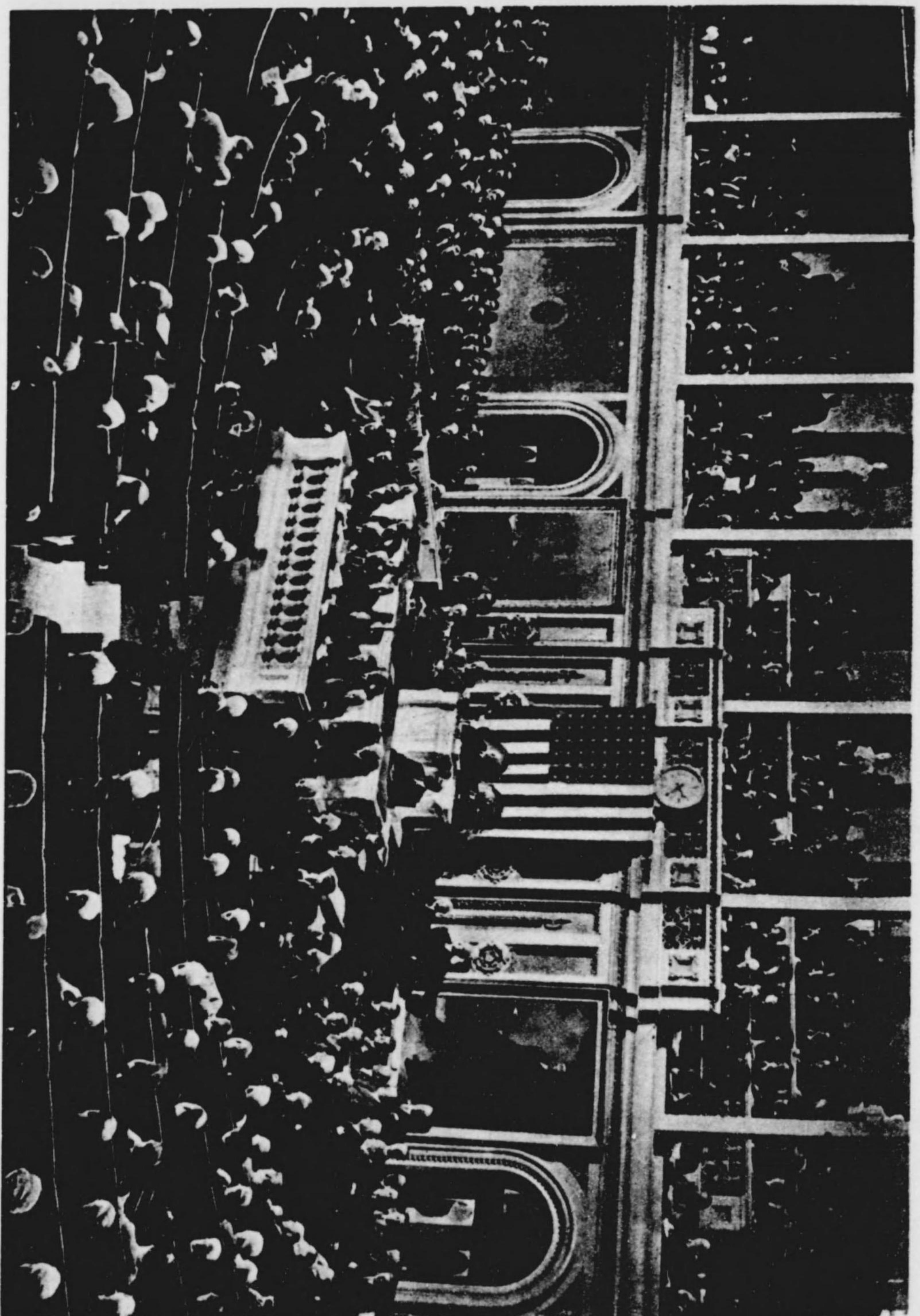
國防計畫と國防經費

一九四二年度に對する國防及びその他事業費を含む國防經費は概ね百七十五億弗の經費を要する。本豫算に計上された諸經費のうち國防費は實に六割二分を占めてゐる。

この經費は今後數箇年に亘る國防計畫の一部と看做すべきものであつて、一九四〇年六月から今日までに法律となつた充當額及び支出權能や一九四一年度の追加豫算額並に一九四二年度の豫算額を基礎として計算するならば、米國國防計畫は二百八十億弗といふ尨大な金額となるわけである。

この國防計畫を概括すれば次の通りである。

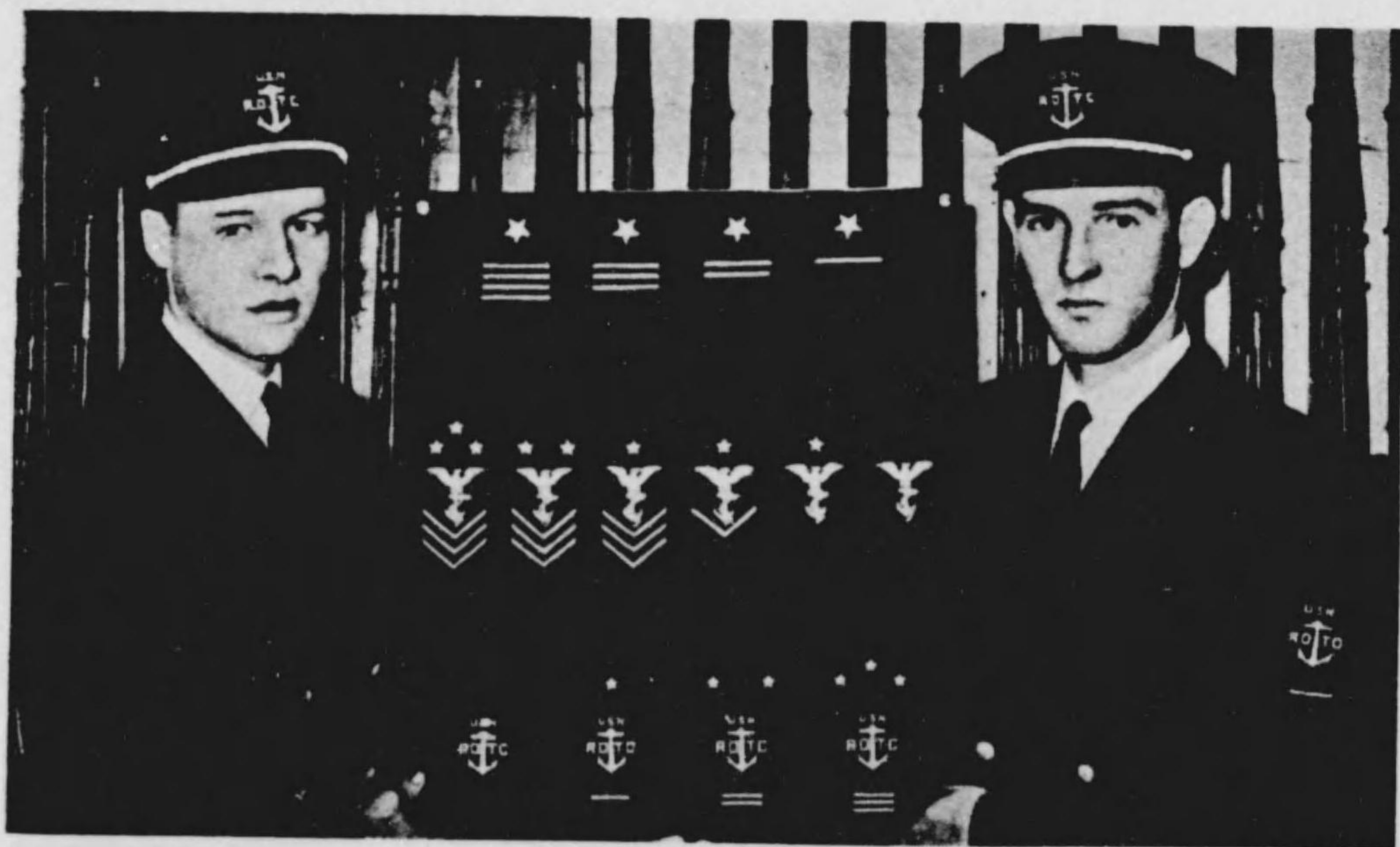
國防豫算要求額(一九四〇年六月以降一九四一年度及び一九四二年度迄)
海 軍 一一、五八七、〇〇〇、〇〇〇弗



吼子彌助授英對るけ於に院下の領統大トルエザズール



米國ワシントン大學に於ける海軍豫備學生の訓練



同上各豫備學生の等級コマ

| | |
|--------|-----------------|
| 陸軍 | 一三、七〇四、〇〇〇、〇〇〇弗 |
| 工場擴張費 | 一、九〇二、〇〇〇、〇〇〇弗 |
| その他國防費 | 一、二八七、〇〇〇、〇〇〇弗 |
| 計 | 二八、四八〇、〇〇〇、〇〇〇弗 |

海軍豫算は世界第一の艦隊建造及び人員の倍加を圖るものであり、陸軍豫算は一九四〇年六月の兵數二十五萬を一九四二年までに百四十萬に増加し、最新式の機械化部隊を有する軍隊として維持する經費である。その他陸軍飛行機の大増加、パイロット、技術員及び地上部員の養成費に對する手當も新に出來てゐる。又百二十五箇所の新工場建設の外、他に計畫中のものである。過去六箇月間に於ける國防經費は十七億五千萬弗に上つたが、これは一九四〇年會計年度の同期間中同一目的に支出した額の二倍半に相當する。

而して今後三箇年間に於ける政府の支出は約二百五十億弗以上に達し、概ね次の如き見込である。

| | |
|----------------|--------|
| 一九四一年六月までの六箇月間 | 四七億五萬弗 |
| 一九四二年度 | 約一一〇億弗 |

二、施設

(イ) 艦隊の再編成

米國は一九四一年一月八日、全艦隊の編成替並に首腦部の大異動を發表したが、その要旨は、全艦隊を大西洋、太平洋、亞細亞の三艦隊に編成替へすると共にそれぞれ獨立司令長官を置き、太平洋艦隊司令長官をして聯合艦隊司令

長官を兼務せしむることとした。

従来合衆國艦隊の配置は太平洋方面には戦闘部隊（戦艦並に乙級巡洋艦を基幹とす）及び索敵部隊（甲級巡洋艦を主體とす）の二隊あり、大西洋方面には昨年十一月一日改稱の哨戒艦隊（大西洋艦隊に甲級巡洋艦一隊及び航空母艦一隻その他を増勢したるもの）があり、更にマニラを根據地とする亞細亞艦隊であつたが、新編成に依る合衆國艦隊のうち太平洋艦隊は戦闘部隊及び索敵部隊（警戒、快速兩部隊）より成り大西洋艦隊は従來の哨戒部隊である。

(ロ) 海軍基地の強化

ワシントン新聞電報に依れば、ルーズヴェルト大統領は去る一月八日、百八億弗餘の軍事費を含む總額百五十四億八千五百萬弗の新會計年度（一九四〇年七月一日より同四一年六月三十日迄）豫算を發表したが、同十二日更に總額八億三千萬弗の臨時海軍費を議會に提出した、右は大西、太平洋に於ける海空軍基地の防備強化を主目的とするもので、太平洋ではアラスカ、ハワイ、グワム等西太平洋諸島の重要基地の強化を指してゐる點が注目される。

| 基地名 | 金額(單位千弗) |
|--------------|----------|
| グワム島 | 四、七〇〇 |
| グワンタナモ(キューバ) | 五、七四八 |
| ジョンストン島(太平洋) | 三、四八〇 |
| カナオエ灣(ハワイ) | 三、四四六 |
| バルミラ島(太平洋) | 三、四八九 |

(グワム島防空壕建設費は艦隊作戦諸施設費を含むもので、曩に却下された建設費と略ぼ同額であり、同島の防備完成には總額三億弗を要すと推算する)

| 真珠灣(ハワイ) | 金額(單位千弗) |
|-------------------|----------|
| カ(アラスカ) | 四、三〇五 |
| ウナラスカ(アラスカ) | 五、〇三〇 |
| コジャツク(アラスカ) | 五、二六六 |
| タンク・ポイント(オレゴン州) | 二、四六〇 |
| シャロット・アマリ島(聖トマス島) | 一、二八一 |
| 西印度群島(フロリダ州) | 九七二 |
| サンホアン港(フロリダ州) | 二、七七〇 |
| キーウエスト(フロリダ州) | 七、九五一 |
| ジャクソンヴィル(フロリダ州) | 七一一 |
| マイヤミ(フロリダ州) | 八、九〇六 |
| ノーフォーク(ヴァージニア州) | 二、八〇一 |
| ペンサコラ(北カロライナ州) | 三二八 |
| クワンチコ(メリーランド州) | 四二五 |
| パナナ・リヴァ(フロリダ州) | 五、一〇〇 |
| トリニダッド(英領租借地) | 一、一〇〇 |
| パーミューダ(同上) | |

(ハ) 人員

米國は大建艦に伴ふ諸施設の擴張と共に、その充員に就いても鋭意努力を拂ひ、就役艦充員のため豫備役の現役復

活を始めとし、アナポリス海軍兵學校生徒も毎年の採用人員を六百名より一千乃至一千數百名に増加し、兵員もまた従來は十萬人内外であつたのを現在の十九萬二千人に、更に一躍して兩艦隊完成の暁には約二十四萬人に増員しよるとしてゐる、又各艦の乗員數を四萬増強して戰時編成下の定員に補強を加へつつある。

その他航空軍備の整備に伴ひ、海陸軍の人員も合計七千乃至一萬數千名の養成を企圖してゐるといはれてゐる。

第四節 英國

一、海軍豫算

一九三九年度海軍豫算は、總額一億四千九百三十九萬九千磅であつて、之を前年度の一億二千六百一十一萬七千五百磅に比すれば、二千三百二十八萬一千五百磅の増加を示してゐる。

尙ほ一九三九年度の費目のうちで前年度に比し著しく増加せるは建艦費であつて建艦費の總額は約六千五十萬磅に達してゐる。

一九三九年度新建艦計畫は概ね次の如くである。

| | |
|------|----|
| 主力艦 | 二隻 |
| 航空母艦 | 一隻 |
| 巡洋艦 | 四隻 |
| 驅逐艦 | 二隻 |
| 潜水艦 | 四隻 |

高速護送艦 二〇隻

護送艦 二隻

掃海艇 一〇隻

高速敷設艇 一隻

その他魚雷母艦、河用砲艦、病院船、魚雷艇等若干

新建艦費の次に増加せるは、艦隊航空隊費、土木費及び人件費等にして、艦隊航空費として一九三九年度海軍豫算より支出せらるべき豫定經費は一千一百七十五萬磅といはれてゐる。

一九三九年度の空軍豫算は六千六百五十六萬一千磅であるが、此の金額は國防公債よりの補助金を一億四千二百萬磅と見積り、計二億八百五十六萬一千磅となるも、一九三七年及び一九三八年兩年度の國防公債額利子二百六十一萬磅を控除する時は總額二億五百九十五萬一千磅に達するのである。之を一九三八年度に比すれば七千四百萬磅の増加を示してゐる。

一九三九年度豫算中に於ける主要經費は、機材整備費、生産力擴張費及び航空隊新設費等であつて、そのうち機材整備費が約九千三百萬磅の巨額を算するは特に注目し値する。

二、施設

(イ) 人員

英國の航空總員數は一九三九年度中には約十二萬人を目指して増加せられ、搭乗員増加のためには特別採用法を以て壯丁を採用すると共に、新たに數箇所に技術練習學校を設けて人員の大量訓練を實施してゐる。

尙ほ正規空軍の外、補助軍及び豫備軍も擴充され、その他民間防空團の外、一九三八年には英帝國航空聯盟が十四歳から十八歳までの少年を以て防空少年團なるものが組織されるに至つたのである。

(ロ) 艦隊配備

一九三九年九月歐洲戰爭前に於ける英國の艦隊配備は左の如くである。

(一) 本國艦隊

| | |
|-------------|---|
| 司令長官 | 一 |
| 第二戰艦戰隊 | 四 |
| 第二巡洋艦戰隊 | 七 |
| 航空戰隊(航空母艦) | 五 |
| 水雷戰隊(巡洋艦) | 二 |
| 第二潜水隊(潜水母艦) | 二 |
| 標的隊(驅逐艦) | 三 |
| 驅逐艦 | 一 |
| 水母 | 一 |
| 潛水艇 | 一 |
| 魚雷艇 | 一 |
| 敷設艦 | 一 |
| 網艦 | 一 |
| 船 | 一 |

(二) 附屬艇

| | |
|------------|---|
| 地中海艦隊 | 一 |
| 司令長官 | 一 |
| 司令官 | 五 |
| 第一戰艦戰隊 | 三 |
| 巡洋艦戰隊 | 二 |
| 第一巡洋艦戰隊 | 四 |
| 第三巡洋艦戰隊 | 二 |
| 航空母艦 | 一 |
| 附屬驅逐艦 | 一 |
| 水雷戰隊(驅逐母艦) | 四 |
| 驅逐艦 | 一 |
| 第一潜水隊(潛水艇) | 七 |
| 第一高速魚雷隊 | 一 |
| 病院船 | 一 |
| (イ) マルタ部隊 | 一 |
| 母艦 | 一 |

第三章 列國海軍豫算並に施設

第五巡洋艦戰隊 四隻
 第八驅逐隊(嚮導驅逐艦) 八隻
 航空母艦 一隻
 第四潛水隊(嚮導驅逐艦) 五隻
 河用砲艦 一七隻
 護送艦 五隻
 敷設艦 一隻
 測量艦 一隻
 (イ) 香港部隊
 驅逐艦 一隻
 防備艇 一隻
 曳船 一隻
 (ロ) 新嘉坡部隊
 驅逐艦 二隻
 驅逐艦 一隻

第三章 列國海軍豫算並に施設

第一篇軍備
 敷設艦 一隻
 敷設網艦 一隻
 護送艦 一隻
 トロイラ 一隻
 曳船 一隻
 豫備艦 二隻
 驅逐艦 二隻
 掃海艇 六隻
 其他艇 若干
 (ロ) アレキサンドリヤ部隊
 掃海艇 四隻
 (ハ) ジブラルター部隊
 母艦 一隻
 驅逐艦 一隻
 曳船 二隻
 (三) 支那艦隊
 司令官 一
 司令官 一

第一篇軍備

母艦 二隻
練習船 一隻

六〇

今次歐洲戦争の勃發に伴ひ、英海軍は前大戰の經驗に鑑み、支那艦隊の一部を香港及び新嘉坡に残してその大部分は極東方面より歐洲方面へ引揚げ、印度洋及び太平洋の通商路を確保するため、その一部を漳州艦隊と協力せしめてゐる。又對潜水艦作戰のため世界各海洋に於て商船隊護送制を採用し、二十隻以上の商船隊を以て組織して居るといはれてゐる。

第五節 佛 國

一、海軍豫算

佛國の國防豫算は今次歐洲戦争の勃發に依つて急速に激増したるは勿論、一九四〇年六月同國の屈服により獨伊兩國との間には戦争は一應終了したといへ、今後新國家の軍備再建には巨額の經費を要するに至るであらう。最近に於ける佛國國防豫算中海軍費を概記すれば次の如くである。

一九三九年度國防豫算

海軍費 八、〇七一、八七八、八七七法
空軍費 一、五三一、五八六、四一九法

右經費中新規事業費は主として新艦建造費及び海軍航空、特殊器材費等であつて、この海軍費は國防豫算總歲出の七・五五%で、空軍費は一〇・九四%である。

一九四〇年度戰時豫算（一月乃至三月）

佛國議會は一九三九年十二月、一九四〇年度豫算の審議を行ひ、一月乃至三月分の軍事豫算及び一九四〇年度一般豫算を可決したが、右軍事豫算は軍事公債を財源とし、三箇月毎に提出されることになつてゐる。この軍事豫算は約五百五十億法であつて、海軍費は總豫算の一〇%、空軍費は二三%を示してゐる。

海軍費 五、六八一、八九三、九七四法
空軍費 一二、五九二、〇五六、九二〇法

二、施設

(イ) 開戦前の佛國艦隊配備

今次歐洲戦争勃發前に於ける佛國艦隊の配備は概ね次の如くであつたが、一九四〇年六月獨伊に屈服後の佛艦隊は喪失又は分散してその所在詳かならざるを以て、現下の配備は戦前と全然面目を一變してゐるわけである。

(一) 本國部隊

(イ) 大西洋艦隊(基地ブレスト)

| | |
|---------------|-----|
| 第一戰艦戰隊、戰艦 | 二隻 |
| 第二戰艦戰隊、戰艦 | 三隻 |
| 航・空母艦 | 一隻 |
| 第二輕快戰隊(乙級巡洋艦) | 八四隻 |
| 第二輕快戰隊(乙級巡洋艦) | 八隻 |

第三章 列國海軍豫算並に施設

第一篇 軍 備

第二水雷戰隊(嚮導驅逐艦)

一九隻

第二潜水戰隊(母水艦)

一七隻

附屬部隊、驅逐艦

四隻

(ロ) 地中海艦隊(基地ツローン)

第一輕快部隊(甲級巡洋艦)

三三隻

第三輕快部隊、嚮導驅逐艦

一四隻

第一水雷戰隊、驅逐艦

七隻

第一潜水戰隊(嚮導驅逐艦)

一一隻

水上機母艦

一隻

(ハ) 教育部隊(基地ツローン)

第三戰艦戰隊、戰艦

二隻

第二巡洋艦戰隊、甲級巡洋艦

三隻

第二驅逐隊、嚮導驅逐艦

三隻

砲術練習艦、乙級巡洋艦

二隻

(ニ) 海外部隊

(1) 極東艦隊(佛印、支那沿岸、長江)

スループ

三隻

河用砲艦

四隻

給油船

一隻

(2) 印度支那海軍部(基地西貢)

スループ

三隻

河用砲艦

五隻

測量艦

三隻

(3) ニューカレドニア島ヌーメヤ警備

スループ

一隻

(4) 太平洋諸島警備(ソサイチー島)

帆船

一隻

(5) 印度洋警備(マドラス)

スループ

一隻

(6) 近東艦隊(シリヤ沿岸)

砲艦

一隻

(7) モロッコ海軍部(カサブランカ)

砲艦

一隻

第三章 列國海軍豫算並に施設

第一編 軍 備

(8) 英佛海峡北海方面警備

乙級巡洋艦

一隻

スループ

二隻

(9) 大西洋警備(マルティニック島)

スループ

一隻

(10) ニューファウンドランド方面警備

スループ

一隻

(ロ) 敗退後の佛國艦隊の運命

獨伊は佛國との休戦協定に於て、佛艦隊は沿岸警備掃海の目的以外、一切戦争の目的に使用せず、戦争終結後と雖も佛海軍に對し要求を提出する意なき旨宣言して、佛艦艇の處分問題に關しては頗る穩健の態度に出で、佛國は將來その海軍を對英攻撃に使用せざる旨誓約するに至つた。然るに英國は獨伊兩國の誓約には絶対に信を置く能はずとなし、七月初旬突如三隻の主力艦を含む有力艦隊を以てオラン港沖在泊中の佛艦隊を攻撃して、その主力艦ブルターニユ以下三隻を撃沈し、驅逐艦一隻を大破せしめたのである。

而して休戦協定成立當時に於ける佛艦隊は概ね主力艦八隻、航空母艦二隻、巡洋艦十八隻、驅逐艦約七十隻、潛水艦七十七隻、護衛艦三十七隻その他若干の補助艦艇を有してゐたものやうであつたが、今日まで判明せるところに依ると略ぼ次の如くである。

(一) 英港灣に於て拿捕せられたもの
主力艦 二隻

巡洋艦 二隻

驅逐艦 八隻

潛水艦 多數

其他小艦艇 二〇〇隻

(二) カサブランカ港に於て武装解除せられたもの
主力艦 (未完成) 二隻

(三) アレキサンドリヤ港に於て武装解除せられたもの
主力艦 一隻

巡洋艦 四隻

八吋砲裝備艦 三隻

其他小艦艇 數隻

(四) オラン港沖海戦に於て行動不能になつたもの
主力艦 三隻

航空母艦 一隻

驅逐艦 二隻

其他小艦艇 數隻

(五) ダカール港に於て行動不能になつたもの
主力艦 一隻

第三章 列國海軍豫算並に施設

第二篇 海軍艦船

緒言

昭和十一年末を以て海軍々備制限の期間が終つたので、英國は翌昭和十二年（一九三七年）の一月一日に早くも主力艦二隻の建造起工を發表し、更に同年三月より七月に亘り同型艦三隻の建造追加を爲した。米國亦これに倣ひ同年十月主力艦一隻を起工した。尙佛獨伊三國の状況を見るに佛國は獨國が一九三一年に袖珍戰艦ドイツチユランドを進水したるに對し、その翌一九三二年に排水量二六五〇〇噸の戰艦ダンケルクを起工し、獨國が引續き同型艦を起工するに及び佛國も亦第二艦を起工した。佛獨の戰艦建造對抗に誘はれ伊國も亦一九三四年に排水量三五〇〇〇噸の戰艦リットリオ級二隻の建造を始めた。茲に於て獨國は一九三四年遂に排水量二六〇〇〇噸の戰艦建造を決意し翌一九三五年には平和條約の破棄を宣言し右主力艦の建造に務めた。斯くして歐米各國は夫々主力艦を初め各種多數の艦艇の建造に着手し再び海軍々備擴張時代を現出したが、昭和十四年（一九三九年）九月初突如歐州戰爭勃發し、この時上記新型主力艦に在りては唯佛國のダンケルク級二隻と獨國のシャルンホルスト級二隻とが竣工し居たるのみにて英米その他の海軍にては未だ一隻も竣工せず、然かも各國は艦艇の計畫建造に關しては極端に秘密主義を採りつゝありて正確詳細なる點は全く不明である。故に本篇には新聞雜誌圖書等によりて窺知し得る範圍に就て記述する。又今次の

軍備無條約の第一艦發表

米國其他の造艦

獨國平和條約破棄

歐洲戰勃發

戦争開始後の製艦状況は交戦各國とも拍車をかけたことと思はるゝも實状は殆んど不明である。戦争に因る艦艇の損害状況も交戦國双方の發表一致せず、これ亦正確なる所不明であるが、造艦計畫上参考となると思はるゝ點は發表されたる範圍に於て記述する。

- (一)、本篇の表及圖は主として一九三九年版ゼーシス・ファイチング・ドシツプス(略字F・S)より取る。
- (二)、ヴェルフトリードライハーフェンより取りたるものはV・R・H又は捺印にて區別す。
- (三)、サイエンチフィックアメリカンより取りたるものはS・Aにて區別す。

第一章 主力艦

昭和十五年(一九四〇年)末に於て竣工又は建造中に在る新型主力艦は英國は三五、〇〇〇噸級五隻、四〇、〇〇〇噸級四隻合計九隻建造中である。米國は三五、〇〇〇噸級六隻、四五、〇〇〇噸級二隻合計八隻建造中である。佛國は二六、五〇〇噸級二隻竣工し、三五、〇〇〇噸級四隻建造中である。伊國は三五、〇〇〇噸級四隻建造中であつて、獨逸は二六、〇〇〇噸級二隻竣工し、三五、〇〇〇噸級二隻と四〇、〇〇〇噸級二隻は尙建造中である。ソ聯は三五、〇〇〇噸級三隻建造中と傳へられる。

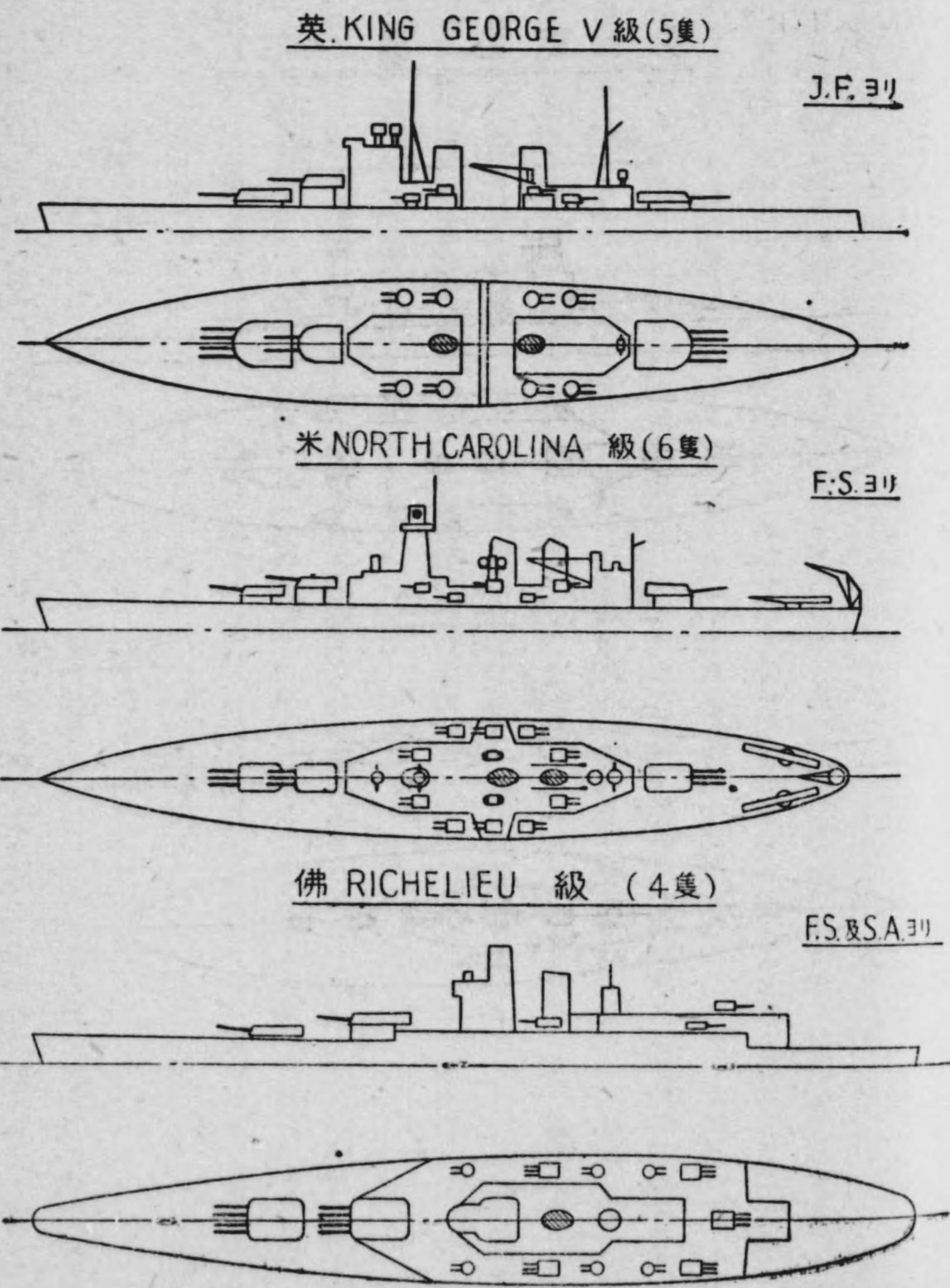
上記各海軍國の新型戦艦を表示すれば第一表の如し。

第一表 新型戦艦

| 國名 | 艦名 | 基準排水量 | 速力 | 馬力 | 兵装 | 起工 | 完成(豫定) |
|----|---------|-------|----|----|--------|-----|--------|
| 英 | キングゲョーシ | | | | 一四吋一〇門 | 三七一 | |

| 國名 | 艦名 | 基準排水量 | 速力 | 馬力 | 兵装 | 起工 | 完成(豫定) |
|----|--|--------|------|---------|--------------------------------------|---------------------------------|---|
| 英 | プリンス・オブ・ウェールズ ビリー ゲエリコ | 三三,〇〇〇 | 三〇 | 一五三,〇〇〇 | 四・七吋高角四門 | 三七一 三七三 三七七 | (四一四) |
| 英 | ライオン テメレヤ 他二隻 | 四〇,〇〇〇 | 三〇以上 | ? | 一六吋 | 三九六 三九七 三九八 | (四三) |
| 米 | ノース・カロライナ ワシントン インディアナ マサチューセツツ アラバマ サウスダコタ | 三三,〇〇〇 | 二六以上 | ? | 五五吋高角八門 五五吋高角八門 飛行機四門 | 三七一 三六六 三六三 三六二 三九七 | (四一四) (四一四) (四一四) (四一四) (四一四) |
| 米 | アイオワ ニュー・ジャージー | 四三,〇〇〇 | ? | ? | 一六吋九門 五吋一二門 | (四〇六) | ? |
| 佛 | ダンケルク ストラスブルグ リシユリユウ ガアン・パール タレマン ガスコーニユ | 三六,五〇〇 | 二九・五 | 一〇〇,〇〇〇 | 五・一吋八門 一・三吋八門 一・三吋八門 | 三三三 三四三 | 三七一・四 三六 |
| 佛 | ガストロン ガストロン ガストロン | 三三,〇〇〇 | 三〇以上 | 一五五,〇〇〇 | 一五吋八門、六吋一五門 三七吋高角八門 | 三七一 三七三 三七七 | (四〇) (四一) (四一) |
| 伊 | リトリオ ビトリオ・ベネト ローマ インペロ | 三三,〇〇〇 | 三〇 | 一三〇,〇〇〇 | 一五吋九門 六吋一二門 三・五吋高角一二門 機銃四〇門 | 三三三 三四三 三四三 三四三 | 四〇 |
| 伊 | シヤルンホルスト グナイゼナウ | 三六,〇〇〇 | 二七 | ? | 一四・一吋高角一四門 一・七吋高角一六門 三七吋機銃一六門 | 三四三 三四三 | 三九一・一 三八・五 |

第一圖
新型戦艦ノ圖(其ノ一)



無條約時
艦の主力
加速力の増
主力艦の
變化

| 蘇 | 獨 | |
|-----------------------|-------|------------------|
| | IH | ビスマルク チルビツツク |
| トルチイ・インテルナチオナ ル他二隻 | | |
| 三、〇〇〇 | 四、〇〇〇 | 三、〇〇〇 |
| 三〇 | ? | 三〇 |
| ? | ? | ? |
| 六一六吋九門 一六吋二門 | | 五一五吋八門 五・九吋二門 |
| ※三・八 | 六・七 | 六・六 |
| ? | ? | ? |

第一表を見るに基準排水量は先きに軍縮會議に於て制限されたる三五、〇〇〇噸は遂に凌駕され四〇、〇〇〇噸に上り、備砲口径亦十六吋となつた。殊に著しき傾向は速力の増加である。英國と伊國とは最初より三〇節以上を期待し、獨佛亦これに順應した。米國は元來防禦に重きを置き、戦艦の速力は寧ろ各國より少しく劣りたるも最近起工されたる四〇、〇〇〇噸級二隻は矢張り三〇節の計畫と想像せられる。

次に各國新型戦艦の圖形を示せば左記第一圖及び第二圖の如し。

右の艦型圖に就て見るに在來の主力艦と著しき變化を生じたことが認められる。

一、楯は著しく小形となる。これは無線その他の通信器の發達によるものなるべし。

二、煙突は一本又は二本にて三本以上といふ多數のものなし。これは汽罐の發達により高温高壓のもの採用せらるゝに由る。

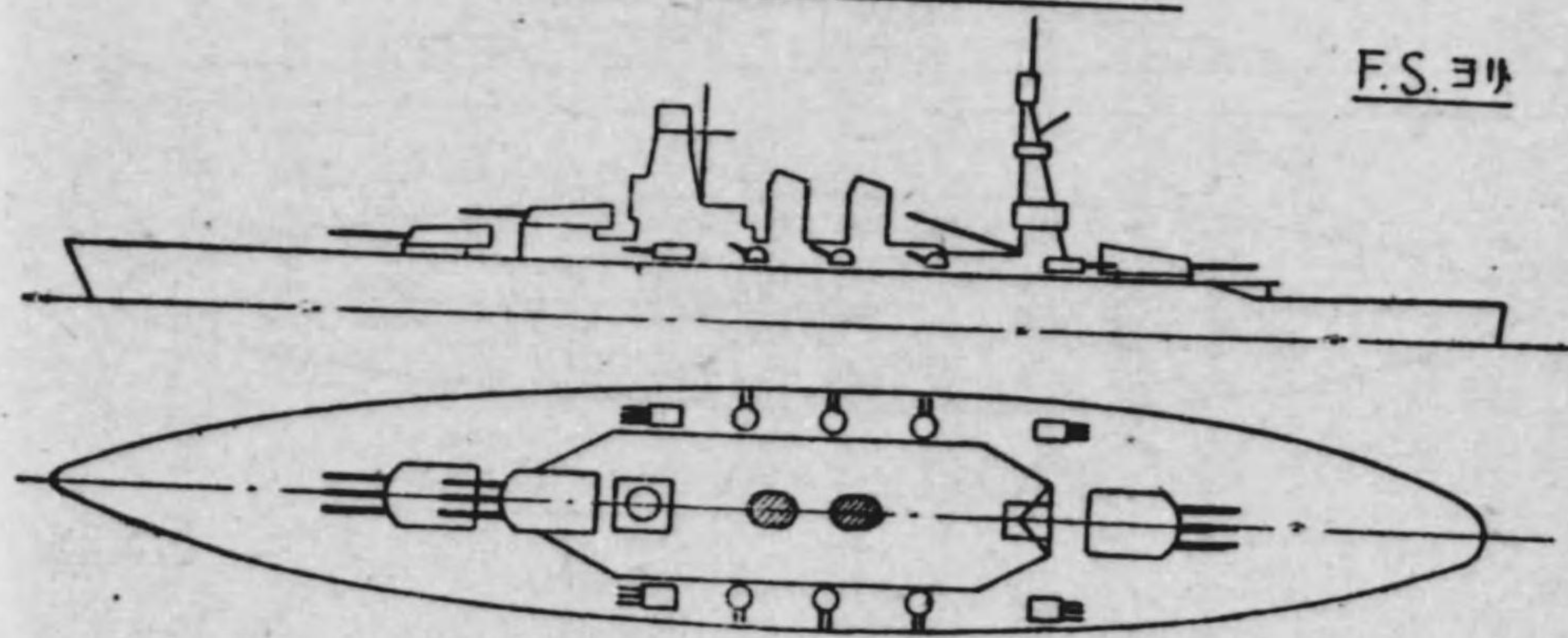
三、主砲は勿論副砲も總べて砲塔砲となる。且つ主砲の裝備は二聯裝より三聯裝となり更に進んで四聯裝となる。主砲塔の配置はネルソン式の全砲塔を前部に集中したるものは唯佛國のリチエリユー級四隻のみであつて、その他の國は何れも艦の首尾兩方に配置する方式である。これ等の點は防禦の方面から見ても、戦術上から見ても、且つ又造艦技術上から見ても適良のことと認められる。

第二圖

新型戦艦ノ圖(其二)

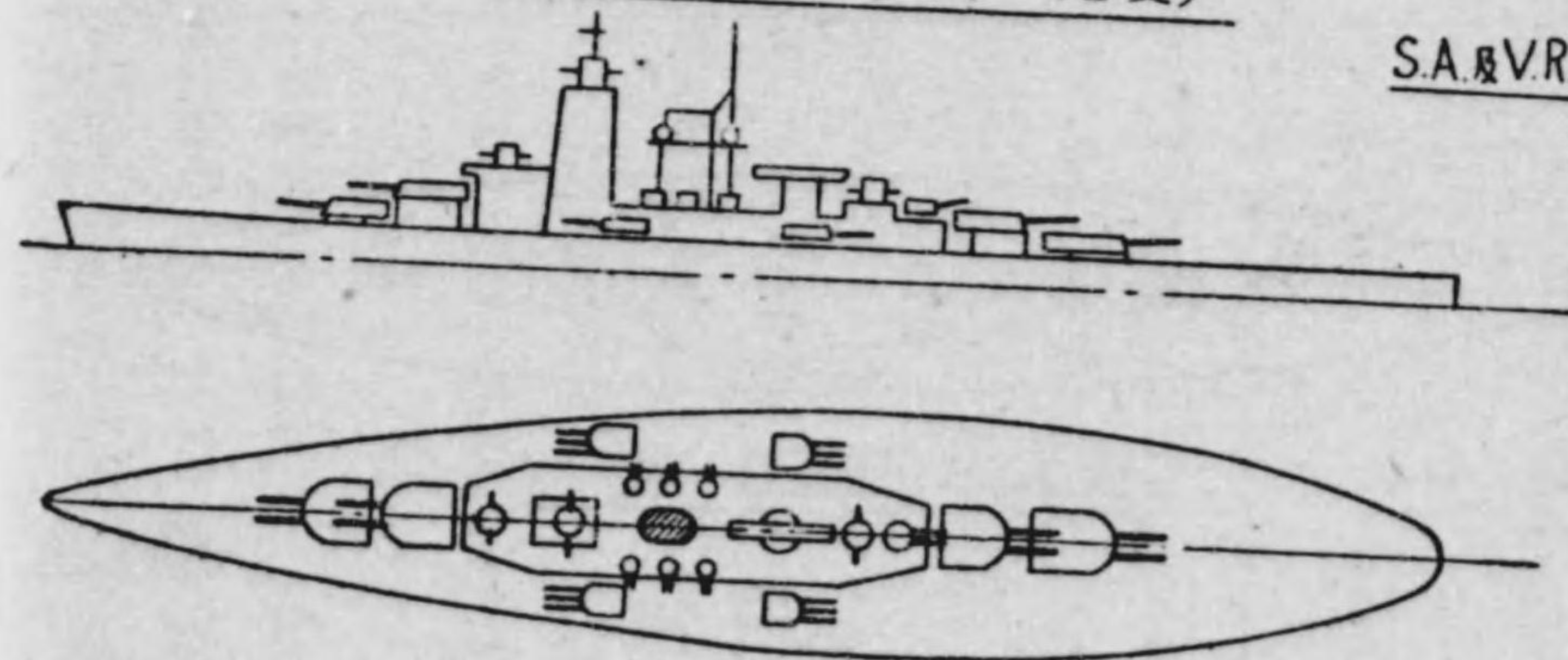
伊 LITTORIO 級 (4隻)

F.S.ヨリ



獨 BISMARCK 級 (2隻)

S.A. & V.R.H.ヨリ



以下各國の主力艦に就て少しく詳細に記述する。

(一) 英國の主力艦

建造中の主力艦は三五、〇〇〇噸のキングジョージ五世級五隻、四〇、〇〇〇噸のライオン級四隻合計九隻であつて昭和十五年中に五隻、同十六年に三隻竣工の豫定であつたから今次の戦争で愈その竣工を急ぎ居ることと思はる。キングジョージ五世級はその主要寸法は公表せられざるも基準排水量は軍縮條約最大限の三萬五千噸であつて、主砲としては十四吋砲十門を採用し、これを四聯裝砲塔二基、二聯裝砲塔一基に納めた。英海軍として四聯裝砲塔を採用したのはこの級を以て嚆矢とする。砲塔の配置は艙前方に四聯裝砲塔一基を置きその上に背負式に二聯裝砲塔一基を配し、艙方に四聯裝砲塔一基を置き、ネルソン級の如く主砲全部を艙部に集中したる配置を採らず。副砲には五・二五吋砲十六門を二聯裝砲塔八基に裝備し、四・七吋砲四門と共に何れも防空兼用の高角式である。五・二五吋砲塔の配置は前後煙突の兩舷側に各二基宛排列せらる。この外四聯裝機關銃が二聯裝主砲塔上に一基、副砲塔上に一基、前部煙突の側に二基、前後橋側に各二基配置されてゐる。

公表によれば防空防禦力を高める様設計され、甲板並に舷側装甲の配列に改良を加へ、且つ克明に細別され砲火雷撃燭雷に對しても防禦上に特別の考慮が拂はれ、ネルソン級より一層強固なる防禦を有すと傳へらる。尙非公式なるも装甲の全重量は排水量の三分の一を超へ約一萬四千噸といはれ、水線甲帯の厚さは十六吋と傳へらる。因にネルソン級の防禦を記せば水線甲帯は艙より一〇〇呎の所より艙の七〇呎手前まで約五八〇呎の間は甲鐵の厚さ十四吋にして砲塔甲鐵は十五吋、砲楯の最も厚き所は十六吋、甲板甲鐵は六吋四分の一である。

推進機關にはパーソンズ、ギヤード、タービン機四基を備へて四軸推進とし、汽罐は英海軍三筒型重油専燒罐を採用し、軸馬力總計十三萬馬力にて速力三十節の計畫である。一説には馬力は十五萬二千であつて速力は三十節以上と

英國の主力艦

キングジョージ五世級

四聯裝砲塔採用

防禦の大要

ネルソン級の防禦

新戦艦の機關

發射管を
廢す

この級は最初から魚雷發射管を有せず、戰艦として發射管無きはこの級が初めてである。尤も舊式戰艦並に重巡洋艦も改装の際には總て發射管を撤去したりといふ。

飛行機數機を搭載格納し得る設備の外、射出機を中央部に設け舷側に直角を爲す固定陥没式の新型である。この級は最初から搭載機の格納庫と射出機とを幟装せる戰艦である。

新種砲

主力艦に於て或る新しい口径の砲に依る對水上艦艇、對飛行機兼用の砲備を採用したるもこの級が最初である。尙この級は米佛伊獨の主力艦主砲口径十五吋又は十六吋に對し十四吋たることが特異の點である。これは軍縮條約制限による三萬五千噸の排水量に對し、防禦、速力、航海性、行動半径等を考慮すれば、十四吋より以上の大口徑砲にては充分なる砲數を備ふること出来ないといふ結論に達したからである。この級の主砲は従來の鋼線砲の代りに、層成砲を採用し、縱方向の抗力を所要程度に達せしむるためにオート・フレージ法 (Auto-Stratage) に依り、又穿徹力大なることが特徴であつて、新十四吋砲は有效射距離に於ても在來の十五吋砲に優るものである。この新十四吋砲に關する英海軍の公表は次の通り。

『新十四吋砲は三五、〇〇〇噸主力艦に十門搭載すべく特に計畫製造せるものにして、既に一九三〇年これが試發射を行ひたり。本砲に關し特に注意すべき點は砲架の計畫製造上多聯裝の創作に在り。キングジョーヂ級主力艦五隻は四聯裝二基、二聯裝一基を搭載す。

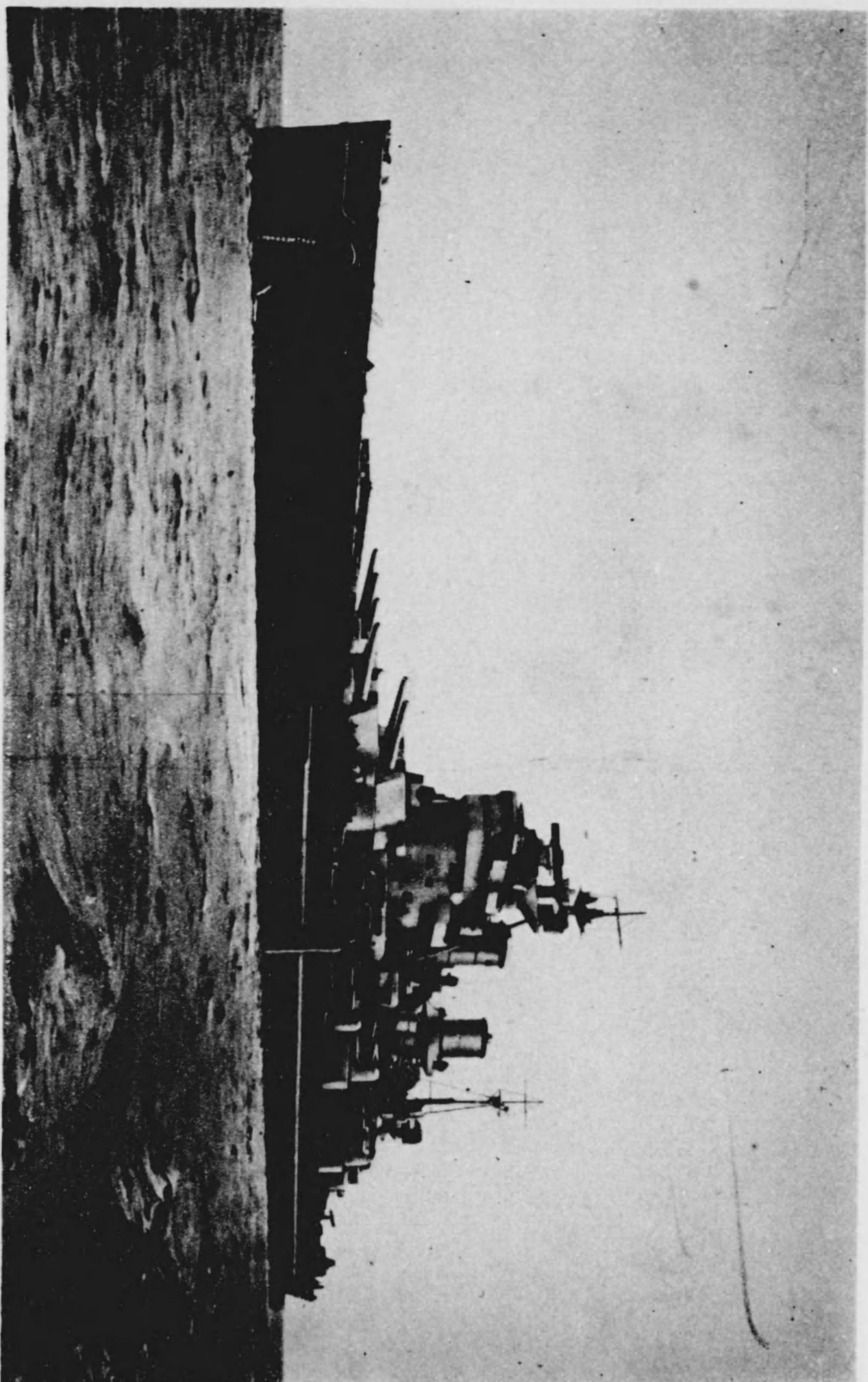
四聯裝砲架の重量節約に關し數字を示せば左の如し。

彈量——一、五六〇封度 (一六吋砲二、〇〇〇封度)

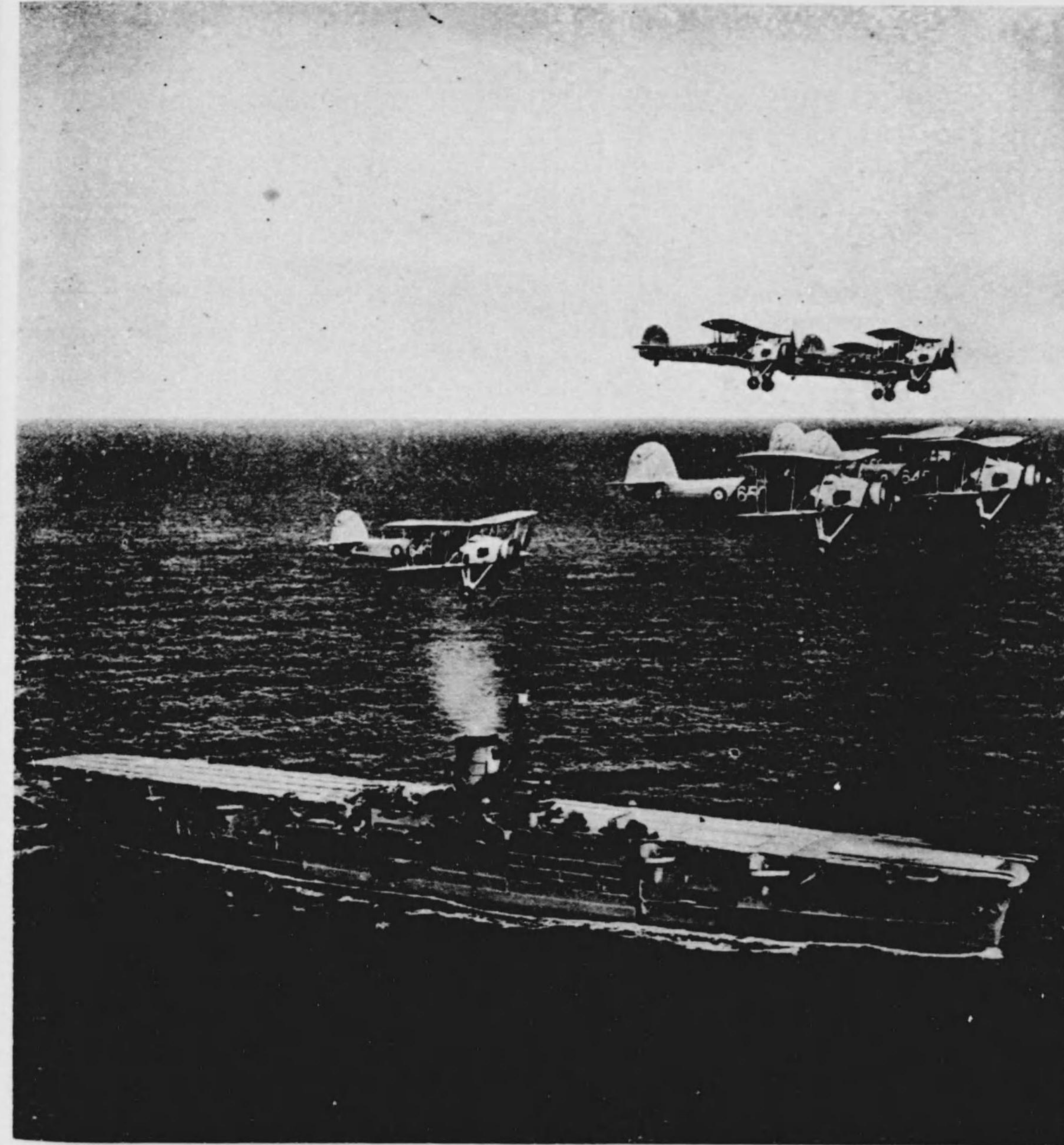
従つて十六吋砲に對し一〇〇〇發に付き約二〇噸の節約となる。

四聯裝砲
架の重量
節約

英 國 新 主 力 艦 キ ング ジョ ー ジ 級 五 隻



(英 國 新 主 力 艦 キ ング ジョ ー ジ 級 五 隻 の 側 面 照 射)



(伊國軍港ラタトンの撃攻の途上)

航空母艦アーロキヤル

新砲の威力

砲身重量——八〇噸(十六吋砲一〇五噸)

従つて十六吋砲に對し一艦分計一四五噸の節約

砲架——一艦分六八〇噸節約

次に砲威力に關し十六吋砲と對比すれば

發射速度——ネルソン級十六吋砲 六〇發

新十四吋砲 七五番

發射強量——ネルソン級十六吋砲 四三二

新十四吋砲 四六八

にしてネルソン級の十六吋砲に對し少しく優秀なり」と、

キング・ジョージ五世級の乗組員數は一、五〇〇名といはれ、新航空母艦を除きかゝる多數の乗員は未だ嘗て何れの英主力艦にも無いのである。又この級の建造費は一艦四千三百萬弗と傳へらる。

ライオン級
ライオン級の噸數に關する論議

ライオン級四隻は基準排水量約四〇、〇〇〇噸であつて、主砲に十六吋砲を採用すること以外何も公表せられず不明である。尙ほその建造費は前記五隻よりも更に増加して一隻分六千萬弗と傳へらる。その排水量に就ては昭和十三年十二月伊國が倫敦軍縮會議に加入と同時に英國政府は伊國に對し「歐州の第三國が四萬噸を越ゆる主力艦を建造しない限り英國としては今の處四萬噸以上の主力艦を建造する意志なし」と通告したる通りライオン級は四萬噸のものと信ぜられる。然るにライオン級建造契約發表の當時(一九三九年二月)その姉妹艦の噸數に關し議論ある由の新聞報道(デイリー・エクスプレス)は興味あるものなれば参考として附記する。

(甲)新ライオン級を四萬噸より三萬五千噸に小さくするを可とす。その理由

- (一) 日本にて三萬五千噸以上の主力艦建造せられつゝあること確實ならず。
 - (二) 米國も右理由により三萬五千噸級を造るものと認む。
 - (三) この情勢に反し四萬五千噸級を造れば軍擴の開始者となる。
 - (四) 經費の増加を防止す。
 - (乙) 右縮小案を不可とする意見。
 - (一) 従來は排水量の制限に依り速力と防禦力の要求を考慮し、他國に比し小なる口徑砲を採用せざるを得ざりしも、本制限撤廢に依り砲力速力防禦力ともに適當なるものに計畫し得。
 - (二) 佛國の戰艦ストラスブルグを除き十五吋砲以下の戰艦建造の國無し。
 - (三) 米、日、蘇ともに十六吋砲艦建造中。
 - (四) ライオン級に要する十六吋砲と砲架の製造は龍骨据付前に着手せらるゝ慣例なれば既に製造中にして變更不能なり。
 - (五) 三萬五千噸型に變更するときはその各力の分布は孰れも一の缺點ある左記の内の一を選ばざるべからず。
- キングジョージ型
- 中庸速力、重裝甲、多數の小口徑砲、十四吋砲十門
 - 米國ワシントン型
 - 低速力、重裝甲、中庸數の大口徑砲、十六吋砲九門。
 - 伊國リットリオ型
 - 中庸速力、弱裝甲、中庸數の中口徑砲、十五吋砲九門。

英國の主力艦建造方針

主力艦改装方針

- 佛國リシュリュー型
- 高速力、重裝甲、小數の中口徑砲、十五吋砲八門。
 - (六) 十五吋又は十六吋砲戰艦を建造しつゝある想定敵國に對して優勢維持の確保を要す。經費差百萬磅（キングジョージ級約九百萬磅、ライオン級約一千萬磅）の如きは日米に對等、歐州各國に對し優勢維持上高價ならず。
 - (七) ライオン級姉妹艦二隻を三萬五千噸に變更する時は大戰の初から屢經驗した跛行艦隊（ライオン級二隻四萬噸、姉妹艦二隻三萬五千噸）を再び編制することとなり能力低下す。
- 昭和十四年（一九三九年）三月英國議會に於て海軍政務次官は一九三九年度英國海軍豫算に關する説明演說中に主力艦建造方針を説明したり。その要旨左の如し。
- 英海軍現有の主力艦十五隻の内大戰後竣工せるものは僅か三隻に過ぎず、目下進捗中の主力艦建造は當初老齡艦代換の目的を以て計畫されしが、種々考慮の結果次の如く建艦方針の變更を見たり。
- 大戰前型の主力艦を保有するは國防上缺陷を生じ、且つ不經濟なり。又一方改装に適する主力艦を廢棄するは賢明ならず。即ちクエーン、エリザベス級主力艦は大改装を實施せるが、一九一三年と一九一四年起工のローヤル、ソベレン級主力艦は改装に不適と認められたるを以て、その一艦は一九四二年キングジョージ五世級五隻の就役後その第五艦に依り代換せられ、又他の一艦は一九四三年ライオン級の第二艦に依り代換せらるべく、従つて一九四三年末迄に英海軍主力艦隻數は總計二十一となるべし。將來第一線主力艦として保持せんとするものゝ一部既に改装工事完成し、ヴァリアント、レナウンの二隻は一九三九年度中に改装工事完成すべし。
- 主要改装工事は防禦力の増加、兵器の近代化、主機械及び艙の換裝等なり。
- (一) 米國の主力艦

ノリスカ
ロライナカ

昭和十二年(一九三七年)以來昭和十五年までに起工済の主力艦は六隻で基準排水量三五、〇〇〇噸、速力二十八節以上といはれ、主要寸法は全長七五〇呎、幅一〇八呎、吃水三六呎と傳へらる。備砲は十六吋砲九門を主砲として三聯装砲塔三基に備へ、その二基を前部に背負式とし、一基を後部に配置する。副砲は五吋砲十六門乃至二十門であつて總べて高角式とし、二聯装砲塔八基乃至十基が中央部に配置される。尙飛行機四臺を搭載し射出機二基を設備する筈である。その第一艦ノリスカロライナは昭和十五年六月進水し、翌十六年に竣工の豫定であつて、昭和十七年に一隻、昭和十八年に四隻竣工の豫定である。次の四隻は排水量四五、〇〇〇噸で前の六隻に比し砲装を同様とし、速力を増加することである。その主要寸法として傳へられる所は全長八六〇呎、幅一〇八呎、吃水三六呎である。内二隻は昭和十五年六月に起工されたる筈で、その後の計畫艦は排水量を六五、〇〇〇噸にする等の説あるも不明であるが、少くとも大艦建造に邁進する状況は認められる。

主力艦の
建造費
大艦建造
中止の報

三五、〇〇〇噸級の内ニューボート・ニューズ造船所に注文したるものは契約價格三九、五四〇、〇〇〇弗であるが機關費を含まず。同じくベスレヘム造船所に注文されたるものは契約價格は四九、八一五、〇〇〇弗である。二隻とも建造期間は四ヶ年七ヶ月の豫定である。又この二隻に要する大砲その他の兵器製造費は合計二六、〇〇〇、〇〇〇弗と傳へらる。次に四五、〇〇〇噸級の建造費は一億弗を要すといはれ、その建造は各國の注意を引き居るものであるが、昭和十四年十月の新聞は官邊より確聞したりとして、内外情勢の變化により大主力艦を建造することは一先づ中止し、今後は快速巡洋艦及び驅逐艦の建造に全力を注ぐことになつたと報じ、右變更の理由として擧げられるところは左の通りである。

- (一) 米國內造船所が繁忙を極め、完成までに數年を要する大主力艦を建造する餘裕が無いこと。
- (二) 今次歐洲大戰に於ける獨逸空軍及び潜水艦の英國艦船に對する攻撃振りに徴し、米國海軍も急遽計畫を變更し

商船護送、潜水艦攻撃、主力艦護衛に不可欠の快速巡洋艦及び驅逐艦の大量建造を行ふことになつたこと。

然るに海軍擴張論者の中には尙六萬噸以上八萬噸級の超々弩級戦艦の建造を主張するものあり、スターク作戦部長は米海軍が四萬五千噸以上の主力艦建造を現實に計畫中なることを明らかにし、現在までの研究結果からいへば五萬噸又は五萬二千噸の主力艦を建造することゝならうと述べたと傳へらる。

要するに米國の戦艦が漸次大型に進むと同時に速力の増加することは注意に値す。主砲口径の大となるは列強と同様の経路を辿り速力は在來二十乃至二十一節なりしものが最近二十八乃至三十節に達したのである。

(三) 獨逸の主力艦

一九三四年(昭和九年)に佛國はダンケルク級の第二艦ストラスブルグを起工し、伊國も亦三五、〇〇〇噸のリットリオ級を起工したので、獨國も同年十月二六、〇〇〇噸の戦艦シャルンホルストを起工し、引き続きその第二艦を建造し一九三八・九年に完成せしめた。その竣工に先立ち一九三六年に獨國も亦三五、〇〇〇噸の主力艦ビスマルクを起工し、引き続き同型艦四隻を整備することゝなつた。第一艦ビスマルクは昭和十五年の春竣工の報があつたが、起工後四ヶ年であるから事實と認められる。その要目は全長二四一・五米、幅三六米、吃水七・九米、兵装としては主砲十五吋八門を二聯装砲塔四基に備へ、二砲塔を背負式として前後に配置する。副砲は五・九吋砲十二門を三聯装砲塔四基とし中央部に配置される。その外一〇〇種高角砲十二門乃至十六門を搭載し、水中防禦區劃に大改善を加へ、速力三十節と稱せらる。由來獨國の軍艦は武力に於て幾分劣るもこれを高速を以て補ひ、運動力と防禦力と相俟ち相手方の重兵装に對抗する方針であつたが、この四五、〇〇〇噸級は表面列強の主力艦と略同様に實際の性能如何は興味ある問題である。

ビスマルク級の第二艦チルピッツも第一艦と同年に起工されたれば最早竣工したるべし。昭和十五年一月の獨國新

シャルン
ホルスト
級
ビスマル
ク級

開報によればこの級の第三艦進水したが、その排水量は四萬噸以上となつてゐる。

(四) 伊國の主力艦

三五、〇〇噸
トリオ級の
建造期間
の短縮

三五、〇〇〇噸トリオ級の新主力艦四隻中二隻は一九三四年十月に起工され、五ヶ年後の一九三九年十一月に公試運轉を施行された。その結果は總馬力一三〇、〇〇〇に對し速力三〇節以上を得たと傳へられる。この級の残りの二艦は前二艦と異なりその工程比較的急速なる進捗を爲し、第三艦イムペロは一九三九年十一月十五日ゼノアのセストリ・ポネンテに於けるアンサルド造船所にて造船臺上に在ること僅か十八ヶ月の後進水した。第四艦ローマは一九四〇年六月に進水したる筈である。

この級の主要寸法は長さ七五五呎、幅九八・五呎であつて、兵装は主砲として十五吋砲九門を三聯裝砲塔三基に納め、前甲板に背負式二基、後甲板に一基配置される。副列は六吋十五門、三聯裝五砲塔、高角砲は四吋砲十二門、二聯裝六砲塔に配備される。この外機銃二十門と飛行機四臺を搭載する。

伊國新主力艦が如何なる構造及び性能を有するかを窺ふに、一九三九年七月當時の伊國海軍次官の發表せる主力艦有用論中左の意味の記事あり、これにてその大要を知ることが出来る。

「第一次世男大戦が暴露せる戦艦の事實上の本質的弱點は損傷を受け易きことであつた。戦前の造艦計畫に於ては水中武器の全面的使用はこれを等閑視したる傾あり、然かも大戦中若干の戦艦はこれ等の武器の前に屈服した。更に戦後航空機の發達に伴ひ爆彈その他の武器に依る空襲なる未知數が追加された。これがために最近の造艦方針は根本的に戦艦の防禦力の増加に向けられた。即ち新主力艦の防禦力に就き構造上の根本基礎は精巧なる水中防禦システムと水中防禦力の著しき増進である。詳説すれば次の如し。

(一) 水中防禦

水中防禦は所謂船體と艦船の最も重要な機關部を包擁する防禦區劃との間に存する空積を利用し、水中爆發瓦斯並に水中爆發に依り流入する海水を吸收せしむる一方堅牢なる分割隔壁に依り破壊作用の傳播を防ぎ、爆發に依る損傷度を減ずることを目的とするものであつて、局部の浸水又は縦方安定の變化より生ずることあるべき船體傾斜を防ぐための精巧なる平衡裝置をも包含する。

(二) 水平防禦

水平防禦は空中よりの投下爆彈及び大角度落下彈丸の炸裂に抵抗するため必須なるものなるが、これは重量の全面的經濟に依り完成された。即ち船體の多くの部分に於て必須ならざる總ての器材を節約排除し、一般的に電氣熔接を用ひたる最も耐久力ある金屬の使用に依り實現することを得た。更に船體内部の構造をも防禦に協力せしむる如く、最も合理的なる方法を以て、使用し得る重量を利用し、二個以上の甲板に防禦を分割するシステムを應用した。又全吃水線に沿ひ高さ數米に及ぶ垂直装甲は大戦中實證せられたる好結果に鑑みこれを構成した。

斯くして新主力艦の装甲は艦全重量の約三七％に相當する約一三、〇〇〇噸となつた。

次に近代主力艦の主要兵装の特色は砲口徑の増大にあつて、その結果は射撃精度及び射撃距離の増大並に砲數減少の結果を生じた。この他に増設されたる兵器は對水雷及對潜水艦兵器である。又艦の速力は上記兩兵器を間接に援助するものである。

更に排水量の制限に束縛せられざる情勢となりたる今日では防禦力に用ひ得る重量の率は益々増加すべく、従つて近代主力艦の艦型増大は自然の勢であつて阻止し得ざること、認む云々」

この所論は獨り伊國主力艦の説明と見ることを得るのみならず、列強海軍の主力艦變遷の大要と認むるも大過なきを信ず。

伊國主力
艦の性能

トリオ級の
主要寸法等

(五) ソ聯邦の主力艦

ソ聯邦にても三五、〇〇〇噸主力艦三隻計畫中なるも詳細不明である。佛國誌ル・ヤックの報する所に由れば、ソ聯邦は戦艦建造に關し米國に注文する豫定なりしも交渉不調となり、米國の設計に依り一九三八年レーニングラードの造船廠に於て起工し、第三インターナショナルと命名された。その兵装は米國の主力艦と同じく十六吋砲九門を主砲とし、副砲は六吋砲十二門となり、速力三十節といふ。

(六) 佛國の主力艦

昭和十二・三年に竣工したる二六、五〇〇噸のダンケルク級二隻に次いで建造中であつた三五、〇〇〇噸級四隻の中、第一艦リセリユーは昭和十四年一月に、第二艦デヤンパールは同十五年三月進水し兩艦とも十五年中に完成の豫定であつて、第三艦第四艦も既に起工済である。主砲は十五吋八門で、これを四聯裝砲塔二基とし英國のネルソン型に倣ひて前甲板に集中した。副砲は六吋砲十五門、三聯裝砲塔五基とし煙突の兩側に二基、後甲板に三基を置き中央の砲塔は兩舷側のものより一甲板高く配置される。その他高角砲として四吋砲二聯裝六基十二門を有し、飛行機四臺を載せ射出機二基の設備がある。この級の主要性能はダンケルク級の設計を踏襲したるものであるが、煙突は極めて風變りなものと一箇で、煙路は全く新しい形式を採り後方に曲り、これに接着せる大橋は幾分獨逸風に倣つてゐる。リセリユー級は長さ七九四呎、幅一〇八呎。装甲の總重量一五、〇〇〇噸に達しその厚さは九吋乃至十五吋である。推進機關はギヤードタービン機、軸馬力一六〇、〇〇〇で速力は三十三節と傳へられ、乗員は士官六〇、下士官兵一五〇〇名といはれる。

第二章 航空母艦

列強中伊國には航空母艦を有せず、他の日、英、米、佛、獨及びソ聯邦は鋭意これが整備に努力中である。蓋伊國は特種の地理的位置に鑑み航空母艦を建造せず、寧ろ本型艦の高價にして然かも脆弱性を有するといふ意見を堅持し居るものと思はる。

列強の新式航空母艦は第二表の通りである。これに基き各國の航空母艦に就き説明する。尙英國の新艦アーク・ロイヤルと米國のエンタープライズの艦型圖を示せば第四圖の通りである。

第二表 新航空母艦

| 國名 | 艦名 | 基準排水量 | 速力 | 馬力 | 機數 | 兵裝 | 起工 | 完成(豫定) |
|----|--|--------|------|---------|-------------|---------------------|--|--------------|
| 英 | アークロイヤル | 三三,〇〇〇 | 三〇.五 | 101,000 | 六〇 | 四・五吋高角一六門 | 三五・九 | 三六・二 |
| 英 | イラストリアス ビクトリアス フォードミダブル インドミダブル インデラカブル インデラカブル | 三〇,〇〇〇 | 三〇以上 | 110,000 | ? | 四・五吋高角一六門 | 三五・七 三五・五 三五・六 三五・二 三五・二 三九・二 | (四〇) |
| 米 | エンタープライズ ホーネット | 一九,九〇〇 | 三〇 | 110,000 | 八三以上 横アリ | 五吋高角八門 一・二吋機銃一六門 | 三四・七 三四・五 三九・九 | 三六・七 (四二) |
| 米 | ワスプ | 一四,七〇〇 | 三〇 | ? | ? | 五吋高角八門 | 三九・四 | ? |

| 蘇 | | 獨 | 佛 |
|--------|---------------------|---------------------------------|----------------------|
| 他一隻 | スターリン クラスノエ・ツナムヤ | グラフ・ツエベリン B | ジョツフル バンルヴェ |
| 三,〇〇〇 | 九,〇〇〇 | 一九,三〇〇 | 一八,〇〇〇 |
| 三 | 三 | 三 | 三 |
| ? | ? | ? | ? |
| 四 | 三 | 四 | 四 |
| ? | ? | 五・九吋一六門 四・一吋高角一〇門 三七耗機銃二門 | 五・一吋高角八門 |
| (一九四〇) | 一四 | 三六 | 三六・二 三六・二 三六・二 |
| | 元 | | |

英國の新航空母艦

(一) 英國の航空母艦
 新造の航空母艦七隻中第一艦アーク・ロイヤルは昭和十四年に完成し、第二乃至第五艦は昭和十四年に進水し、同十五年中完成した筈であつて、第六第七艦は同十四年に起工された。第二乃至第七の六艦は何れも第一艦アーク・ロイヤルの設計に基くもので唯僅かに排水量一、〇〇〇噸増加したるものである。今これ等諸艦の性能を詳にするため昭和十四年春英國造船協會總會に於ける英海軍造船局長及び機關局長のアーク・ロイヤル號の計畫建造に關する講演要領を左に記述する。

英海軍造船局長サア・スタンレー・グッドオール氏講演

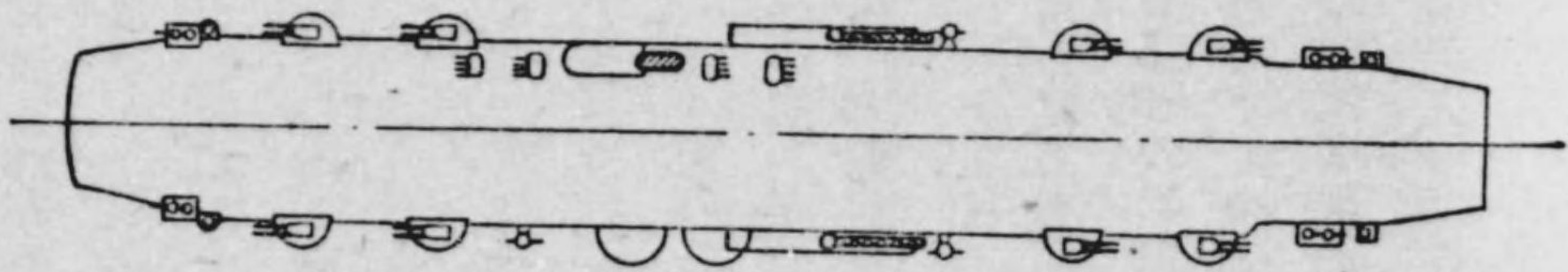
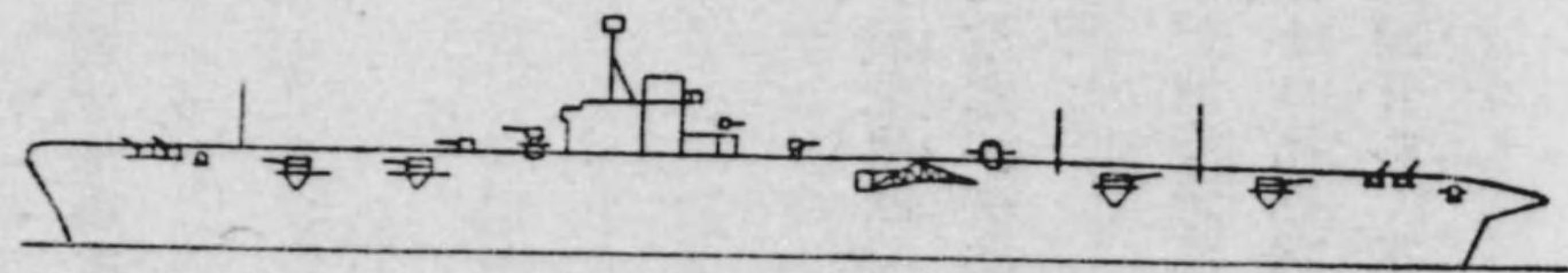
航空母艦アーク・ロイヤルは一九三四年度の計畫であるが、當時航空母艦は華府條約によつて基準排水量二七、〇〇〇噸に制限されてあつたが、この艦に就ては初め二二、〇〇〇噸乃至二四、〇〇〇噸の範圍で數隻の艦が計畫された。その中、小なるものは航空機搭載數に對し高價であり、結局二二、〇〇〇噸のものが最適當と認定された。即ち英海軍は年來軍艦の排水量を小にし建造費を減少することに努力して來たが、この新航空母艦でそれが實現されたの

アーク・ロイヤルの
 船體部計
 畫要領

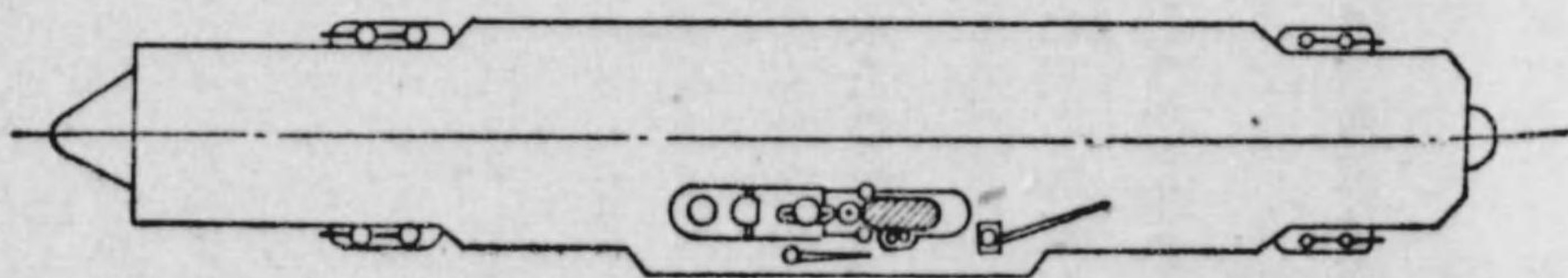
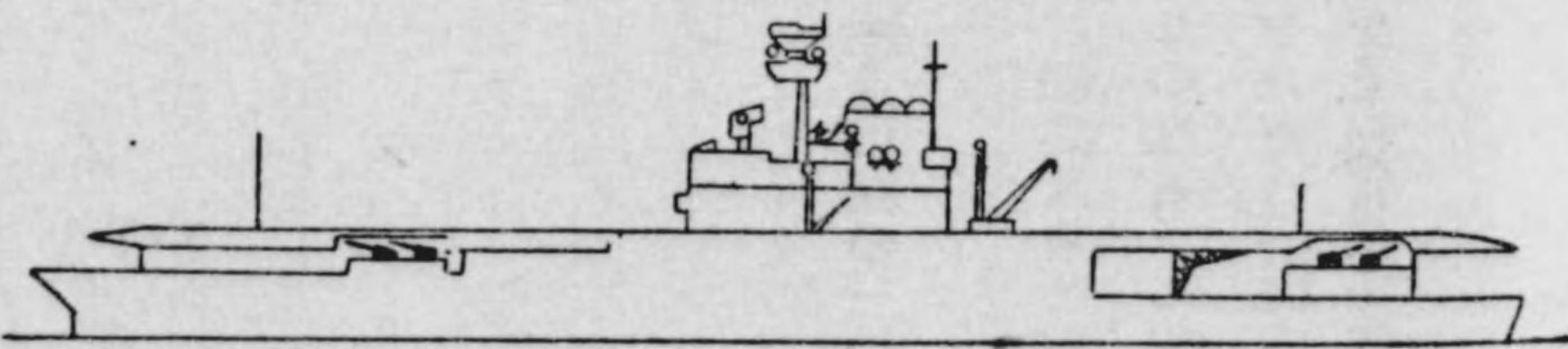
第三圖

新航空母艦

英. ARK ROYAL



米. ENTERPRISE



第三圖 新航空母艦
 第二章 航空母艦

である。その後一九三四年の倫敦條約では航空母艦の制限は二三、〇〇〇噸に変更されたが、本艦は遂に該計畫を變更するに至らなかつた。

アーク・ローヤルの重要寸法等次の通り。

| | |
|----------|---------|
| 基準排水量 | 二二、〇〇〇噸 |
| 垂線間の長さ | 六八五・〇呎 |
| 飛行甲板の長さ | 八〇〇・〇 |
| 水線上の長さ | 七二一・六 |
| 水線上の幅 | 九四・九 |
| 平均吃水 | 二二・一〇 |
| 水線上舷側の高さ | 五九・一一 |

附圖第三圖は本艦の一般配置圖であつて、大砲の位置、防禦、推進機關の三軸配置、水上の形體、島型艦橋及び上下二つの格納所に特に注意が拂はれた。

大砲は四・五吋砲十六門を主とし、仰角も俯角も充分大にして、聯装八基に納め舷側に高くスポンソンを造りて配置され、發射圈を廣くし、波の飛沫を避けるやうに計畫された。その他ボンボン四基(ボンボン砲座は六基設けあり)高角機銃二十門、禮砲用小口徑砲四門がある。

甲板も舷側も充分に防禦され、水線下の防禦は改善されたバルヂを相當長い範圍に造り、内部は更に幾多の區劃に仕切られる。

上部構造

航空母艦の水線上の形は全く他艦種と異なる。その飛行甲板は發艦部、着艦部と整備部を併せて相當の長さを要す

防禦

る、これは船艙に相當長さ張り出しを造らなければ艦自體が長くなる、従つて排水量の制限、安定性及び水線下防禦等を考慮して要する速力に對する馬力を軽減するために、結局艦の水線下の長さを比較的短くし、艙に長さ張り出しを造つた船は舷側外板を飛行甲板まで張り上げてある。これ等は何れも前に造られた航空母艦による實驗の結果である。飛行甲板上の島を成す艦橋の位置と設備とは注意深く考究され艦の操縦を容易ならしむるため數回の模型實驗が行はれた。蓋し航空母艦は形態上風壓を受けることが大であるから、風のあるとき容易に操縦し得ることが最も緊要である。現在までの實驗の結果では本艦の島は最も適當と認める。飛行甲板上の氣流に關しても、實驗によれば初め煙は島の直後に流下して着艦に故障を來たしたから、煙突を八呎高くして此の障害を除いた。その後飛行士達は、本艦が従來の何れの航空母艦よりも優秀であることを見出した。

尙ほ航空母艦の操縦上必要なことは旋回の際、船體の傾斜を少くすることである。然らざれば固縛してない航空機の取扱が困難となる。之を防ぐ爲めには、艦を短かくして充分なるスタビリティを持たせることにすればよいのであるが、かくすれば又艦は早くローリングすることとなる。これも亦航空母艦では禁物である。本艦の場合はその模型と、現在ある航空母艦中最も安定性の良い艦の模型とを造つて、共にローリングの實驗を行ひ、本艦型が優れて居ることを確かめた。

飛行甲板は船體強度に關し最上部の大切な要素である。上下二段の格納庫は何れも廣大なスペースであるから、この外壁と甲板とは充分なる強度を有し、下方の船體と連結されて共に充分負荷に堪ふるやう構造され、且つ各格納庫の甲板は兩舷側に達する深き梁で支へられる。この構造に就ては、建造中にも試運轉中にも注意して種々調査したが、強度上何等の懸念なきことが證明された。船全體としては深さの大なる梁を形成し居るため、縦方向のストレスは左程大では無い。實際航空母艦では縦方向よりも横方向のストレスに注意し、横肋材をコンチニユアスに通し

操縦上の注意

船體の強度

推進機

て丈夫にし、縦通材は之をその間にに入れることにする必要があることは他の艦型と異なる點である。
飛行甲板上の鳥のための片荷は、ビームを加減すると同時に、主として諸補機類の配置によつて補はれた。
主推進機を三軸としたことは種々の利點があり、最少の重量と容積を以て最大の馬力を出し得るものと判定された。若し之を二軸とすれば一軸の出力が多きに過ぐると認められる。中央軸は舵の直前で推進器を回すため艦の操縦に具合宜しい。汽罐も最も進歩したものを採用して煙路の構成を都合よくした。

推進機の出力は總計一〇二、〇〇〇軸馬力であつて、機はパーソンズ・タービン三基である。推進器の回転數一分間二三〇で、減速装置は一段式である。タービンはイムバルス・リアクシオン高壓タービンとダブル・フロー・リアクシオン低壓タービンから成立つて、コンデンサーは垂下式である。後進用タービンは低壓タービンの排氣管の中に造られる。

汽罐

蒸氣はアドミラルチー・ヤーロー小管型汽罐六臺によつて供給され、その汽罐には過熱器と空氣豫熱器が取付けられる。汽罐の直上から煙突の下までの烟路は格納庫甲板の下に水平に形造られるが、その支へは可動式になつてゐる煙突も特別に計畫され、飛行機の作動に故障となるが如きガイは二本も取付けず煙突は丈夫に造られた。

搭載油量

試運転には一〇三、〇〇〇軸馬力を出し、これに對する速力は三一節四分の三に達した。
急速の速力變化を必要とするので機關の操縦性には特に注意が拂はれた。

燃料油の搭載量は現在の何れの航空母艦よりも多量であつて、飛行機用の輕油は船體に關係なき大なる獨立のタンクに收められ、機に供給するには低壓の空氣ポンプで送られる。又機の潤滑油も同様に格納されるが、供給は電動ポンプに由る。

電氣裝置

アーク・ローヤル號は、軍艦に於ける電氣の需用が漸次増加することを實證した。ポンプ類・揚錨機・起重機・掃

飛行甲板設備

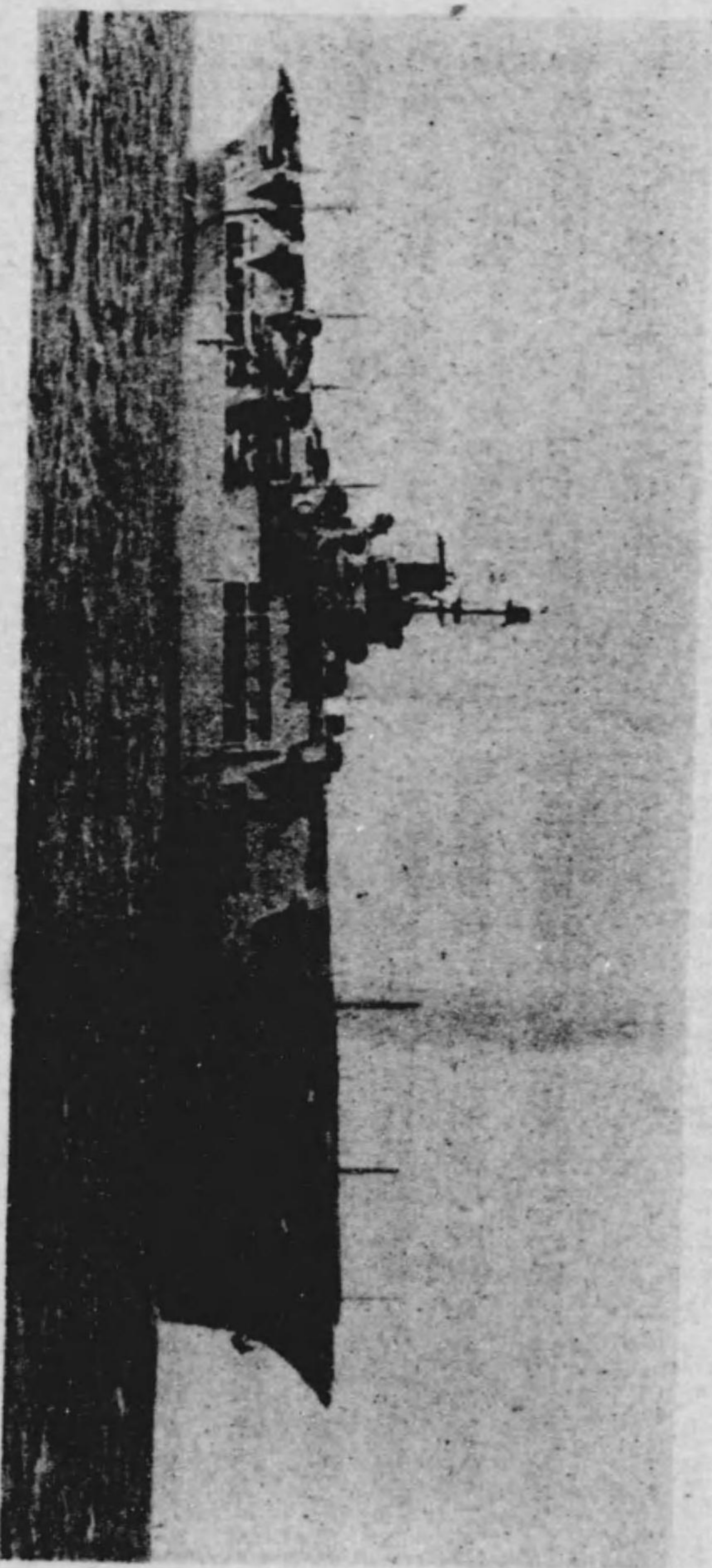
揚機・砲塔・操舵機・諸補機・パン燒罐等は通風器・電燈・通信機及び電熱器等と共に電力を廣範圍に使用する。
六臺のターボ・ドリヴァン發電機があつて、二二〇ボルトの電流を正甲板の兩舷を走るリングメーンに送る。低ボルトの電氣によつて艦内各部通信用電話と諸計器類が作動される。

飛行甲板は第三圖に示す通り船艙は丸味を持つて下つてゐるが、これは甲板上の氣流を良くするためである。二臺のカタパルトが船端に近く兩舷に備へられる。これは艦が停止中にも飛行機の發艦を爲し得るためであつて、動力は水壓空氣壓による。このカタパルトの所から船の中央までの約四〇〇呎は、一般飛行機の滑走發進に用ひられる。この前部には、縦横に水力により作動される遮風壁が設けられ、將に飛び出さんとして準備中の飛行機を被護する。その必要なときは、甲板面と平行に倒される。飛行甲板の周圍には飛行隊員の墜落を防ぐやうに網が張られる。又消火裝置としては絶えず消火泡沫を飛ばす式のものが備へられる。飛行甲板の後部には八條のワイヤが横方向に張られる、この設備は多年航空母艦で實驗された結果である。着艦せんとする飛行機には下方尾部に鈎が取付られ、この鈎がワイヤの何れかに掛りて機の前進を止める。かくて飛行機の着艦には甲板の長さ四〇〇呎以下で充分であることが確められた。或る冬の日の午後の實驗には二十七機連續着艦したが、何等の故障も起らなかつたといふことである。

飛行機格納庫

上部格納庫は長さ五六八呎、下部格納庫は長さ四五二呎何れも幅は正味六〇呎、高さ同じく一六呎である。下部格納庫の平面圖は第三圖に示されて居る。

格納庫と飛行甲板との間に飛行機を揚げ降ろしするには三ヶ所に昇降機が設備されてある。何れも二段のプラットフォームがあり、六臺の水力機によりて作動される。この六機が全く同一に働き、昇降機を常に平らに保つやうに苦心された。昇降機が二段になり居るは、上方のものを飛行甲板に出すとき下方のプラットフォームにある飛行機は下部格納庫のものを上部格納庫に移すことが出来て、飛行機の操作が迅速に爲される利がある。三個の昇降機中、右舷側に



第四圖 英航空母艦「クローナル」

は前後二ヶ所、左舷側には中央に一ヶ所あつて、搭載飛行機の数は六〇機である。

格納庫の
防火通風の

格納庫は火氣に對し最も危険なる所であるから、數箇所に仕切られ防火鐵壁がローラー・ブラインド式に電氣により作動展張されるやうになつて居る。各部に一時間一五〇噸揚水の力ある消火唧筒が備へられてゐる。通風に關しては下部の惡氣を排出し、清淨の空氣は上部より入るやう通風器を設備する、その取付位置は庫外である。庫内には又危険の起りたる際の避難脱出のために、避難所が設けられ、防火カーテン、消火劑噴霧、通風換氣裝置等完備される。側面圖に見るやうに大なる電動起重機二臺が飛行機を飛行甲板上に揚げ、且つ機動艇の上下に使用される。その使用時以外は倒して飛行甲板より下に在るやう格納される。この外小さな端舟類は上部甲板の裏を走る軌道により、電働ウインチで上下される。備付の端舟類は大小合せて十九隻である。乗組員は士官一四七名を加へて總員一、五七五名。

建造所

本艦の建造は船體も機關も共にバーケンヘッドのキャメルレヤード會社に對し一九三五年四月十七日に發注せられ同年九月十六日起工、一九三七年四月十三日進水、一九三八年十一月十六日無事引渡運轉を終り就役した。即ち起工後三年二ヶ月目に竣工した。

電氣熔接
の應用

船體の建造には廣範圍に互り電氣熔接が應用され、銲接に比し約五〇〇噸の重量を軽減し得たと認められる。船體の約六五%が熔接で出來て居り、その中には縦横の隔壁・甲板・下部格納庫以上の舷側外板と肋材、及び艙部一〇〇呎までの構造である。但し飛行甲板裏の深梁には應用しない。熔接工は毎日約一五〇人が船臺上に働き、約五〇人が工場内で働いた。補強材と甲板梁には丁材が多く用ひられたが、火造りを止めて熔接材で構成された。艙材も同じく板を曲げ熔接して造られた。

特別の構造は飛行甲板であつて、これは板を横方向に張り、八呎乃至十二呎毎にあるチーフガーダー上にて衝き付

け熔接された。船體前部の熔接工事は最初ニュートラル・アキシスの所から熔接し始めて、上下に工事を進め、左右同一時に施行した。電弧熔接の箇所は水防試験にも好成绩を示した。

機關局長サア・ジョージ・ブリス氏講演

從來の經驗によると航空母艦の機關は恰かも驅逐艦の如く操縦されねばならぬ。従つて容易に短時間に急速に出力の變化が出来る様装置することが必要である。機室には當直機關將校用に防音管制室が設置され、その内に艦橋、機室、機室との諸通信器及び諸計器が裝備されてゐる。機關の操縦もこの管制室から行はんとする提議もあつたか、理由あつて實現しなかつた。飛行機發着の際には士官一名は管制に一名は實際操縦に當るのである。艦への空氣送入法の改善により全力附近では機室は實に冷し過ぎる程になつた。機室容積の關係から又豫想外に補機所要馬力の要求大であつたから、補機の配備には相當問題も起つたが、機關は概して極めて良好な成績を挙げた。

P・C・フォード大佐は右に附言して曰く、航空母艦は飛行機發着の際はその速力が全力五分の一から五分の四以上にも變化し、且つ艦隊との位置も考慮すべきものであるから、安全範圍内で出来るだけ大なる加速度と減速度とを要する。故に機關は簡單のもので、急速なる速力變化に耐へ且つ容易に管制されるものたるを要する。高壓高温蒸氣使用の結果、煙突温度が飽和蒸氣使用のものより著しく高い。この煙突からの高温度瓦斯はエア・ポケットを作る。故にアーク・ローヤルでは煙突瓦斯温度を低下すべく特別施設がある。又淡煙焚火に努める。敷基の艦は埋火し置き萬一の場合直ちに全力汽缸に應じ得る準備を行ふものである。

以上の説明によれば本艦が如何に慎重に計畫建造されたかが判る。在來の諸艦に就ての實驗の成績を尊重し、新たに我々の實驗を加へたる結果、操縦し易く安定性も充分であつて、確かに海上の一大偉力であると信ぜられる。又これを改良したる爾餘の六艦も夫々優秀なる航空母艦と認むべきである。今次の對獨戰爭の初期に爆彈により損傷した

アーク・ローヤルの機關部計畫要領

操縦性能

フォード大佐の進水珍事

アークの改造

米國の航空母艦の竣工

が、英國では致命的で無いと發表し、獨逸側では沈没せしめたといふが真相は未だ不明である。

建造中の六隻中の一艦「フォード」は一九三九年八月十七日ベルファストのハリランド・ウルフ造船所で進水の際、不幸にも英國造船業の久しき歴史にも稀なる珍事が起つた。進水時刻三十分前參列諸員の出揃はざる際、艦は自然に動き出し船抱臺は依然トリッガーに支へられて動かず、遂に前方鞍板を倒しつゝ進水した。多少の死傷もあつたが船體には差したる損害も無く、實際艦浮揚のとき船部に過大の壓力が加はつた様子も無く、潤滑油脂が燃えたことも無い。尙當日は微風で勿論風壓によるものでも無く、船體に何等の損害なく進水したが、英國造船技術の傳統を潰すものとして技術的に論議されたのである。

英國の最も古き航空母艦「アーク」は一九三九年に飛行機の無線操縦艦に改造された。無電操縦機（クイン・ピース）八機を備へ、これが整備修理に要する人員と資材に對する機裝が施され、且つ艦隊作業例へば射撃訓練用標的の曳行射撃に關する撮影實習等に使用される飛行機一箇分隊を收容するよう設備された。これ等の改造により「アーク」は甲板飛行不可能となり、射出機の新型式たる「アクセレレーター」装置によつてのみ飛揚が出来ることになつた。

(二) 米國の航空母艦

昭和十二年（一九三七年）に竣工したるものと報ぜられた航空母艦「エンタープライズ」及び「ヨークタウン」は、その翌年七月と九月に實際に竣工就役した。初め一九三三年「ニューポート・ニューズ」造船所に注文を發したときは四十三ヶ月乃至四十七ヶ月後竣工予定であつたが、當時労働問題と材料蒐集の困難とに遭ひ、起工後れて一九三四年五月と七月となつた。かくて「ヨークタウン」は豫定より後ること半歳にして一應竣工したるも、その試運轉の際に主機減速裝置及び焰管に大缺陷を發見し、これが改修に約四ヶ年を要して一九三八年七月と九月に漸く完成就役した。この缺陷は製造者の過失と認められ改修工事費はその負擔となつたとのことである。

建造中のホーネットは二〇、〇〇〇噸といひ右兩艦と同型艦と認めらるる故、右兩艦の性能等を詳記する(U・S・レヴェーに據る)

ヨークタウ
ン級の
性能

搭載機數

ヨークタウン級は基準排水量一九、九〇〇噸、水線に於ける長さ七九一呎、全長八〇九・五呎、幅八三呎三吋、平均吃水二一呎八吋にして、その長さに比し幅員甚小なるは計畫速力三十四節を得るに必要なべし。艦の推進軸馬力は十二萬であつて、汽罐はバブコック・ウィルコック型九基である。

この級は飛行機百臺以上を格納し得るよう報ぜられたるも、實際の常備機數は七十五臺である。この數は米國海軍全航空母艦を通じての平時基準の搭載量である。即ち常備機各十八機を以て編制せる爆撃機隊、戦闘機隊、偵察機隊及び雷撃機隊の四隊に分ち他の三機を雜用に供す。艦には射出機二基を設備し、飛行甲板の右舷側には島式指揮艦橋を設け、又水面に着せる飛行機を收容し得るダビットを用意しあり。

武器と防
禦

防禦武器は五吋砲十二門と多數の小高角砲より成る。又防禦甲板と機關部に於ける幅狭き装甲とを有す、この厚さ不明なるも中口徑砲を防ぐに足るものと思はれる。水面下の防禦も完備せる由なるも不明である。

乗組員

乗組員は士官准士官及び少年航空兵合計百七十名前後、兵員千九百名なりとのことである。この士官中飛行隊に屬する者は約半數であつて各中隊の長は海軍少佐、その副長は大尉一人、外に大中尉十人少年航空兵十人を以て、各中隊附屬の士官の全員となる。

新舊航空
母艦の優
劣

この級はサラトガ級に比すれば非常に小型なるも戦闘能力に至つては殆んど伯仲するものといふべく、更に標的面を減少せること、速力の優秀なること、格納機數略同數なること、故に行動上甚だ經濟的なること等の利點を有す。新艦の前者に劣る唯一の點は備砲の劣勢なることであるが、大航空母艦に於ける八吋砲の利點の如きは甚だ疑はしいものである。要するに右の諸點を綜合考察すれば新舊航空母艦は殆んど對等のものとなり、若し排水量一噸當りの建造費を以て論ずれば、新艦は却つて舊大艦よりも有利である。

英米航空
母艦の比

次にこの級と英國の新航空母艦アーク・ロイヤルとを比較するに、英艦はその排水量米艦より二千噸多きにも拘らず、少くとも公表されたる範圍に於てはこれと拮抗すること能はざるを示す。即ち英艦は米艦と同數の飛行機を搭載し得る設備あるや否や疑はしく、又その速力に於て數節下るからである。尙ほこれを日本の赤城加賀に比するも戦術上の價値斷然優秀であると稱してゐる。

最新艦ヲ
スブ

米海軍は右の外ワスプなる一航空母艦を建造中である。この艦は一九三六年ラングレイの代艦として起工され、レインジャーと略同型である。ワスプは排水量一四、七〇〇噸、三十八口徑の一四種砲八門を主砲とし最早竣工に近きものと思はる。尙この外に新擴張法案には下院を通過せるもの二六、五〇〇噸級三隻と傳へられる。

(三) 獨國の航空母艦

建造中の
獨國航空
母艦

今次對英開戦までは航空母艦を有せざりしも一九、二五〇噸のもの二隻を一九三六年(昭和十一年に)起工したれば、少くもその一艦は最早完成したものと認められる。即ち昭和十三年十二月に進水したるグラフ・ツェッペリンは基準排水量一九、二五〇噸、全長二五〇米、幅二七米、吃水五・六米、速力三二節といはれ、主砲六吋砲十六門、副砲は四吋高角砲十門、一・五吋砲二十二門、飛行機四〇臺を搭載すると傳へらる。

右によれば列國航空母艦の飛行機搭載數は一般に七〇乃至七五機なるに對し僅かに四〇機に過ぎないのは、明らかに兵裝、装甲並に速力の爲めに犠牲となつたものであらう。

航空母艦
の一般性

元來航空母艦はその使用に鑑み、装甲を軽くして防禦砲火を重くし且つ戦闘を回避するために行動力を大ならしめ、一に護衛艦の蔭に隠れて大型巡洋艦と對抗するが如きことなからしむると云ふ概念の下に出發してゐる。然るに獨國の航空母艦は現存する重砲裝の乙級巡洋艦よりも兵裝に於て優秀であり、且つその防禦は六吋砲彈に抗し得るも

のと推定される。この點から英海軍の保有する巡洋艦の兵装に對比して考察すると、獨國のグラフ・ツェッペリン級は兵装、速力、装甲等の諸點に於て巡洋艦を兼ねるものであるといふ結論に達する。獨國が斯くの如き交戦力を有する新型航空母艦を建造するに至つた理由に就ては深く説明されてゐないが、將來戦に於てこれ等の航空母艦はバルチック海の警備任務に限定されることなく北海並びに大西洋に進出する意圖あるものと認められ、英國がこれに對し少なからず脅威を感じ居ること明らかである。

獨國航空母艦が如何に優秀であつても、又如何なる航空母艦であつても一般に脆弱性を有することは免れず、砲火又は爆彈によつて飛行甲板の使用不可能に陥り、格納庫の被害は元より、燃料庫の爆彈さへ惹起する恐れが多い。

(四) 佛國の航空母艦

航空母艦はベアルン(二二、〇〇〇噸)一隻なりしも、現在一八、〇〇〇噸二隻を計畫起工し、ジョッフル及びベインルヴェと命名され、共にサン・ナザール・ペンホエー造船所で建造中である。兩艦は十三種砲八門を搭載し、速力三十二節、飛行機四〇臺搭載且つ若干の防禦を有すること以外詳細不明である。兩艦の竣工は一九四二年までに完成することが期待されてゐる。

(五) ソ聯邦の航空母艦

最近巡洋艦として起工したるものを航空母艦に改造したスターリンは一九三九年に竣工したるものと思はるるも、その排水量九、〇〇〇噸、速力三〇節といふ以外詳細不明である。尙二、〇〇〇噸級二隻建造中といはるるも同様不明である。内一隻はクラスノエ・ズナミヤと命名されたとあるも或はスターリンの改名したるものともいはれる。

佛國の航空母艦

ソ聯邦の航空母艦

第三章 巡洋艦

超甲級巡洋艦計畫

米國海軍にては一九三九年議會に提出して下院を通過せるものに排水量、備砲等不明なるも、八吋を越える大口徑砲を搭載する、超甲級巡洋艦ともいふべき大型巡洋艦三乃至四隻の計畫ありと認められる。斯かる大型巡洋艦は倫敦會議及び華府會議の條項によれば、巡洋艦にあらずして主力艦の區分に入るべき艦型である。

本件につき當時米海軍作戦部長スターク提督の語るところによれば、從來の一萬噸級が八吋砲を、獨逸の豆戦艦が十二吋砲を搭載せるに對して、米國の超巡洋艦の主砲は十四吋砲に定るだらうが、主砲の数は無論戦艦よりも少く噸數は二萬噸となるべく、防禦力は豆戦艦よりも遙に優秀となるであらう。……大體に於て米國海軍は巨砲大艦主義を持續し最近の世界情勢に鑑みて十分に渡洋戦を敢行出来るやうに新艦船を設計する方針である」云々

右は現在の所米國に於ける一部の議論にして實現性不明なれば、本章にては専ら八吋砲搭載の甲級巡洋艦に就いて記述する。但し英佛伊の各海軍にては現在甲級巡洋艦の計畫又は建造中のものなく、各國何れも乙巡洋艦の建造に忙はしき狀況なり。従つて本章にては米國、獨國及びソ聯邦の重巡洋艦のみを記述する。

第五圖乃至第八圖は各海軍新巡洋艦を示し、第三表は各國新巡洋艦の項目を記す。

第一節 甲級巡洋艦

(一) 米國の甲級巡洋艦

米國海軍が華府條約により保有し得る甲級巡洋艦は總數十八隻であつたが、その最後の十八番目のウイチタは昭和十四

第十八番目のウイチタ

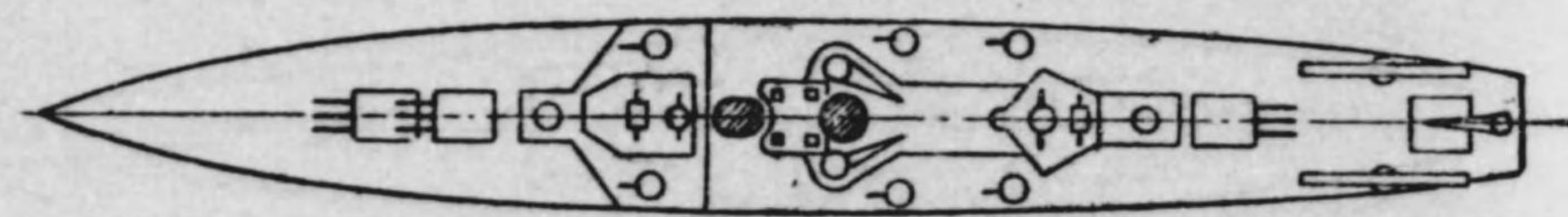
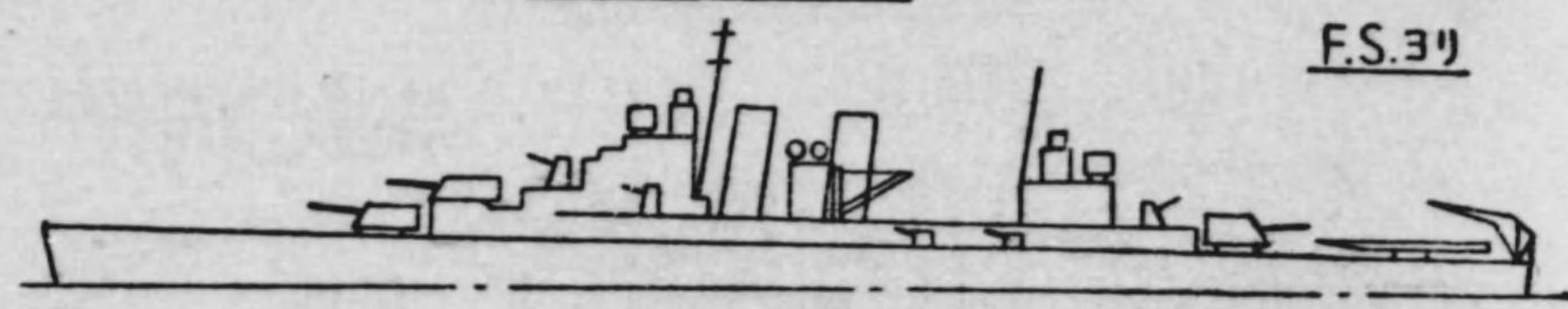
第三章 巡洋艦

第六圖

新大型巡洋艦ノ圖(其ノ二)

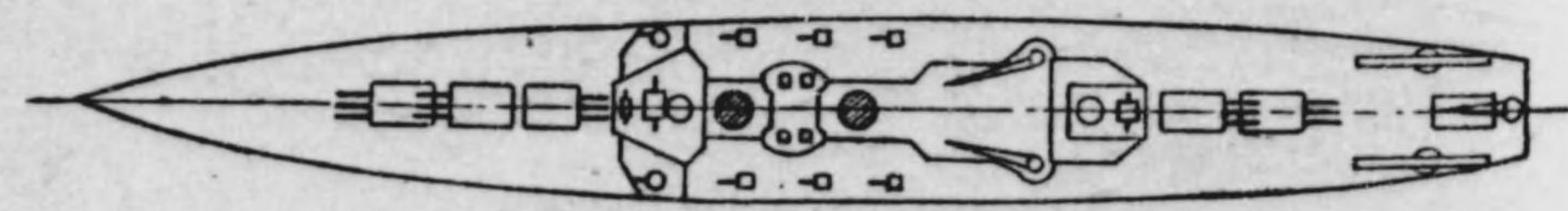
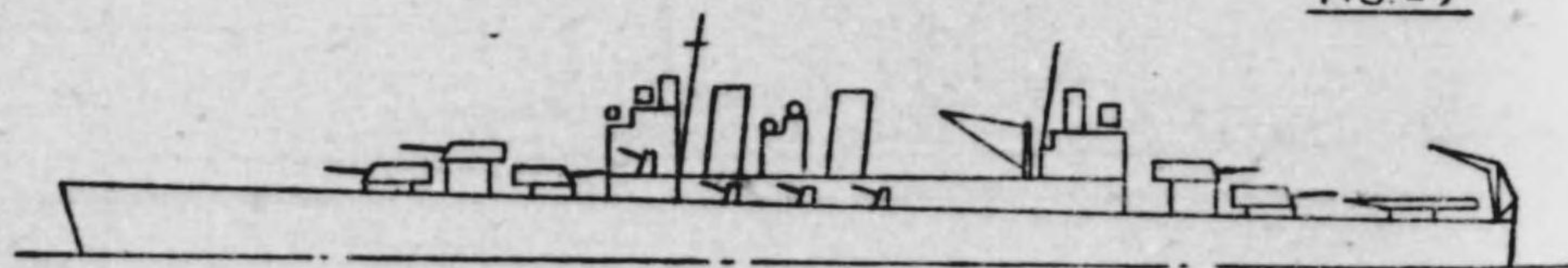
米 WICHITA

F.S. 311



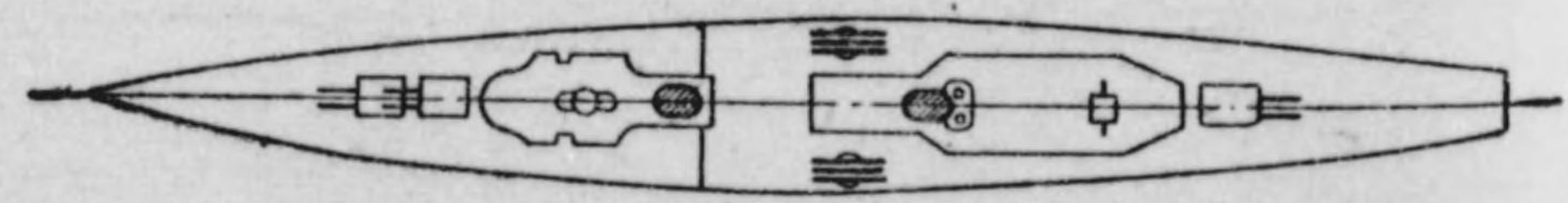
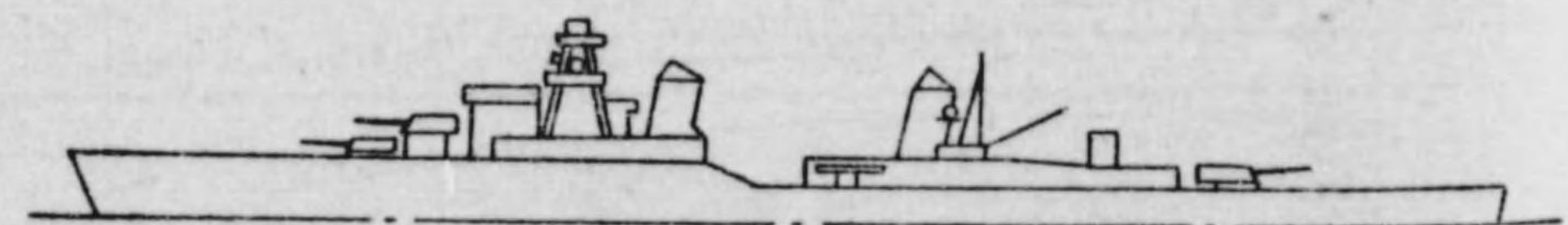
米 BROOKLIN 級 (9隻)

F.S. 311



蘇 KIROV 級 (4隻)

F.S. 311

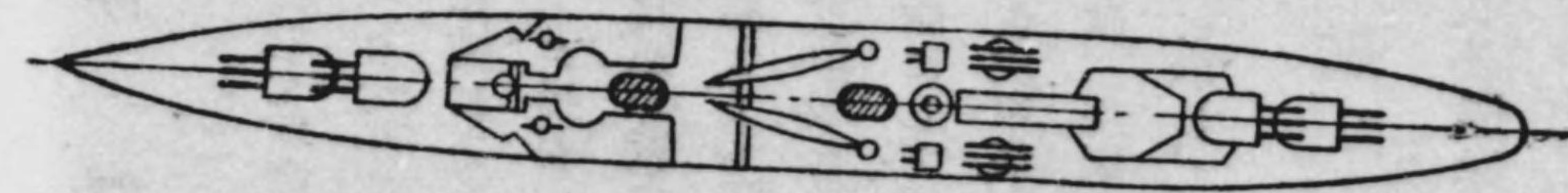
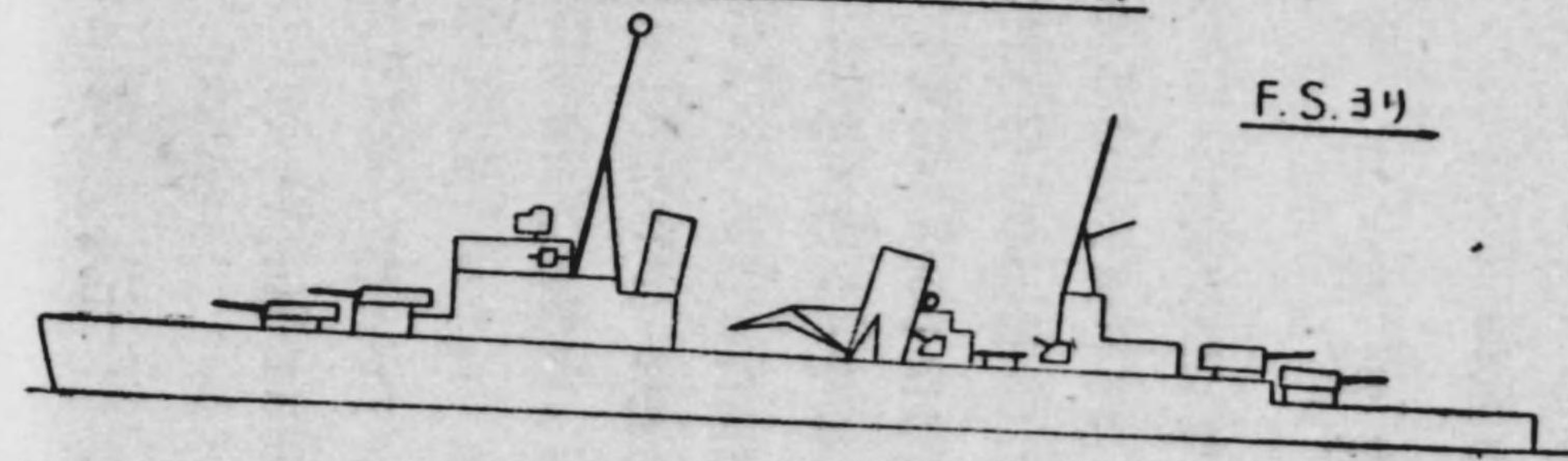


第五圖

新型巡洋艦ノ圖(其ノ一)

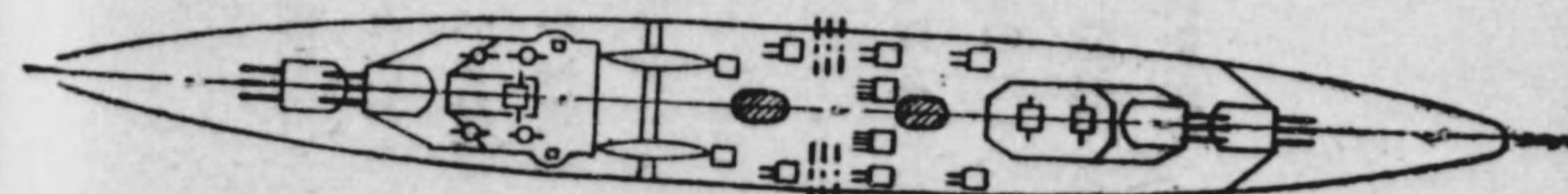
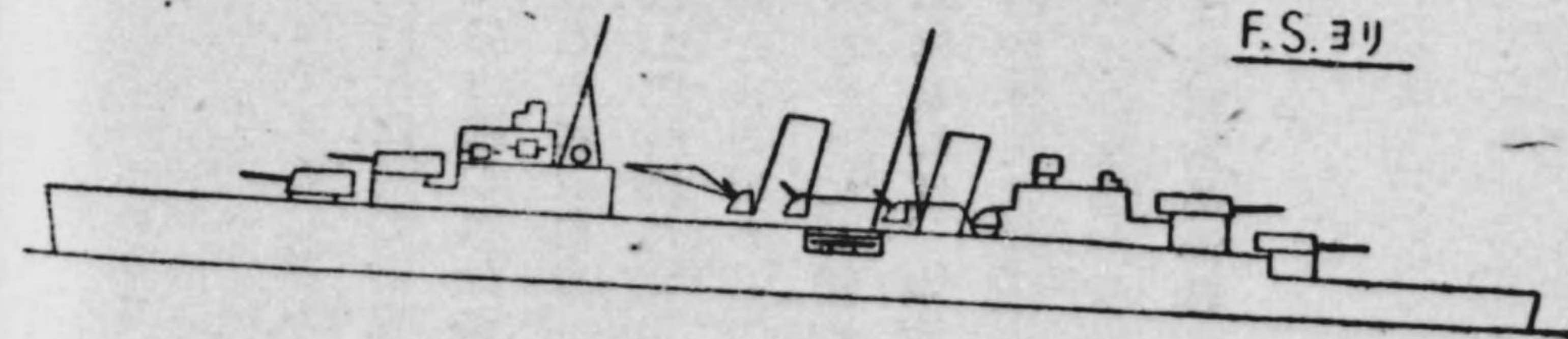
英 SOUTHAMTON 級 (8隻)

F.S. 311



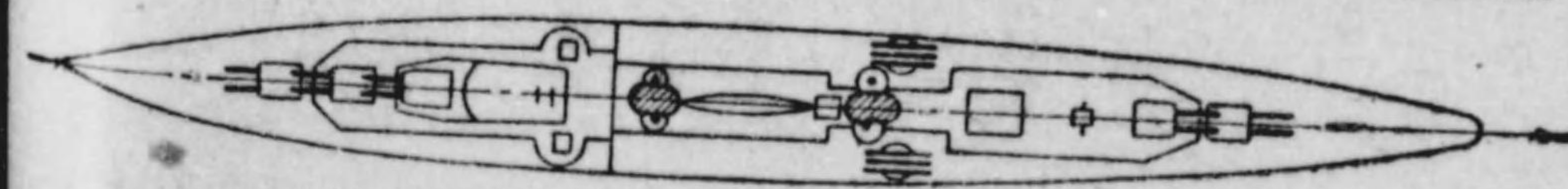
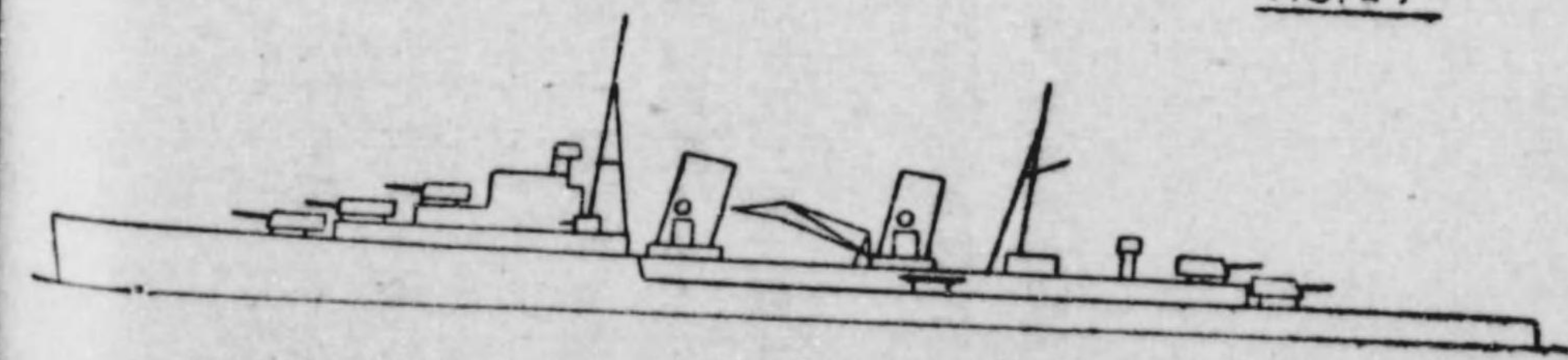
英 EDINBURGH 級 (2隻)

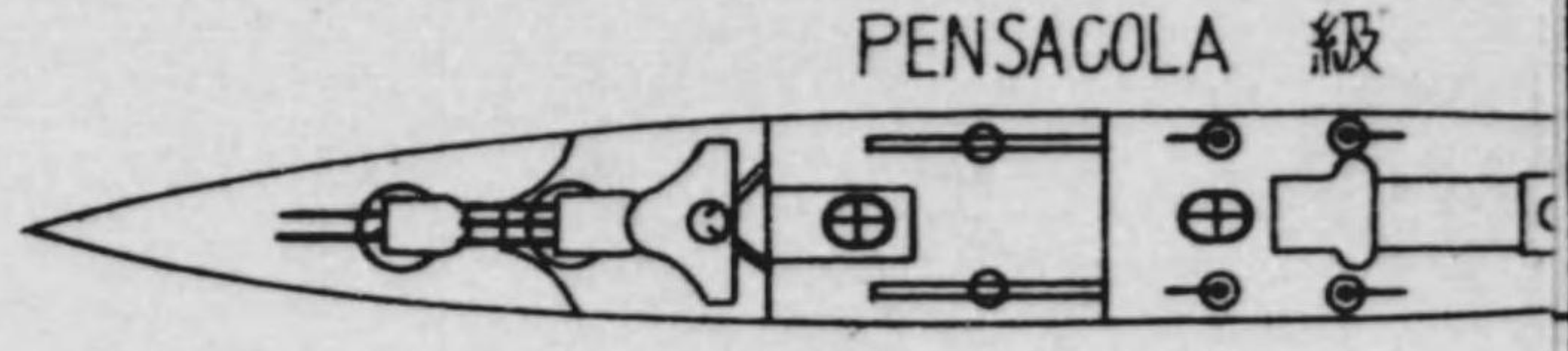
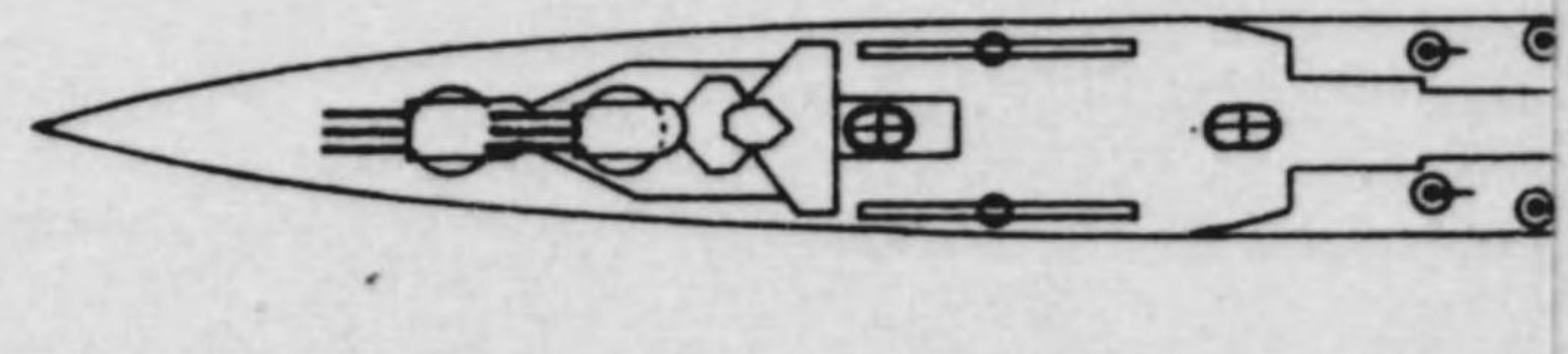
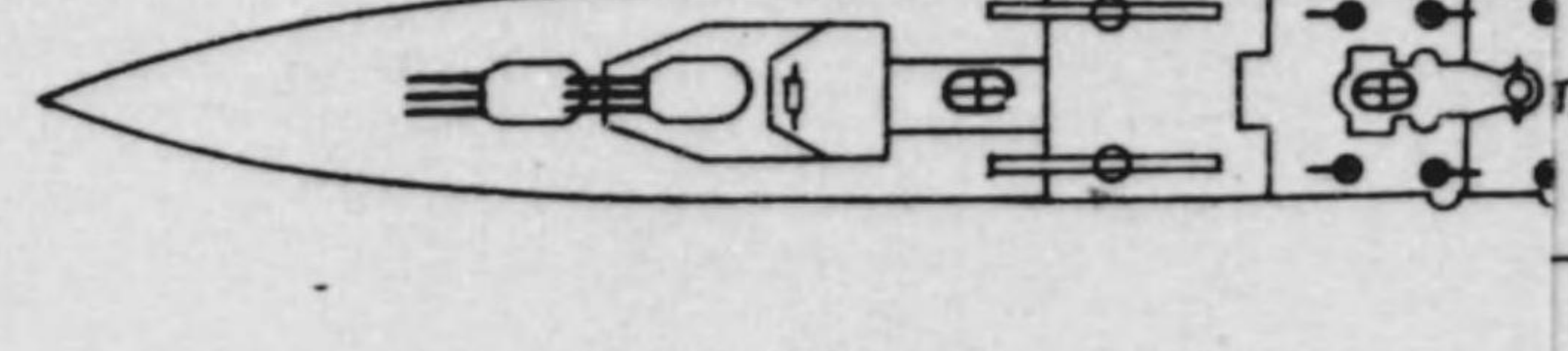
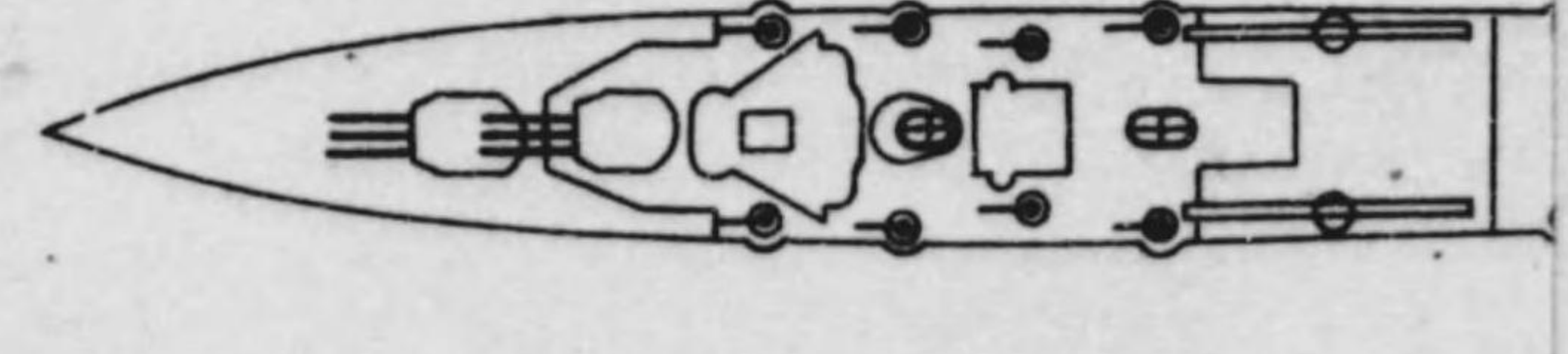
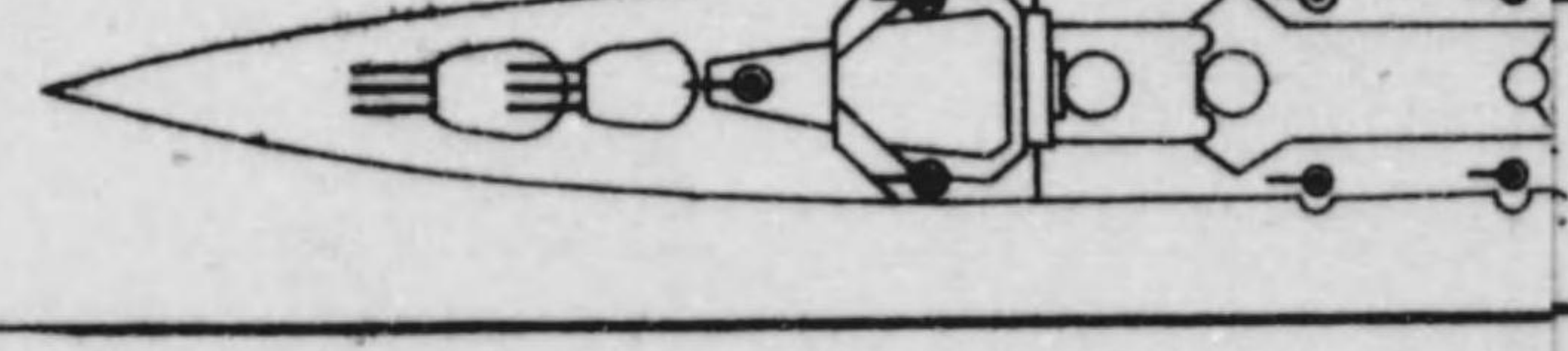
F.S. 311



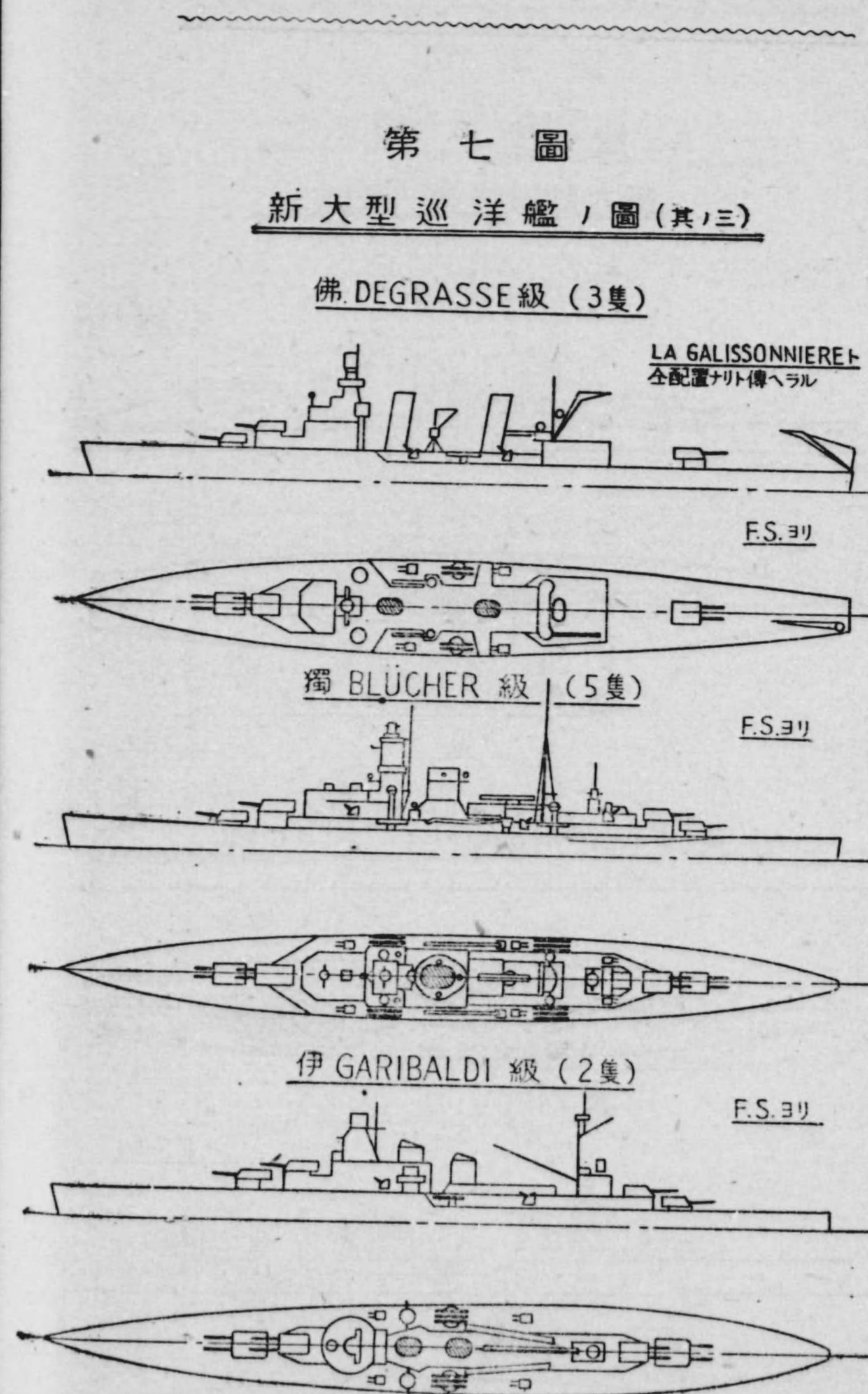
英 DIDO 級 (10隻)

F.S. 311




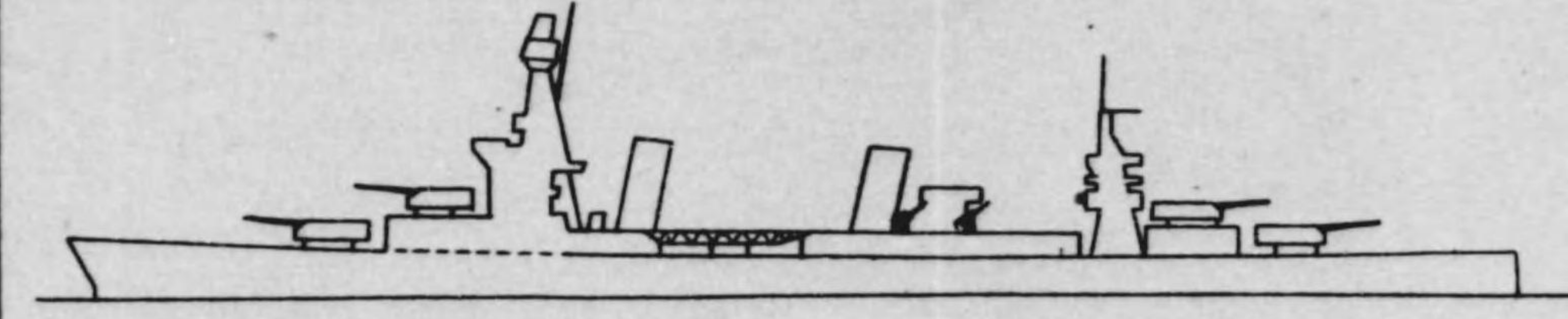
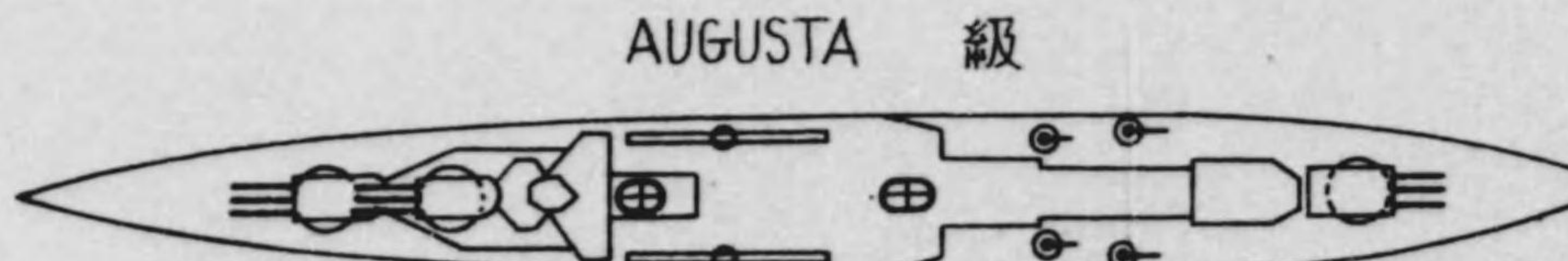
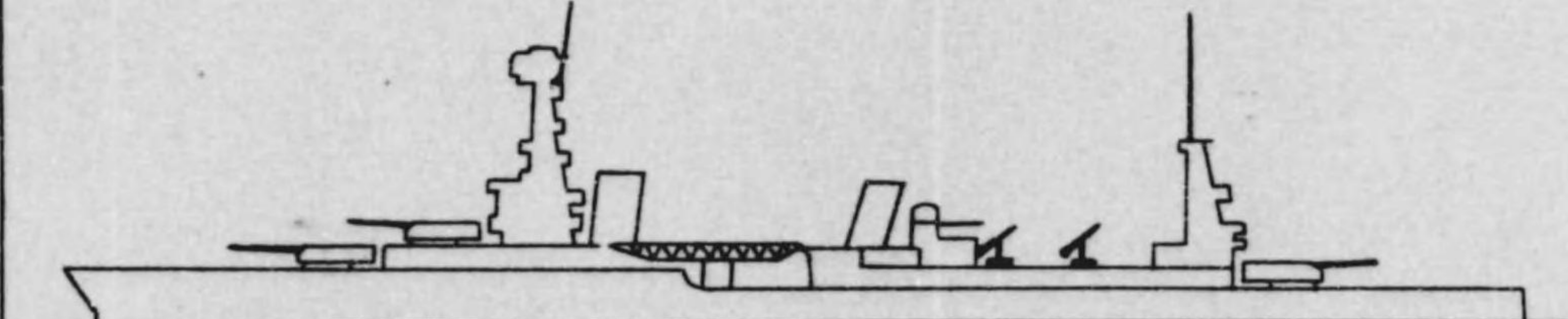
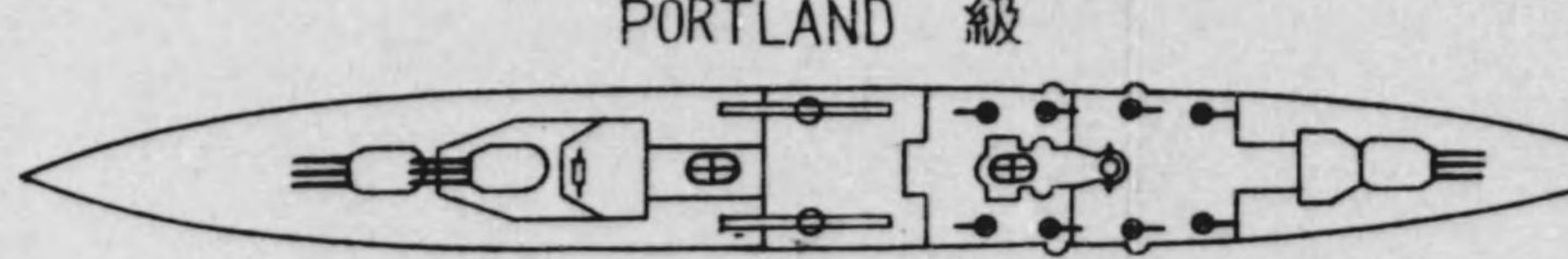
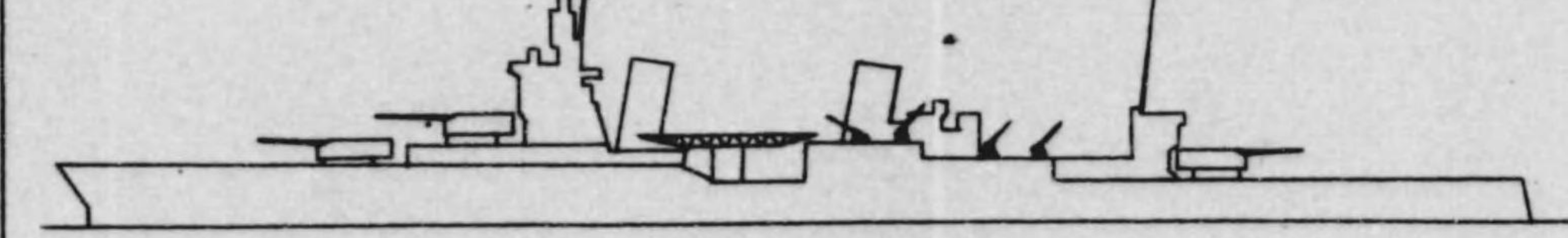

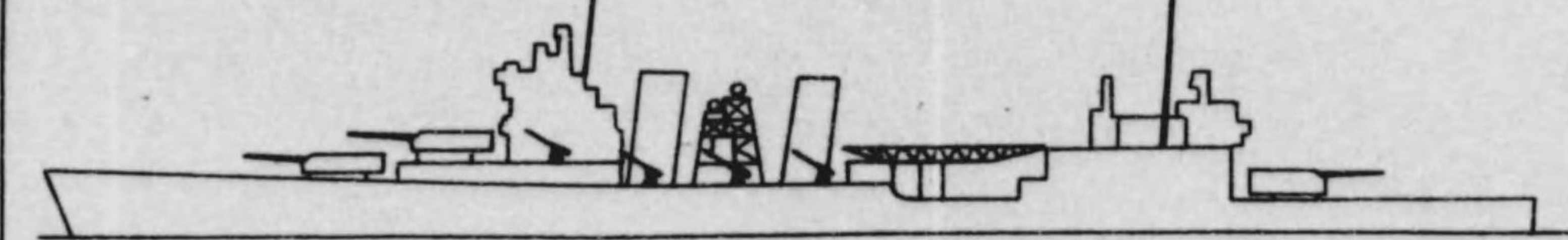


| 艦名 | 平面圖 | 魚雷 |
|---|---|------|
| 1. PENSACOLA 2. SALT LAKE CITY | PENSACOLA 級  | 21x6 |
| 3. AUGUSTA 4. CHESTER 5. CHICAGO 6. HOUSTON 7. LOUISVILLE 8. NORTHAMPTON | AUGUSTA 級  | 21x6 |
| 9. PORTLAND 10. INDIANAPOLIS | PORTLAND 級  | 21x6 |
| 11. ASTORIA 12. MINNEAPOLIS 13. NEW ORLEANS 14. TUSCALOOSA | ASTORIA 級  | 0 |
| 15. SAN FRANCISCO 16. QUINCY 17. VINCENNES 18. WICHITA | WICHITA 級  | 0 |

第八圖 米國甲級巡洋艦艦型比較圖



第三篇 海軍艦船
第七圖 新型巡洋艦ノ圖(其ノ三)

第八圖 米國甲級巡洋艦艦型比較圖

| 艦名 | 平面圖 | 側面圖 | 排水量 | 速力 | 砲 類 | | | 魚雷 |
|---|---|---|----------------|------|------------------------------------|-----------------------------------|-----------------------|-------|
| | | | | | 主砲 | 高角砲 | 機銃 | |
| 1. PENSACOLA 2. SALT LAKE CITY | PENSACOLA 級  |  | 9,100 | 32.7 | 8 ^c / ₅₅ ×10 | 5 ^c / ₂₅ ×4 | 3Pdr.×2 | 21"×6 |
| 3. AUGUSTA 4. CHESTER 5. CHICAGO 6. HOUSTON 7. LOUISVILLE 8. NORTHAMPTON | AUGUSTA 級  |  | 9,050 | 32.7 | 8 ^c / ₅₅ ×9 | 5"×4 | 3Pdr.×2 ⁸ | 21"×6 |
| 9. PORTLAND 10. INDIANAPOLIS | PORTLAND 級  |  | 9,800 9,950 | 32.7 | 8 ^c / ₅₅ ×9 | 5"×8 | 3Pdr.×2 10 Smaller | 21"×6 |
| 11. ASTORIA 12. MINNEAPOLIS 13. NEW ORLEANS 14. TUSCALOOSA 15. SAN FRANCISCO 16. QUINCY 17. VINCENNES | ASTORIA 級  |  | 9,950 | 32.7 | 8 ^c / ₅₅ ×9 | 5"×8 | 3Pdr.×2 10 Smaller | 0 |
| 18. WICHITA | WICHITA 級  |  | 10,000 | 32.5 | 8 ^c / ₅₅ ×9 | 5"×8 | 3Pdr.×2 10 Smaller | 0 |

年に完成し十八隻全部揃つたのである。これ等の十八隻は大體同一艦型なるも計畫上多少づつ變更され、概ね五箇の艦型と成る。その状況は第八圖に示す米國甲級巡洋艦々型比較圖の通りであつて、外見上の變化項目に就て略記すれば左の如し。

第三表 新巡洋艦

| 國名 | 艦名 | 基準排水量 | 速力 | 馬力 | 兵裝 | 起工 | 完成(豫定) |
|----|---|--------|------|-------|--------------------------|--|--------------------------------------|
| 英 | サウザンプトン ニウカワツスル シエフイルド パミントン グラスゴウ | 九,100 | 三三 | 五,000 | 六吋一二門 四吋高角八門 | 三四・二 三四・一 三四・一 三四・一 三四・一 | 三七・三 三七・三 三七・三 三七・三 三七・三 |
| | グロスター リプスター マンチエスター | 九,000 | 三三 | 五,000 | 二吋發射管六門 | 三四・九 三四・三 三四・三 | 三四・一 三四・一 三四・一 |
| | エデンバラ ベルファスト | 10,000 | 三三・五 | 八,000 | 六吋一二門、四吋高角一二門 二吋發射管六門 | 三四・三 三四・三 | 三四・一 三四・一 |
| | ダイドウ ユウリヤラス ナイアド ボニア シリマス ボナベンチ ハミオン チャリオン クレオパ シラ | 五,四〇〇 | 三三 | ? | 五・二五吋一〇門(高角式) | 三九・一 三九・一 三九・一 三九・一 三九・一 三九・一 三九・一 三九・一 三九・一 三九・一 | (四一) |

第二篇 海軍艦船

| 佛 | | 米 | | | | 他 | | | | | | | | | |
|---------------------------------|------------------|--------------------|-------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| ギウセツベ・サボイア | ドグラス ギシヤン | サン・ゲヌアン | アトランタ | コロンビア | クリブランド | セントルイス | ウイチタ | フイジョー | ケンヤ | モウリヤ | ニゼリア | トリニダード | ガヤン | ウガンダ | 他四隻 |
| 七、八七四 | 八、〇〇〇 | 六、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 九、六〇〇 | 九、六〇〇 | 一〇、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 八、〇〇〇 |
| 三三 | 三三 | 三六 | 三三 | 三三・五 | 三三・五 | 三三・五 | 三三・五 | 三三 | 三三 | 三三 | 三三 | 三三 | 三三 | 三三 | 三三 |
| 一〇〇、〇〇〇 | ? | ? | ? | 一〇〇、〇〇〇 | 一〇〇、〇〇〇 | 一〇〇、〇〇〇 | 一〇〇、〇〇〇 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |
| 六時一〇門、三・九時八門 七時一〇門、二・一時發射管六門 | 六時九門 三・五時高角八門 | 六時九門 (又八・五時一二門) | 六時一二門 | 六時一五門 五時高角八門 | 六時一五門 五時高角八門 | 六時一五門 五時高角八門 | 八時九門、五時高角八門 | 六時十二門 四時高角八門 | 六時十二門 四時高角八門 | 六時十二門 四時高角八門 | 六時十二門 四時高角八門 | 六時十二門 四時高角八門 | 六時十二門 四時高角八門 | 六時十二門 四時高角八門 | 六時十二門 四時高角八門 |
| 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 |
| 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 |

| 蘇 | | 獨 | | 伊 | | 他 | | | | | | | | | |
|-------|---|---------|---|----------------------|--|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 三隻計畫中 | キローフ マキシム・ゴルキ オクビシエフ オルゾニチツツエ | P o N M | ブリュッセル アドミラル・ヒツパー ザイドリツツ リユツツオウ | アマラグリオ・コスタ ツオ・チアノ | アツチリオ・レゴロ、ス キビオネ・マリア、クラウ チオ・チベリオ、バオロ、 エミリオ、コルネリオ、 シルラ、オッタビアノ、 アウグスト、ボンベオ、 マリーニョ、ウルビオ、ト ライアノ、ウイアサニオ、 アグリツパ、クラウザオ、 マルツ、ギウリオ、ゲル マニコ | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | |
| 八、〇〇〇 | 八、五〇〇 | 八、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 | 八、〇〇〇 | 三、三六三 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |
| ? | 三三 | ? | 三三 | ? | 四一 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |
| ? | 一〇〇、〇〇〇 | ? | 八〇、〇〇〇 | ? | 一三〇、〇〇〇 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |
| 六時九門 | 七・一六時六門、四時高角四門 三七時發射管四門 二一七時發射管六門 | 五・九時 | 八時八門 四・一七時高角一二門 三七時發射管一二門 二一七時發射管一二門 | 六時一〇門 | 五・三時八門 六・五時高角六門 二一七時發射管八門 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |
| ? | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 |
| ? | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 | 三三・九 |

主砲

一、主砲砲數及び配置

主砲は何れも五十五口径八吋砲なるも最初の二隻は十門を搭載し、その後の十六隻は一門を減じて九門となり、従つてその配備を異にす。前二艦は三聯裝二基、二聯裝二基より成り、各一基づつ背負式となつて艦の前後に配置された。後の十六隻は三聯裝砲塔三基となり、その二基は背負式にて前甲板に在り、一基は後甲板に置かれる。

高角砲

二、高角砲の數及び配置

高角砲は二十五口径五吋砲にして最初の二隻と次の六隻計八隻は總べてその四門を備へ、位置は第二煙突の後方に在り、初め二隻の方は幾分煙突に近い。第九、第十隻目の二艦は倍數の八門に増加し、後部煙突より後方に、丁度第一群と第二群を合はせたる位置に配備される。次の第十一隻目より第十七隻目までの七隻は、その位置を變更し、後部煙突より前方に艦橋側に至る間に配置せらる。最後のウイチタにては、前後艦橋の間に各舷側に三門宛と、前艦橋前に一門、後艦橋後方に一門を配置し、以前の艦は片舷に二門又は四門の砲火を開き得るに對し、最後のものは片舷に五門齊射し得ることとなりてその威力増大す。高角機銃も初の八隻には無く、後の十隻にはその十門を裝備した。

三、魚雷兵裝の變更

前期の十隻には二十一吋魚雷發射管六門を裝備しあるも後期の八隻にてはこれを撤廢した。

四、搭載飛行機の裝置

搭載飛行機の數は初め四機なりしが、第三乃至第十五隻までの十三隻には四乃至六機搭載する由の記事がある。又その射出機は何れも二基なるが、その位置は前期の十隻は二本の煙突の間兩舷に一基づつ備へられ、次の七隻は後部煙突の後方、後艦橋の前方に移され、更に最新のウイチタにては後甲板最尾部に設備され、飛行機格納庫が前諸艦にては大橋基部に大なる格納庫を有したるに反し、後甲板下に移され、後艦橋の部分が著しく小となり、外見上ブルー

搭載飛行機

魚雷

クリン型乙巡洋艦に似る。

五、機關及び煙突配置

機關は何れもパーソンズ式ギヤード・タービンを裝し、その詳細は不明なるも、煙突の配置により漸次改良せられたるを認むることが出来る。煙突は何れも二本であるが最初より次第にその大きさを小にすると同時に間隔近まり、射出機の位置をも變更した。これは他の海軍國と同様その汽罐に高温高壓の罐採用せられたる結果と信ずる。

六、防禦の變化

初期のものは水線帶甲三吋、甲板裝甲一吋半なりしも、第十一隻目からは水線帶甲五吋に、甲板裝甲三吋に増厚された。但しその範圍は不明である。

七、艦橋の形狀變更

前艦橋は何れも多少とも塔形であり、前期のものは挾くて高かりしもの、漸次低くして廣きものと變化した。後艦橋も飛行機格納庫と關聯してその形を改めた。

(一) 獨逸の甲級巡洋艦

獨逸の甲級巡洋艦は計畫數五隻の中二隻は對英開戦前に竣工し、他の三隻は何れも進水を了し今續裝中である。排水量一〇、〇〇〇噸であつて、長さ三三・九呎九吋、幅六・九呎一吋吃水一・五呎五吋。推進機關は内燃機を止めて高壓水管汽罐付きのギヤード・タービン機となし速力三十二節と稱せらる。主砲は八吋砲八門を二聯裝四基とし、その二基づつを背負式にし艦の前後兩方に配置される。副砲は四・一吋高角砲十二門二聯裝六基に備へられ、更に機銃十二門を有する。且つ本型艦には英米のそれと異なり二十一吋魚雷發射管十二門を有し、三聯裝四基として艦の中央部兩

獨逸甲級巡洋艦

防禦

機關

艦橋

獨國は其の袖珍艦を造らず

更に今次開戦前に於ける造船能力から判断すれば、多分の重量が防禦に振向けられたるものと想はれる。英誌の報ずるところによれば水線帯甲は五吋の厚さで水平防禦は袖珍艦の三吋乃至一吋半よりも優れ、砲塔甲鐵は前面七吋基部四吋側壁二吋の厚さを有し袖珍艦に劣つて居ない。
右の甲級巡洋艦に就て考ふべきことは、同じく一萬噸の排水量を有する袖珍艦は多少無理があるのか、又はその必要を認めなくなつたか、獨國もその型の建造を續けず、一萬噸八吋砲搭載艦を他國に倣ひ建造することとなつた點である。

ソ聯の甲級巡洋艦

(三) ソ聯邦の甲級巡洋艦

蘇聯邦には七・一吋砲裝備の巡洋艦建造され、又は建造中と傳へられる。即ちキローフ級四隻であつて、排水量八、五〇〇噸、馬力十萬にて速力三十五節を出すといふ。その主砲は七・一吋砲六門、二聯裝三基として二基を前甲板に背負式に、一基を後甲板に配置する。副砲は四吋高角砲四門と三七耗機銃四門である。又二十一吋魚雷發射管六門を三聯裝二基として中央部に配置してある。

第二節 乙級巡洋艦

(一) 英國の乙級巡洋艦

英國の乙級巡洋艦

英國は乙級巡洋艦としてサウザンプトン級十隻を昭和十二年乃至十四年に全部完成し、現在はダイドゥ級十隻と、

ファイジイ級九隻を建造中である。今次の開戦で工事は正に促進されてゐることと信ずる。尙この級四隻追加建造されることである。

サウザンプトン級

サウザンプトン級の最初の五隻は排水量九、一〇〇噸、馬力七五、〇〇〇に對し速力三二節である。次の三隻は排水量三〇〇噸を増し九、四〇〇噸となり、馬力は六分の一を増し八二、五〇〇となり速力は三一・三節となつた。更に次の二隻エチンバラ級は排水量一〇〇〇噸となり、馬力は八〇、〇〇〇に減し速力は却て三二・五節に増大したることである。この結果は兵裝の増大と共に注意すべきところで恐らくは船體形狀の改良進歩に由るものと思はれる。兵裝を見るにサウザンプトン級十隻は皆六吋砲十二門を主砲とし、三聯裝砲搭四基に備へ、二基づつ背負式として前後兩方に配置され、副砲は四吋高角砲で初めの八隻は八門、後の二隻は同十二門に増加され、魚雷發射管は總べて二十一吋發射管六門を有する。

ダイドゥ級

昭和十二年より起工されたダイドゥ級十隻はその數隻は既に竣工就役し居るものと信ぜらる。排水量は著しく小さく僅かに五、四五〇噸で馬力は公表されざるも速力は三三節といはれる。兵裝は初めの採用である五・二五吋砲十門を備へた。この五・二五吋砲は高角式兼用砲である。

ファイジイ級

昭和十三年に起工されたファイジイ級五隻は既に竣工したるべく、その餘の四隻も昭和十四年に起工されたから現に戦役に従つてゐるものあらう。この級は排水量は再び八、〇〇〇噸となり、速力は矢張り三三節となつて居る。主砲は又前同様六吋砲十二門、副砲も同じく四吋高角砲八門である。
ダイドゥ級とファイジイ級には魚雷發射管の裝備は無いようである。

(二) 米國の乙級巡洋艦

米國の新
乙級巡洋
艦ブルク
リ

第三章 巡洋艦

一〇八

新式乙級巡洋艦ブルクリン級九隻完成し、クリブランド級二隻とアトランタ級四隻が建造中である。ブルクリン級は排水量九、六五〇噸、水線上の長さ六〇〇呎、幅六一・五呎、平均吃水一九呎であつて、主機はギヤードタービン四基、汽罐はバブコック、ウイルコック特型八罐を備へ、總軸馬力十萬計、速力三二・五節である。主砲六吋砲十五門は三聯裝砲塔五基に備へられ、その三基は前部に在り第二砲塔は第一第三砲塔よりも高い。残り二基は後部に背負式に置かれる。副砲は五吋高角砲八門で魚雷發射管を有しない。その代り後甲板の甲板下に飛行機格納庫あり、後甲板には射出機二臺備へられ艦端に飛行機操作作用のクレーンが設けられ特殊の形を爲してゐる。裝甲防禦は頗る完璧を極め、帶甲三吋甲板三吋及び二吋、砲廓五吋、司令塔八吋である、特に水線下甲帯に注意し相當の魚雷若くは機雷の被害を受けても直ちに沈没するやうなことはないとい傳へられる。

次のクリブランド級二隻は排水量八、〇〇〇噸となり、速力は三三節に上り、主砲は六吋砲十二門である。次のアトランタ級四隻は更に排水量小さく六〇〇〇噸となり、速力は一躍三八節に増大され、主砲は六吋九門又は五吋高角砲十二門に減少するものと傳へられる。これ等の六隻は現に建造中である。

米國海軍が輕巡洋艦に魚雷發射管を廢したのは、その代りに對空兵裝を強化したためである。米海軍は魚雷は本質上驅逐艦の武器であるとして新型驅逐艦に列強より一層多數の發射管十六門を裝備するものを計畫せるはその實證である。

(三) 獨國の乙級巡洋艦

排水量八、〇〇〇噸にして五・九吋砲を裝備する乙級巡洋艦四隻建造中である筈なるも詳細不明である。

獨國の乙
級巡洋艦

米國は輕
巡洋艦に
廢射管を

クリブラ
ント級
アトラン
タ級

(四) 伊國の乙級巡洋艦

伊國にはアッチリオ・レグロ級十二隻建造中である。これには古代羅馬の皇帝又は名將の名を附けられ、偵察巡洋艦と稱すべきものである。計畫及び起工は昭和十四年で、三年を以て竣工の豫定である。この級は全長四四四呎 $\frac{1}{2}$ 、最大幅四四呎 $\frac{1}{2}$ 、吃水一三呎で三、三六二噸の豫定排水量を有し、平射高射兩用に適する五・三吋砲八門を以て主砲とする。この砲は甚大なる發射速度に堪へ、その一發の彈量は七〇噸以上のもので、全く新型であると傳へられる。

この級は又副砲として六門の六五耗高角砲を有し、八基の二十一吋魚雷發射管とを以て武裝せられ、且つ機雷沈置裝置を有する。この新型艦は、船體の八〇%までは熔接法に依つて建造せられ、又その速力はこれまでの諸艦中未曾有の高速なるべしと傳へられる。即ち十二萬軸馬力を以て速力四十一節を得る計畫なるも、公試に於ては遙かにこれを凌ぐべしと傳へらる。何時もながら伊國海軍は速力に最も重きを置き常に超高速艦を計畫するものである。更に八千噸級六吋砲十門を備ふる巡洋艦三隻計畫中といはるるも詳かならず。

(五) ソ聯邦の乙級巡洋艦

排水量八、〇〇〇噸にして六吋砲九門を裝備する乙級巡洋艦三隻計畫中と傳へられる。

(六) 佛國の乙級巡洋艦

佛國にはドグラス級三隻の乙級巡洋艦が昭和十三年十四年に起工され現在建造中である。排水量は八、〇〇〇噸速力三四節といはれ、備砲は六吋砲九門及び三・五吋高角砲八門であつて、この前の型の煙突二本の代りに一本となり、

伊國偵察
巡洋艦

新型

ソ聯邦の乙
級巡洋艦

佛國の乙
級巡洋艦

射出機も一臺の代りに二臺となつて居る。

第三節 巡洋艦の變遷

甲乙兩級の出現と任務

巡洋艦に甲乙二級の生れたのは華府軍縮會議の結果であつて、甲級巡洋艦は乙級の輕巡洋艦と巡洋戰艦との合の子である。従つてその任務も夫々異つて來た。甲級重巡洋艦の任務は戰時にありては艦隊任務たる偵察、味方輕快部隊の掩護、戰線に於ける敵攻撃の阻止の外、主力艦隊の増強部隊である。平時には遣外任務たる國權の維持、通商の保護並に貿易の促進にある。乙級輕巡洋艦の任務は空中偵察の補足若くは代行、搜索列の強化並に驅逐艦の誘導にあるが、これ等は攻撃力微弱のために負はされた仕事である。斯の如き任務遂行のため華府會議以來の過去十數年間各國の採りたる巡洋艦建造政策の状況を見るは蓋無用のことで無いと認める。

英國巡洋艦の變遷

英海軍は一九二四年カウンチー級（一〇、〇〇〇噸八吋砲八門）を起工したが、これ等は居住設備良好且つ航洋性に富んでゐる點に見て、通商擁護並に遣外任務に充つるために計畫されたものに違ひない。本型艦は装甲薄く且つこれを補ふべき優速（僅かに三一・五節）を出し得ぬので、戰鬥力は貧弱たるを免れぬ。同艦の八吋砲はこれに伴ふ防禦力さへあれば申分は無いのである。一九三六年に於ける改造によつて舷側甲板を三吋に増したが大した強化とも認められぬ。ヨーク級はこれと趣を異にし、排水量八、三〇〇噸に對し八吋砲六門を備へ却つて戰鬥力を加へた。

米國巡洋艦の變遷

米海軍の巡洋艦建造は速力よりも寧ろ兵裝に重點を置いて、日本に對抗するため、八吋砲十門搭載の低舷艦ペンサコラ級（九、一〇〇噸）二隻を建造した。然るに本級は水線帶甲三吋、甲板裝甲一吋といふ貧弱さで同型艦の標準以下である。ポートランド型二隻は前者より排水量に數百噸を増し、主砲一門を減じ、その代り帶甲を四吋又は五吋と

伊國巡洋艦の變遷

し、甲板裝甲は六吋となり、斯くて米海軍は平凡極まる第一艦に改良を加へ、防禦力優秀にして且つ偉容ある艦型を保有するに至つた。尙ほ特記すべきことは最新型は防禦力非常に大なるに拘らず、重量五〇〇噸を節減し、且つ速力三二・五節を出すに至つた。（この級の甲板裝甲四吋なりとの説あり）。

伊海軍は甲級重巡洋艦建造の大勢に押されて、英佛に比し防禦力の優れるトリエスト型（一〇、〇〇〇噸、八吋砲八門）を建造したが、同時に大速力の輕巡洋艦も計畫建造した。伊國は想定敵手に對應する艦型の建造に専念し、實際必要とする艦隊行動に従ふ艦種を放棄しつゝあつたことを悟り、今やその反動として多數の輕巡洋艦建造に着手した。これ等の艦は前重巡洋艦と同じく三六節の速力を有し、帶甲は著しく増大して六吋となり、甲板裝甲二・七五吋と傳へられる。伊海軍は茲に始めて通商防護と艦隊任務に對し截然と區別を立てた譯である。

佛國巡洋艦の變遷

佛海軍は一九二四年甲級巡洋艦ツールヴィエ級（一〇、〇〇〇噸、八吋砲八門）の建造を企てたが、これ等は速力を以て装甲に代へるといふ擬似的概念に立脚したもので、防禦力は一に速力にのみ依存し戰鬥的價値は零に近い。次のサップレン級では一進歩を示し最少限二・五吋の帶甲となり、八吋砲八門、速力三四節は遣外任務に十分である。但し佛國巡洋艦の缺陷は行動半徑が特に短い點であり、十五節五千哩は通商破壞並に遠隔方面への行動には不十分である。これ等に對しアルゼリー級は装甲厚く而かも速力も相當であるが、その甲板裝甲三吋、帶甲四・五吋艦長の三分の二に及び、速力は三十二節に低下した。

巡洋艦變遷の大勢

要するに重巡洋艦としては八吋砲若くは六吋砲を裝備する八千噸乃至一萬噸型は何れも永く存在するを許されまい。十年間に條約型は舊式になり、又艦型の自然的増大によりても時代遅れになつた。戰艦の速力増大は必然的に重巡洋艦の必要を微弱ならしめつつある。一九三七年から無條約時代となつたが、列強は新たに重巡洋艦の計畫建造をなす所無く、却つて乙級輕巡洋艦の多數を建造し、更に輕快にして高速なる小型偵察巡洋艦の建造に向ひつつあるを

見るのである。斯くて巡洋艦本來の任務に適するものが造られることとなると思はれる。

第四章 驅逐艦

(一) 英國の驅逐艦

一九三七年にはイントレピッド級二十三隻の残り八隻を竣工した。この級は排水量一、三七〇噸、主砲四・七吋四門、二吋魚雷發射管十門を備へ、軸馬力三四、〇〇〇にて速力三六節を出す。一九三八年九月にはトライバル級十六隻とチャベリン級二十四隻計四十隻を完成した。トライバル級は排水量一、八七〇噸、主砲四・七吋八門、二吋魚雷發射管四門を有し、軸馬力四四、〇〇〇にて速力三六・五節を出す。チャベリン級は排水量一、六九〇噸、主砲四・七吋砲六門、二吋魚雷發射管十門を有し、軸馬力四〇、〇〇〇にて速力三六節を出す。

建造中の最新型はライトニング級十六隻であつて、排水量は一九二〇噸、主砲は四・七吋砲六門、二吋魚雷發射管八門を有し、軸馬力四五、〇〇〇にて速力三六・五節を出す。

以上四級の驅逐艦を比較すれば左記第四表の通り。

英國新驅逐艦一覽

| 級 | 名 | 隻數 | 排水量 | 主砲 | 發射管 | 軸馬力 | 速力 |
|---------|---|----|-------|---------|-------|--------|----|
| イントレピッド | | 八 | 一、三七〇 | 四・七吋砲四門 | 二吋管十門 | 三四、〇〇〇 | 三六 |

第四表 英國新驅逐艦一覽

新型驅逐艦の變遷

トライバル級は英國從來の驅逐艦に比し排水量著しく増加し、速力半節を増すために軸馬力一萬を増加した。且つ主砲を陪加して發射管を四聯裝一基としたことは注意を要する。
次のチャベリン級は再び艦型を少しし速力を三六節に保ち、兵裝上には發射管を増加した。最新式のライトニング級にては再び排水量増加し速力の増加に伴ひ軸馬力も増加した。兵裝としての發射管が先きに五聯裝となりたるものを再び四聯裝としその二基を備へることとした。

(二) 米國の驅逐艦

米國の新驅逐艦

一九三四年より三九年に互り六十二隻を完成し、現在三十三隻建造中であつて、他に計畫中のものも十三隻あり。最新型はベンソン級二十四隻で排水量一、六三〇噸、五吋砲六門發射管五聯裝二基十門を備へ、軸馬力五萬にて速力三六・五節である。

これ等の艦は最初のファラガット級、排水量一、三九五噸、五吋砲五門、發射管八門、速力三六、五節のものより漸次兵裝を増加し、五吋砲四門が五門となり六門となり、發射管八門が十門となり十二門又は十六門を備ふるに至つた。これ即ち米海軍が魚雷驅逐艦の専用すべき武器であるとの持論を裏書するものである。斯かる變遷を追ふた米國驅逐艦に就ても昨年(一九三九年)竣工のアンダーソンが完成後復原性能に缺陷あるを發見し、同型艦三十六隻を

アンダーソン級の改造

第二編 海軍艦船

改造又は改計畫することになつたと傳へらるるのは、兵装の増加による重心點の上昇に由るものと認められる。或る艦には六十噸の脚荷を積んだとの事である。従つて將來は發射管据付用の特に高い架台はその高さを減せられるものと信ぜらる。又一九三九年内に引渡された數隻のクレブ級驅逐艦はその高壓過熱汽機裝備に伴ふ困難のため就役が遅れたとのことである。但し速力は公試運轉にて四〇節を超へたるものありとの新聞報もあつた。

(三) 獨國の驅逐艦

一九三五年までにマース級十六隻完成した。この級は排水量一、六二五噸、軸馬力四〇、〇〇〇にて速力三六節を出し、兵装は五吋砲五門、二吋發射管八門を備へる。次のレーデル級六隻は最近に完成した。この級は兵装その他前級と同様で排水量は一、八一噸に増加した。主要寸法に於て前級に比し長さ約一一呎を増し幅一呎半を増加したるは復原性の改訂に由るものにあらざるか。尙ほ現在レーデル級八隻建造中である。

(四) 伊國の驅逐艦

一九三二年以來三十六隻を建造完成した。最新型のアビエール級十二隻中六隻は竣工し尙ほ六隻建造中である。この級は排水量一、六二〇噸、長さ三五〇呎、幅三三・四呎、吃水一〇・九呎、軸馬力四八、〇〇〇にて速力三十九節を出す。兵装は四・七吋砲四門、二吋發射管六門を裝備する。伊國の驅逐艦は兵装を軽くし速力の大なるを特長とする。

(五) ソ聯邦の驅逐艦

諸種の報道も區々にして詳細を知る能はざるも最新型にして建造中のもの九隻ある筈である。その排水量は二、六〇〇噸或は一、八〇〇噸と報ぜられ、何れが正確なるや不明である。武装は五・一吋砲五門、二吋發射管六門にて、速力三十八節と傳へられる。

(六) 佛國の驅逐艦

一九三三年以來ファンタスク級(二、六〇〇噸)六隻、モガドール級(二、八八四噸)六隻等専ら大型驅逐艦を建造したが、現在ハル、アルチ級十二隻建造中である。この級は排水量一、七七二噸、艦の長さ三三三呎、幅三六呎、吃水一〇呎、軸馬力五八、〇〇〇にて速力三七節、兵装は五・一吋砲六門、二吋發射管七門を有す。最近更に一、〇〇〇噸型驅逐艦十四隻起工發令されたりとの報あり、この艦種は商船護衛用に充てらるべく、四吋砲四門及び二吋發射管四門を裝備し、軸馬力二八、〇〇〇にて速力三五節といふ外詳細不明である。

(七) 驅逐艦概観

次の第五表は列強の新型驅逐艦の表であつて、一般の傾向は驅逐艦の排水量は二千噸までに落付き、速力は漸次増大すべく、兵装としては矢張り砲よりも魚雷發射管に重きを置くことが認められる。

第五表 新驅逐艦

| 國名 | 艦型名 | 隻數 | 基準排水量 | 速力 | 馬力 | 砲 | 發射管 | 起工 | 完成(豫定) |
|-------|-----|----|-------|------|--------|--------|------|-------|--------|
| ソライベル | | 一六 | 一、八七〇 | 三六・五 | 四四、〇〇〇 | 四・七吋八門 | 二吋四門 | 三六・一七 | 三六・一七 |

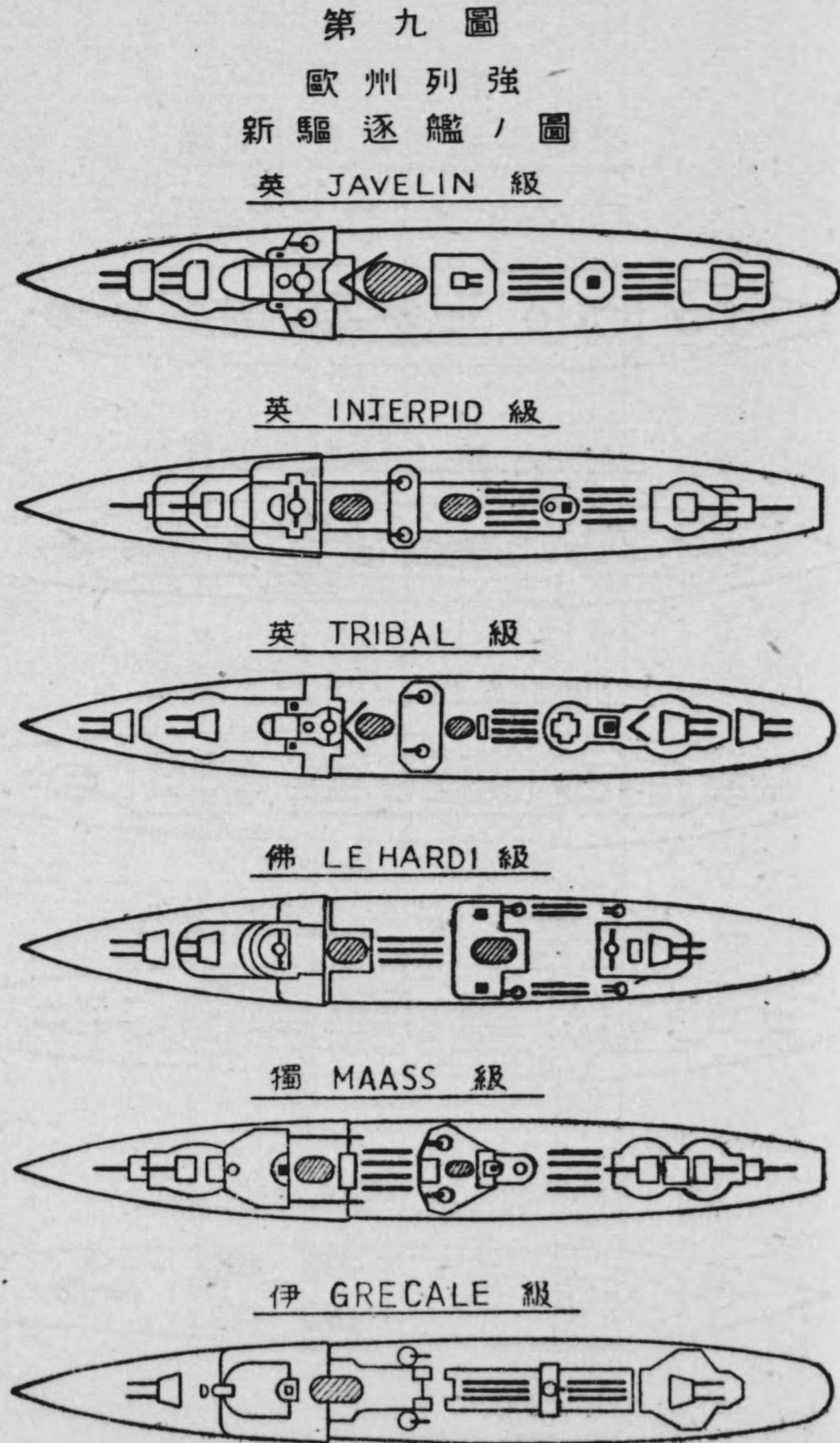
獨國の新驅逐艦

伊國の新驅逐艦

ソ聯邦の新驅逐艦

佛國の新驅逐艦

新驅逐艦概観



第九圖は英佛獨伊、歐洲列強の新型驅逐艦の艦型比較圖であつて、第十圖は米國各級の驅逐艦々型圖である。前圖と比較してその發射管裝置が如何に異なるかを見るは實に興味ある點である。

△註 V R H によればタシケント級は一二隻にて七隻は就役中(その中タシケント最新)

| 蘇 | 獨 | 伊 | 佛 | 米 | | 英 | | | |
|---------|--------|-------|--------|---------|----------|--------|--------|--------|--------|
| | | | | シムス | クレウン | ライトニング | チャペリン | | |
| △タシケント | レーデル | アビエール | ルアルサ | モガドル | ペンソン | シムス | クレウン | ライトニング | チャペリン |
| ストレミナルニ | | | | | | | | | |
| 九 | 一 | 二 | 三 | 六 | 三 | 三 | 三 | 二 | 二 |
| 二、六〇〇 | 二、八五〇 | 一、六〇〇 | 一、七三〇 | 二、八四〇 | 一、六〇〇 | 一、五七〇 | 一、五〇〇 | 一、九三〇 | 一、六九〇 |
| 三六 | 三六 | 三六 | 三六 | 三六 | ? | 三六・五 | 三六・五 | 三六・五 | 三六 |
| 九〇,〇〇〇 | 九五,〇〇〇 | ? | 四〇,〇〇〇 | 六〇,〇〇〇 | ? | 四〇,〇〇〇 | 四二,八〇〇 | 四二,〇〇〇 | 四〇,〇〇〇 |
| 五・一吋五門 | 五・一吋六門 | 五吋五門 | 四・七吋四門 | 五・一吋六門 | 五・五吋八門 | 五吋五門 | 五吋四門 | 四・七吋六門 | 四・七吋六門 |
| 二一吋六門 | 二一吋九門 | 二一吋八門 | 二一吋六門 | 二一・七吋七門 | 二一・七吋一〇門 | 二一吋一二門 | 二一吋一六門 | 二一吋八門 | 二一吋一〇門 |
| | 三六・三九 | 三六 | 三六 | 三六・三九 | 三六・三九 | 三六・三九 | 三六・三九 | 三六 | 三六・三九 |
| 四隻進水済 | 三六 | 三六 | 三六 | 三六 | 三六 | 三六 | 三六 | 三六 | 三六 |